

—国道212号（中津道路）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)—

諸田南遺跡D地区
田代遺跡
上畑成遺跡
馬下遺跡

2008

諸田南遺跡 D 地区

田 代 遺 跡

上 畑 成 遺 跡

馬 下 遺 跡

序 文

本書は、県教育委員会が大分県土木建築部中津土木事務所の依頼を受けて実施した、国道212号（中津道路）道路改良工事に伴う、諸田南遺跡D地区、田代遺跡、上畑成遺跡、馬下遺跡の発掘調査報告書です。

中津道路は中津日田道路の一部をなしており、中津市から日田市に抜ける国道212号線のバイパスとして建設されているものであります。今回報告する四遺跡は、いわゆる下毛原台地と呼ばれる洪積台地を斜めに横切る形で設定された路線にかかる遺跡で、旧石器時代から近世に至る各時期の遺物や遺構が確認されました。古代の人々が、起伏の緩やかな下毛原台地をどのように生活に利用していたかが、これらの遺跡を通しておぼろげながら明らかになってきました。

本書が、埋蔵文化財の保護に向けて、また地域の先人の生活を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、長期間にわたる発掘調査に御支援、御協力をいただきました関係各位に、衷心から感謝申し上げます。

平成20年3月25日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所長 福田 快 次

例 言

- 1 本書は大分県土木建築部中津土木事務所の依頼を受け実施した、諸田南遺跡D地区、田代遺跡（調査は「鳥遺跡」で実施、遺物注記も「鳥遺跡」となっている）、上畑成遺跡、馬下遺跡の調査報告書である。
- 2 調査は国道212号（中津道路）道路改良工事に伴って、平成15年度に上畑成遺跡と馬^も下^{おり}遺跡（大分県文化課実施）、同17年度に田代遺跡、同18年度に諸田南遺跡D地区（いずれも大分県教育庁埋蔵文化財センター実施）において実施した。
- 3 諸田南遺跡D地区の調査については、一部業務を東海アナース株式会社に委託して実施した。
- 4 本文中で表記した遺構番号は、遺物注記との整合性を保つため、現場段階のものをそのまま使用している。そのため、後に遺構ではないことが明らかになったものなどにより欠番が生じている。なお、調査段階では遺構の種別にかかわらず通し番号であるため、遺構種別ごとには通し番号とはなっていない。
- 5 遺構の表記は下記の通りである。
SH(住居跡)、SD(溝)、SK(土坑)、SB(掘立柱建物)、S(性格不明遺構)
- 6 出土遺物は、すべて大分県教育庁埋蔵文化財センターに保管している。
- 7 本書の執筆、編集は田中裕介（大分県文化課主幹）の協力のもと、小柳和宏（大分県教育庁埋蔵文化財センター主幹）がおこなった。

目次

序文

例言

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査組織の構成	2

第2章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	4

第3章 諸田南遺跡D地区

第1節 遺跡周辺の環境	8
第2節 遺跡の概要	9
第3節 遺構と遺物	10
1) 縄文時代	10
a 陥穴	10
2) 古墳時代	12
a 竪穴住居跡と出土遺物	12
b 土坑と出土遺物	14
3) その他の遺構と遺物	17
a 掘立柱建物跡	17
第4節 小結	18

第4章 田代遺跡

第1節 遺跡周辺の環境	19
第2節 遺跡の概要	20
第3節 遺構と遺物	21
1) 旧石器時代	21
2) 縄文時代	21
a 土坑と出土遺物	21
3) 弥生時代	24
a 竪穴住居跡と出土遺物	24
b 貯蔵穴と出土遺物	25
4) 古墳時代	27
a 竪穴住居跡と出土遺物	27
b 掘立柱建物	32
c 土坑と出土遺物	33
5) 中世～近世	36
a 溝と出土遺物	36
b 土坑と出土遺物	40
6) その他の遺物	42
第4節 小結	43

第5章 上畑成遺跡

第1節 遺跡周辺の環境	44
第2節 遺跡の概要	45
第3節 遺構と遺物	46
1) 縄文時代	46
a 土坑と出土遺物	46
2) 古代	49
a 溝と出土遺物	49
3) 中世～近世	51
a 溝と出土遺物	51
b 墓と出土遺物	58
c 土坑と出土遺物	59
d 水田	59
4) その他の遺構と遺物	59
第4節 小結	61

第6章 馬下遺跡

第1節 遺跡周辺の環境	62
第2節 遺跡の概要	63
第3節 A区の遺構と遺物	66
1) 弥生時代	66
a 溝と出土遺物	66
2) 中世	66
a 溝と出土遺物	66
b 水田と出土遺物	68
3) 近世以降	72
a 溝と出土遺物	72
b 水田と出土遺物	73
第4節 B、C区の遺構と遺物	74
1) 遺構	74
2) 遺物	74
第5節 小結	78

第7章 まとめ～下毛原台地の開発と遺跡～

写真図版

報告書抄録

挿 図 目 次

第1図	中津地域の地形と中津道路の路線（明治33年地形図使用、5万分の1）	3
第2図	下毛原台地の遺跡（25,000分の1）	5
第3図	遺跡周辺の地形と調査区位置図（10,000分の1）	7
第4図	諸田南遺跡D地区位置図（2,500分の1）	8
第5図	諸田南遺跡D地区遺構配置図（200分の1）	9
第6図	S-1（陥穴）（40分の1）	10
第7図	S-4（40分の1）	11
第8図	S-7（40分の1）	11
第9図	SH-6（60分の1）	12
第10図	SH-6出土遺物（3分の1）	13
第11図	SK-3（40分の1）	14
第12図	SK-3A出土遺物（3分の1）	14
第13図	SK-5、11、12（80分の1）	15
第14図	SK-5、11、12出土遺物（1）（3分の1）	15
第15図	SK-5、11、12出土遺物（2）（3分の1）	16
第16図	SB-2（80分の1）	17
第17図	SB-10（80分の1）	17
第18図	SD-8（40分の1）	18
第19図	SD-9（40分の1）	18
第20図	田代遺跡位置図（2,500分の1）	19
第21図	田代遺跡周辺旧字図（約4,000分の1）	19
第22図	遺構配置図（800分の1）	20
第23図	S-33（80分の1）	21
第24図	S-52（80分の1）	21
第25図	S-59、62（80分の1）	21
第26図	S-33出土縄文土器（3分の1）	22
第27図	S-52出土縄文土器（3分の1）	22
第28図	S-33出土石器（4分の3）	23
第29図	S-52出土石器（3分の1）	23
第30図	SH-34（60分の1）	24
第31図	SH-34出土遺物（3分の1）	24
第32図	SK-16（40分の1）	25
第33図	SK-16出土遺物（3分の1）	26
第34図	SH-1（60分の1）	27
第35図	SH-1出土遺物（3分の1）	28
第36図	SH-1出土遺物（3分の1）	29
第37図	SH-3（60分の1）	30
第38図	SH-3出土遺物（3分の1）	30
第39図	SH-10（60分の1）	31
第40図	SH-10出土遺物（3分の1）	31
第41図	SB-5（60分の1）	32
第42図	SB-4（60分の1）	33
第43図	SK-2（80分の1）	34
第44図	SK-2出土遺物（3分の1）	34
第45図	SK-11（80分の1）	35
第46図	SD-15（200分の1）	36
第47図	SD-15土層断面図（80分の1）	36
第48図	SD-15出土遺物（3分の1）	37
第49図	SD-12、13、14、23（部分）（80分の1）	38
第50図	SD-12出土遺物（3分の1）	39
第51図	SD-14出土遺物（3分の1）	39
第52図	SD-6、7（100分の1）	39
第53図	SK-17（40分の1）	40
第54図	SK-17出土遺物（3分の1）	40
第55図	SK-32（40分の1）	41
第56図	SK-32出土遺物（3分の1）	41

第57図	その他の遺物その1 (3分の1)	42
第58図	その他の遺物その2	43
第59図	上畑成遺跡調査区位置図 (2500分の1)	44
第60図	上畑成遺跡周辺旧字図	44
第61図	上畑成遺跡遺構配置図 (800分の1)	45
第62図	SK-26 (80分の1)	46
第63図	SK-26出土遺物 (3分の1)	46
第64図	SK-27 (60分の1)	47
第65図	SK-27出土遺物 (3分の1)	47
第66図	SK-29 (40分の1)	47
第67図	SK-29出土遺物 (3分の1)	48
第68図	SD-06 (300分の1)	49
第69図	SD-06土層断面図 (80分の1)	50
第70図	SD-06出土遺物 (3分の1)	50
第71図	SD-01 (300分の1)	51
第72図	SD-01出土遺物その1 (3分の1)	52
第73図	SD-01出土遺物その2 (3分の1)	53
第74図	SD-01出土遺物その3 (3分の1)	54
第75図	SD-01土層断面図	54
第76図	SD-04 (300分の1)	55
第77図	SD-04土層断面図 (80分の1)	55
第78図	SD-04出土遺物 (3分の1)	56
第79図	SD-05 (200分の1)	57
第80図	SD-05出土遺物 (3分の1)	57
第81図	SD-13 (80分の1)	57
第82図	ST-16 (40分の1)	58
第83図	ST-16出土遺物 (3分の1)	58
第84図	SK-28 (80分の1)	59
第85図	SK-28出土遺物 (3分の1)	59
第86図	SK-14 (80分の1)	59
第87図	SK-21 (80分の1)	59
第88図	SK-21 (80分の1)	60
第89図	SK-30 (80分の1)	60
第90図	上畑成遺跡とその周辺	61
第91図	馬下遺跡調査区位置図 (2、500分の1)	62
第92図	馬下A区遺構配置図 (200分の1)	63
第93図	馬下遺跡土層断面図その1 (80分の1)	64
第94図	馬下遺跡土層断面図その2 (80分の1)	65
第95図	SD-10 (80分の1)	66
第96図	SD-10出土遺物 (3分の1)	66
第97図	SD-5 (80分の1)	66
第98図	SD-5出土遺物 (3分の1)	66
第99図	SD-6 (150分の1)	67
第100図	SD-6瓦器碗出土状態 (30分の1)	67
第101図	SD-6出土遺物 (3分の1)	68
第102図	SD-9 (80分の1)	68
第103図	S-3出土遺物その1 (3分の1)	69
第104図	S-3出土遺物その2 (3分の1)	70
第105図	S-3出土遺物その3 (3分の1)	71
第106図	S-8出土遺物 (3分の1)	72
第107図	SD-1出土遺物 (3分の1)	72
第108図	SD-2出土遺物 (3分の1)	73
第109図	B、C調査区	74
第110図	B区下層出土遺物 (3分の1)	74
第111図	C区遺物集中区、トレンチ内西部出土遺物 (3分の1)	75
第112図	C区西上層、西下層、西石集中出土遺物 (3分の1)	76
第113図	C区遺物集中区出土遺物 (3分の1)	77
第114図	下毛原台地土地利用状況	81

表 目 次

第1表	遺跡一覧表	6
第2表	遺物観察表 (その1) 諸田南遺跡D地区出土遺物観察表	82
第3表	遺物観察表 (その2) 田代遺跡出土遺物観察表	83
第4表	遺物観察表 (その3) 上畑成遺跡出土遺物観察表	86
第5表	遺物観察表 (その4) 馬下遺跡出土遺物観察表	89

図 版 目 次

図版 1	諸田南遺跡全景 (北から)	図版 18	上畑成遺跡全景 (空撮) その1
図版 2	諸田南遺跡全景 (西から)		上畑成遺跡全景 (空撮) その2
	諸田南遺跡全景 (東から)	図版 19	上畑成遺跡全景 (空撮) その3
図版 3	調査区東側		上畑成遺跡全景 (東から)
	調査区西側	図版 20	調査区全景 (北から)
	調査区中央部		調査区全景 (南から)
図版 4	S-1 完掘状況		調査区全景 (北から)
	S-1 底面の状況	図版 21	SK-26 遺物出土状況
	S-4 完掘状況		SK-27 遺物出土状況
図版 5	SH-6 完掘状況		SK-29 遺物出土状況
	SH-6 竈近景	図版 22	SD-06 近景a
	SK-3 完掘状況		SD-06 近景面b
図版 6	SK-5, 11, 12 遺物出土状況その1		SD-01 近景
	SK-5, 11, 12 遺物出土状況その2	図版 23	SD-01 近景
	SK-5, 11, 12 完掘状況その1		SD-01 全景 (西から)
図版 7	SB-2 完掘状況その2		SD-01 断面 (a地点)
	SB-2 完掘状況	図版 24	SD-04 近景 (西から)
	SD-9 堆積状況		SD-04 近景
図版 8	田代遺跡全景 (空撮) その1		SD-04 近景
	田代遺跡全景 (空撮) その2	図版 25	SD-06 断面 (b地点)
図版 9	調査区全景 (南から)		SD-06 断面 (a地点)
	S-52 完掘状況		SD-05
	S-59, 62 完掘状況	図版 26	SD-13 のトンネル部分
図版 10	SH-34 遺物出土状況		ST-16 近景
	SH-34 完掘状況		ST-16
	SK-16 遺物出土状況	図版 27	SK-28 全景
図版 11	SK-16 堆積状況		SK-14 全景
	SH-1 遺物出土状況		SK-30 全景
	SH-1 完掘状況	図版 28	馬下遺跡全景 (西から)
図版 12	SH-3 完掘状況		馬下遺跡全景 (東から)
	SH-3 貼床完掘状況	図版 29	SD-10 完掘状況
	SH-10 完掘状況		SD-5 全景 (東から)
図版 13	SH-10 竈の状況		SD-5 検出状況 (北から)
	SB-4 完掘状況	図版 30	SD-6 近景
	SB-5 完掘状況		SD-6 近景
図版 14	SK-2 遺物出土状況		SD-6a 地点遺物出土状態
	SK-2 完掘状況	図版 31	SD-6 b 地点遺物出土状態
	SK-11 完掘状況		SD-6 c 地点遺物出土状態
図版 15	SD-15 完掘状況 (東から)		SD-6 d 地点遺物出土状態
	SD-15 完掘状況 (西から)	図版 32	SD-8 遺物出土状態
	SD-15 断面a		B地区全景
図版 16	SD-15 断面b		C地区全景
	SD-12, 13 完掘状況	図版 33	諸田南遺跡遺物写真
	SD-8, SD-9 完掘状況	図版 34	田代遺跡遺物写真
図版 17	SK-17 完掘状況	図版 39	上畑成遺跡遺物写真
	SK-32 検出状況	図版 41	馬下遺跡遺物写真
	SK-32 完掘状況		

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経緯

中津道路は、中津港から日田市までのいわゆる中津日田道路の一部をなす路線である。路線は国道213号（旧国道10号線）の犬丸地区から、現国道10号線（中津バイパス）の伊藤田地区までの約2km区間の新設道路で、大部分が盛土工法による立体交差となる。

同区間は平成10年12月に整備区間となり、同14年度に文化財の分布調査を実施した。その結果、周知遺跡は1ヶ所（野依地区条里跡）であるものの、その他7ヶ所で遺跡の可能性のある地点が確認された。そして、平成14年度以降買取できた地点から順次試掘調査に入ることになった。

平成15年1月に3ヶ所（内、1ヶ所が後に本調査される上畑成遺跡）、同8月に3ヶ所、同11月に3ヶ所（内、2ヶ所が後に本調査される馬下遺跡と野田遺跡）の試掘調査を行い、同16年3月には1ヶ所で立会調査、同9月に1ヶ所（後に本調査を実施する北小枇杷遺跡）、同17年1月に1ヶ所、同2月に1ヶ所（後に本調査される屋敷田遺跡）同6月に1ヶ所、同8月に1ヶ所（後に本調査される田代遺跡）、同9月に1ヶ所、同12月に1ヶ所（後に本調査される野依地区条里跡田中地区）、同18年7月に1ヶ所（後に本調査される諸田南遺跡D地区）で試掘調査を行った（調査箇所は当初の8ヶ所以外に増加）。

その結果、同区間は大部分が平坦地とはいえ過去に圃場整備を実施している田園地帯であり、遺跡がすでに削平されていることが懸念されていたが、合計8ヶ所で遺跡が確認され、順次本調査が実施された。

第2節 調査の経過

本書で報告する4遺跡について、調査経過を述べる。

（上畑成遺跡）

- 平成15年5月29日 調査開始（重機による表土剥ぎ）
- 6月9日 遺構検出作業開始
- 8月27日 隣接地（東側）試掘調査
- 9月29日 西区重機により表土剥ぎ
- 10月1日 東区重機による表土剥ぎ
- 11月26日 空中写真撮影
- 12月1日 調査区埋戻し開始
- 12月4日 調査終了

（馬下遺跡）

- 平成16年1月7日 調査開始（重機による表土剥ぎ）
- 1月9日 水田関連遺構確認
- 1月27日 座標測量
- 3月3日 A地区全景写真撮影
- 3月12日 調査区埋戻し開始
- 3月18日 調査終了

（田代遺跡）

- 平成17年11月1日 調査開始（表土除去は土木サイドで行っていたため、遺構検出作業から開始）
- 11月2日 座標測量
- 11月8日 遺構掘下げ作業開始
- 12月9日 空中写真撮影
- 12月19日 調査終了

(諸田南遺跡D地区)

平成19年2月5日 調査開始 (重機による表土剥ぎ)
2月8日 遺構検出終了
2月13日 測道部分調査終了 (土木に引き渡し)
2月28日 空中写真撮影、調査終了

第3節 調査組織の構成

本書で報告する4遺跡について、各年度ごとの調査体制については下記のとおりである(肩書は当時のもの)。

(平成15年度)

文化課	課長	今永一成	
	主幹兼管理係長	渡邊重昭	
<資料室>	参事兼課長補佐	麻生祐治	
	発掘調査大型事業担当主幹	栗原 真	(上畑成遺跡担当)
	"	副主幹	田中裕介 (上畑成遺跡、馬下遺跡担当)
	"	嘱託	生野令子 (上畑成遺跡、馬下遺跡担当)
	"	嘱託	吉田朋史 (上畑成遺跡担当)

(平成17年度)

埋蔵文化財センター	所長	渋谷忠章	
	次長兼総務課長	益永孝則	
	調査第一課長	栗田勝弘	
	調査第一課大型事業担当副主幹	小柳和宏	(田代遺跡担当)
	"	嘱託	下田智隆 (田代遺跡担当)

(平成18年度)

埋蔵文化財センター	所長	小玉学司	
	次長兼総務課長	岡本義博	
	調査第一課長	栗田勝弘	
	調査第一課大型事業担当主幹	小柳和宏	(諸田南遺跡担当)

なお、諸田南遺跡D地区の調査の支援委託をおこなった東海アナース株式会社の担当は下記のとおりである。

調査技師	角上寿行
調査助手	藤田明弘

第2章 遺跡の立地と環境

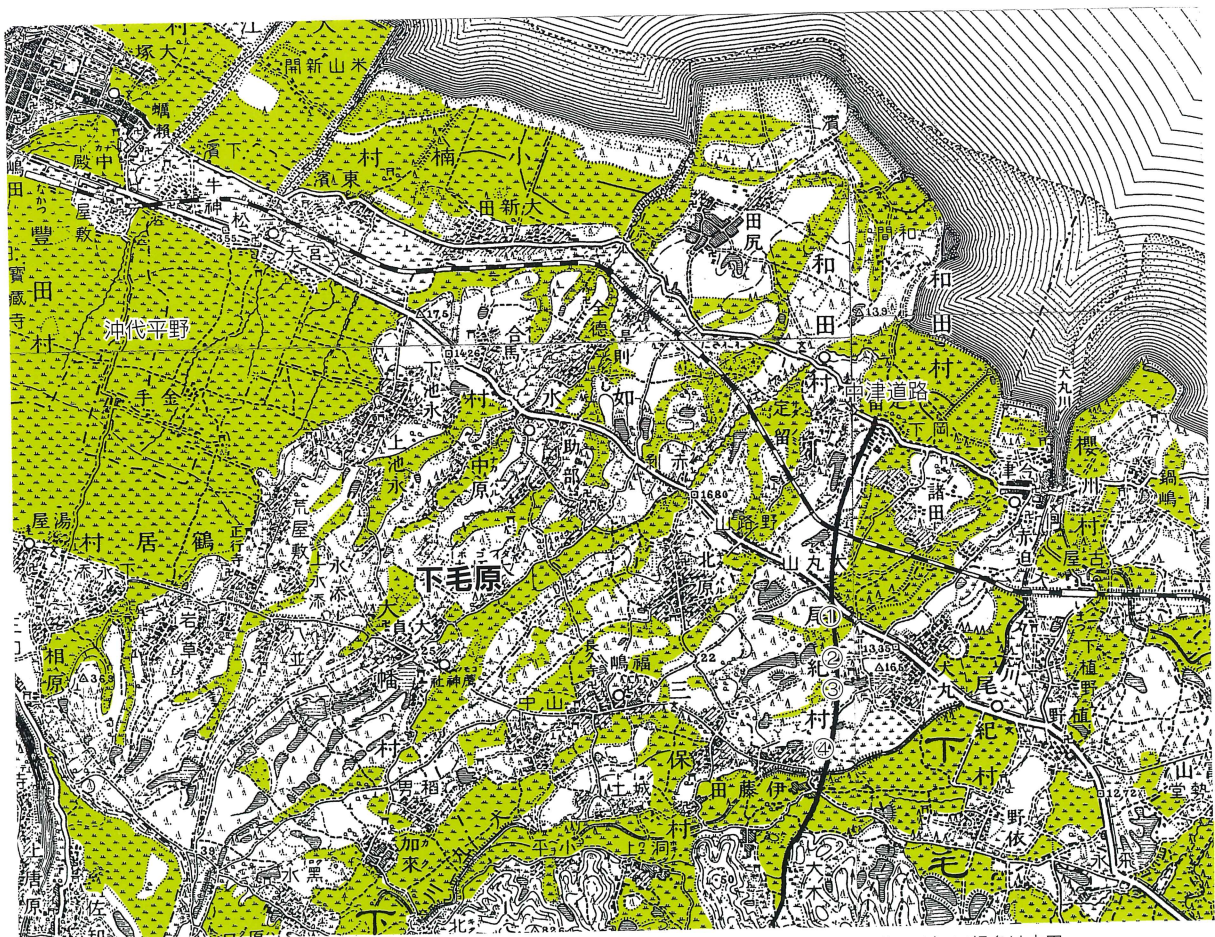
第1節 地理的環境

山国川河口に開ける標高5mほどの沖積平野である沖代平野^{おきだい}に対して、その東側に展開する標高20m前後の^{しもげばる}下毛原台地は南北約4km東西約3kmの平坦面を有しているものの、微視的に見ると南西から北東方向に幾筋もの小谷が伸び、起伏に富んだ地形を呈する。この台地の土地利用状況を見ると、明治30年代階では台地奥部（南西部）に谷水田が、海岸に近い部分ではやや広い地域に水田が広がっており、台地中央部の平坦面は畑地や山林であった。この土地利用状況は、江戸時代中期初めの元禄2(1689)年に開削された荒瀬井路によるところが大きく、これ以前は溜池灌漑に依存した、小規模な水田経営が主体であり、畑地が大きく卓越した地域であったと考えられる。

集落は、台地中央部にはほとんど無く、北側は海岸平野を望む地域（諸田、定留、是則など）、西側の沖代平野を望む地域（池永、永添など）、南側の犬丸川沖積地に面した地域（福島、伊藤田、犬丸など）に点在している。

今回、国道212号線（中津道路）が通過するのは、台地の北東端部に近い犬丸から犬丸川の沖積地を望む伊藤田地区である。犬丸地区は、菅原道真が太宰府へ流される時、舟が嵐に遭い漂着した場所と言われており、現在犬丸天満社が鎮座する。現在は海岸線から約2kmあまり入るが、昔は入り江状に海が入り込んでいたと言われ、現状では幅50mほどの谷が残されている。その谷に面した北側に諸田南遺跡D地区が、谷を挟んだ向かい側（南側）に田代遺跡と上畑成遺跡がある。馬下遺跡は下毛原台地が犬丸川の沖積地に向かって傾斜をずる地点に立地している。

- ① 諸田南遺跡D地区
- ② 田代遺跡
- ③ 上畑成遺跡
- ④ 馬下遺跡



第1図 中津地域の地形と中津道路の路線（明治33年地形図使用、5万分の1）※緑色は水田

第2節 歴史的環境

下毛原台地周辺の旧石器時代の遺跡を見ると、台地から犬丸川を挟んで南側の丘陵にある伊藤田の才木遺跡でホルンフェルス製の剥片石器が出土していたのみであったが、今回田代遺跡において細石器等が出土しており、下毛原台地上にも旧石器時代遺跡があることが確認された。しかし、詳細については不明である。

縄文時代になると、田代遺跡と上畑成遺跡で早期の無文土器とそれに伴うと考えられる土坑が今回確認され、その他定留遺跡においても同様の無文土器が出土している。また、台地南端部の黒水遺跡では早期末から前期と想定される陥穴が23基発掘されている。陥穴は今回の中津日田道路関係の調査でも、台地上において確認されており、谷部（沖積地）を望む台地斜面部に立地するようである。このように、早期から前期にかけては台地上の平坦面には集落が、そして谷を望む斜面部では陥穴群が設けられていたと想定できる。

縄文時代後・晩期になると、下毛原台地の南側を流れる犬丸川流域において貝塚が出現する。中でも、福島にあるボウガキ貝塚、福島貝塚、植野にある植野貝塚などが、河岸段丘上に立地している。ボウガキ貝塚では、後期中葉の竪穴住居跡3基や土坑墓4基等が発掘調査されており、県指定史跡になっている。

弥生時代になると、下毛原台地の縁辺部で、上ノ原遺跡、福島遺跡や定留遺跡などが確認されているが、台地の東半を占める犬丸地区は遺跡の空白地帯であった。広い下毛原台地より、山から伸びてきた丘陵先端部などに立地する遺跡が目立つ。確かに、今まで空白であった犬丸地区を横切る今回の中津日田道路の調査でも、弥生時代に属する遺構は、田代遺跡で検出された貯蔵穴1基のみである。おそらく、台地の広い平坦面は利用されずに、沖積地を望む河岸段丘や丘陵部に集落が営まれていたものと想定できる。

古墳時代になると、下毛原台地が山国川に直接接する相原において、前期から中期の古墳・横穴墓が集中的に築造される。しかし、これらの墳墓を造営した集団は山国川流域の沖積平野に集落を営んでいたと考えられており、実際当該期の大規模集落は下毛原台地西側では確認されていない。しかし、古墳時代後期になると、最近の調査で下毛原台地東側の犬丸から定留地区において集落が発掘調査されており、それらには蛸壺が伴うものが多く、海との関係が想定される集落である。今回の調査でも集落が検出されている。また、下毛原台地から犬丸川を挟んだ南側の伊藤田の丘陵先端部では須恵器産地が形成されており、工人居住集落も下毛原台地にあった可能性も考慮する必要がある。しかし、いずれにしても台地の広い平坦面ではなく、谷を望む台地縁辺に集落は築かれ、台地平坦面は畑地あるいは空地であったと考えられる。

古代には台地中央部を東西に官道が貫く。そして、その官道と一体的に沖積地には条里水田が開かれることになる。官道添いには相原廃寺、下毛郡衙、薦社などが配置される一方、台地上ではほとんど集落遺跡は確認されていない。しかし、上畑成遺跡で確認されたように、古代の開削になる水路が台地上に掘られており、ため池灌漑による水田の開発も行われていたのであろう。古代には台地南西部の標高の高い地点にある御澄池が築造されていたとされており、平野の条里に対応するように、台地上でも水田開発が進んでいたのである。

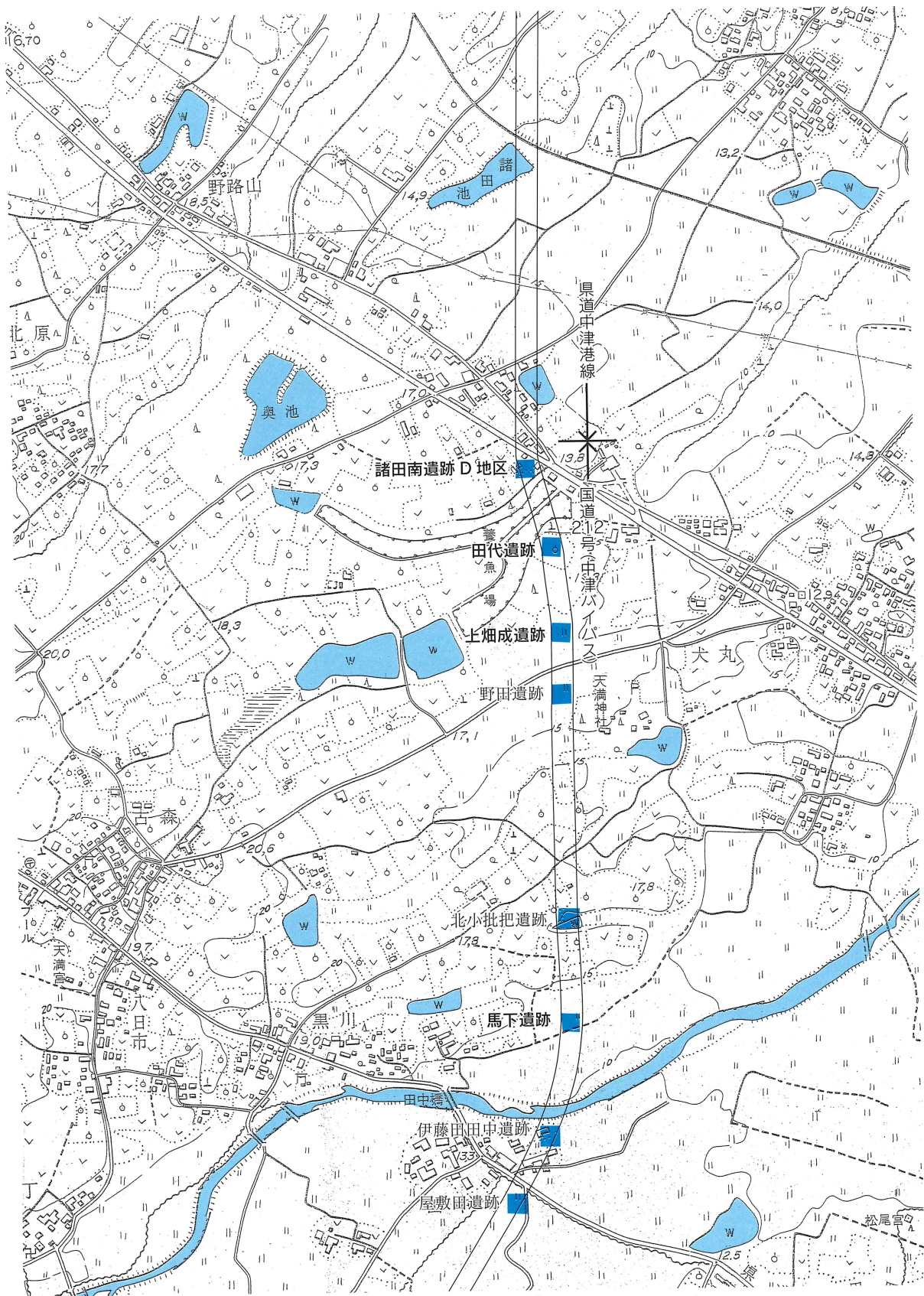
中世になると、台地上では水路が確認され、引き続き水田開発も行われていた。しかし、今見るような水田景観は、江戸時代に耶馬溪から山国川の水を引いた荒瀬井路の開削を待たねばならず、荒瀬井路以前の状況は、御澄池の灌漑がどの程度であるかわからないが、基本的には谷頭に作られた個別小規模なため池灌漑に頼るものであったと思われる。平坦面には畑地が広がっていたのであろう。

一方、集落は台地の縁辺部に点在する現在のような景観が中世後期には成立していたと想定される。それらの集落には在地領主が在村し、大小の館、あるいは城が集落の中に内包される形で存在した。中でも福島地区は福島城を中核として、周辺には町や館、堀を廻らせる大規模寺院が集中し、宇佐・下毛郡域でも群を抜く存在となる。その他、館が確認される集落は犬丸、諸田、定留などがあげられる。中津に隣接する宇佐郡では「宇佐郡三十六人衆」などと呼ばれる在地領主がいるが、下毛郡域も同様な在地領主が点在したのであろう。

近世には下毛原台地は「中津藩」になり、前記した「荒瀬井路」の開削による水田化が推し進められることになる。

第1表 遺跡一覧表

番号	遺跡名	所在地	時代	内容
1	合馬遺跡	中津市合馬	古墳	包蔵地
2	亀山古墳	中津市下池水	古墳	古墳
3	鴻ノ巣城跡	中津市下池水	中世	城館
4	下池永遺跡	中津市下池水	弥生・古墳古墳	包蔵地
5	大道端遺跡	中津市下池水	中世	集落
6	石堂池遺跡	中津市下池水	古墳・中世	集落・城館
7	カラヌノ遺跡	中津市合馬	古墳・近世	包蔵地・墓地
8	全徳遺跡	中津市全徳	弥生・古墳	包蔵地
9	舞手橋東段上遺跡	中津市是則	弥生	集落
10	是則遺跡	中津市是則	弥生・古墳	包蔵地
11	安松遺跡	中津市是則	古墳・中世	集落・城館
12	舞手川流域遺跡	中津市是則	縄文～中世	包蔵地
13	田尻遺跡	中津市田尻	古墳・奈良	包蔵地
14	是能遺跡	中津市定留	古墳	集落
15	和間貝塚	中津市定留	縄文	貝塚
16	定留遺跡	中津市定留	弥生・古墳・中世	集落・城館
17	天貝川遺跡	中津市諸田	縄文～古墳	包蔵地
18	上如水遺跡	中津市上如水	弥生・古墳	包蔵地
19	中原遺跡	中津市大悟法	近世	集落
20	大悟法地区糸里跡	中津市大悟法	古代・中世	糸里跡
21	原遺跡	中津市大悟法	古墳	集落
22	北原遺跡	中津市北原	弥生・古墳	包蔵地
23	諸田遺跡	中津市諸田	弥生・古墳・中世	集落・城館
24	諸田南遺跡	中津市諸田・犬丸	縄文・古墳・中世	集落・その他
25	十前垣遺跡	中津市赤迫	古墳・中世	集落
26	田代遺跡	中津市犬丸	縄文・弥生・古墳・中世	集落・その他
27	上畑成遺跡	中津市犬丸	縄文・古代・中世	集落・水路・その他
28	野田遺跡	中津市犬丸	古墳・中世	集落
29	犬丸城跡	中津市犬丸	中世	城館
30	中尾城跡	中津市犬丸	中世	城館
31	北小枇把遺跡	中津市犬丸	弥生・古代・中世	溜池跡
32	馬下遺跡	中津市犬丸	古代・中世・近世	水田・水路
33	黒川古墳	中津市伊藤田	古墳	古墳
34	伊藤田田中遺跡	中津市伊藤田	古代・中世	水路・道跡・集落・城館
35	屋敷田遺跡	中津市伊藤田	中世	水田・水路
36	野依地区糸里跡	中津市伊藤田・野依	古代	糸里跡
37	野依遺跡	中津市野依	弥生・古代	集落
38	松尾遺跡	中津市植野	弥生・古墳	包蔵地
39	是則塚	中津市伊藤田	中世	墳墓
40	御澄池周辺遺跡	中津市大貞	古墳・古代・中世	包蔵地
41	長久寺城跡	中津市福島	中世	城館
42	妙相寺城跡	中津市福島	中世	城館
43	畑中遺跡	中津市福島	奈良・中世	集落
44	福島城跡	中津市福島	中世	城館
45	飯屋敷遺跡	中津市福島	中世	城館
46	三保遺跡	中津市三保	弥生・古墳	包蔵地
47	加来東遺跡	中津市加来・福島	古墳	集落
48	樋多田遺跡	中津市加来	弥生・古墳	集落
49	ボウガキ貝塚	中津市福島	縄文・弥生・中世	貝塚・集落
50	入垣貝塚	中津市福島	縄文	貝塚
51	福島地下式横穴	中津市福島	中世	墳墓
52	城土遺跡	中津市福島	中世	包蔵地
53	下伊藤田城	中津市福島	中世	城館
54	犬丸川流域遺跡群	中津市伊藤田	弥生・古墳・中世	集落・城館
55	権現島遺跡	中津市森山	縄文・中世	包蔵地・その他
56	宇上横穴墓群	中津市伊藤田	古墳	横穴墓
57	岩井崎横穴墓群	中津市伊藤田	古墳	横穴墓
58	上伊藤田城	中津市伊藤田	中世	城館
59	前田遺跡	中津市伊藤田	中世	集落
60	草場城跡	中津市伊藤田	中世	城館
61	城山横穴墓群	中津市伊藤田	古墳	横穴墓
62	北平城跡	中津市森山	中世	城館
63	美濃尾遺跡	中津市下株	中世	集落・墳墓
64	北平横穴墓群	中津市森山	古墳	横穴墓
65	森山遺跡	中津市森山	弥生	集落
66	寺迫遺跡	中津市伊藤田	古墳・古代	墳墓
67	安平遺跡	中津市伊藤田	中世	集落
68	洞ノ上窯跡	中津市伊藤田	古墳	須恵器窯跡
69	大谷窯跡	中津市伊藤田	古墳	須恵器窯跡
70	城山窯跡	中津市伊藤田	古墳	須恵器窯跡
71	草場窯跡	中津市伊藤田	古墳	須恵器窯跡
72	城山古墳群	中津市伊藤田	古墳	須恵器窯跡
73	野依・伊藤田窯跡群	中津市伊藤田・野依	古墳・古代	瓦・須恵器窯跡
74	伊藤田穂屋遺跡	中津市伊藤田	古墳・中世	須恵器窯跡・水田
75	夜鳴池西窯跡	中津市野依	古墳	須恵器窯跡
76	踊ヶ追窯跡	中津市伊藤田	古墳・古代	瓦・須恵器窯跡
77	山田池窯跡	中津市野依	古墳	須恵器窯跡
78	大池窯跡	中津市野依	古墳	須恵器窯跡
79	瓦ヶ追窯跡	中津市野依	古墳	須恵器窯跡
80	ホヤ池窯跡	中津市伊藤田	古墳・古代	須恵器窯跡
81	官道(勅使街道)	中津市野依・福島他	古代	道



第3図 遺跡周辺の地形と調査区位置図 (10,000分の1)

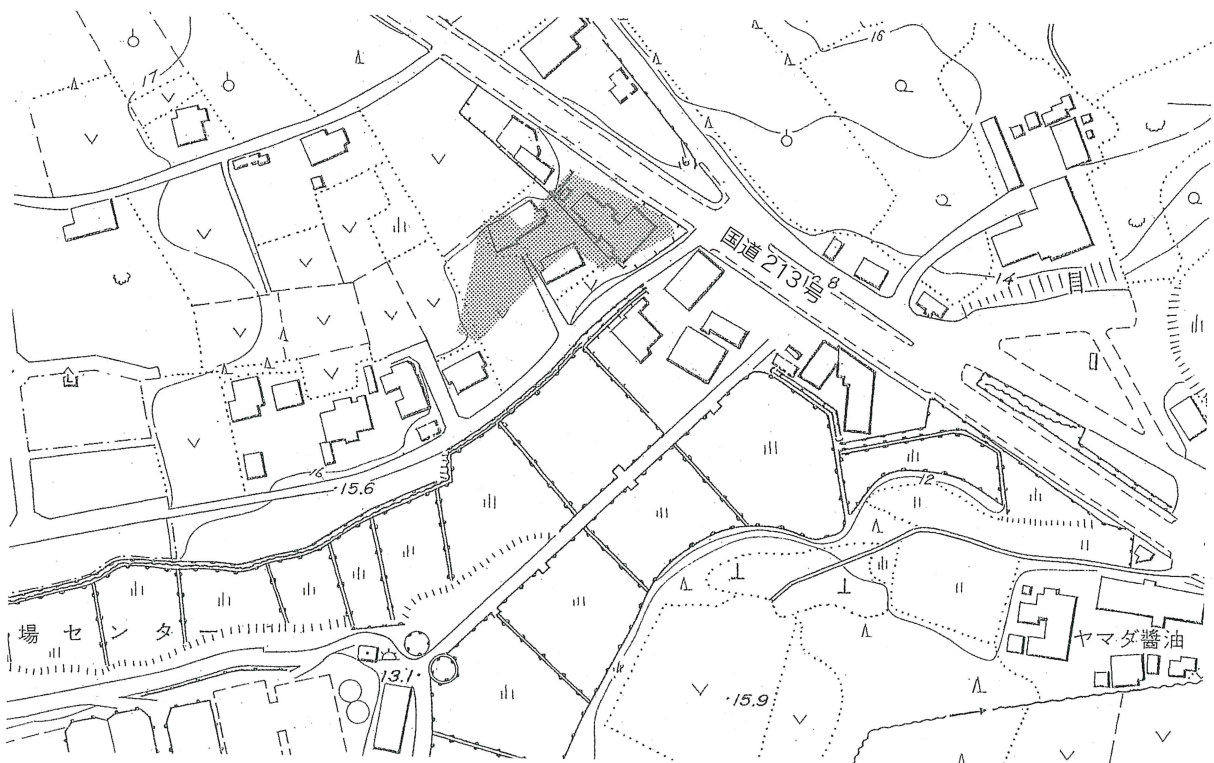
第3章 諸田南遺跡D地区

第1節 遺跡周辺の環境

下毛原台地の環境については第2章で触れたので、ここでは遺跡を中心として微視的な観点から遺跡の立地を一瞥しておきたい。諸田南遺跡は、両側が比高差2~3m程の谷に画された長さ1km、幅0.5kmほどの諸田の台地（下毛原台地の一部）の基部付近に広がる遺跡である。遺跡の南側の谷は、旧国道10号線との交点付近まで海が入っていたとされ、古代に菅原道真が太宰府に流される途次、舟が難破して漂着したのがこの入り江の最深部であったという。そこから南に向かって真っ直ぐの道（明治21年の字図でも直線道を確認できる。）を約400m下ると天満社に至るのは、道真伝承との関連で興味深い。

今回調査したD地区は、国道213号（旧10号）線の南側にあり、調査前にはガソリンスタンドと民家が建っており、それ以前は戦時中まで青年学校が建っていた。南側には明治21年段階では水田、調査前まで養魚場であった谷部がある。この谷に向かって調査区は傾斜する。つまり、D地区は諸田南遺跡の中で最南東端に立地していることになる。今回調査した中津道路に接続する県道中津港線に係わる調査では、諸田南遺跡のA地区からC地区が調査されており、それによると古墳時代の土坑や中世の水路等が確認されているので、D地区でも確認された古墳時代の集落が一定の広がりを持つことがわかる。この古墳時代の集落は、さらに北側に広がる諸田遺跡や定留遺跡でも、台地縁辺部に立地しているのが確認されている。この状況は、諸田南遺跡の南に位置する鳥遺跡や野田遺跡でも確認されており、下毛原台地の北東部に位置する犬丸から諸田、定留地域の平坦面は、古墳時代後期にはその縁辺部が集落として開発されたことがわかる。

さらに南の下毛原台地と犬丸川を挟んだ南側の丘陵（諸田南遺跡D地区から直線で約2km、最も南で確認されている古墳時代後期の集落である野田遺跡からは約1.5km）には古墳時代後期から奈良時代まで操業した須恵器や瓦を焼いた伊藤田窯跡群が存在する。これらとの関連も考慮する必要があるだろう。

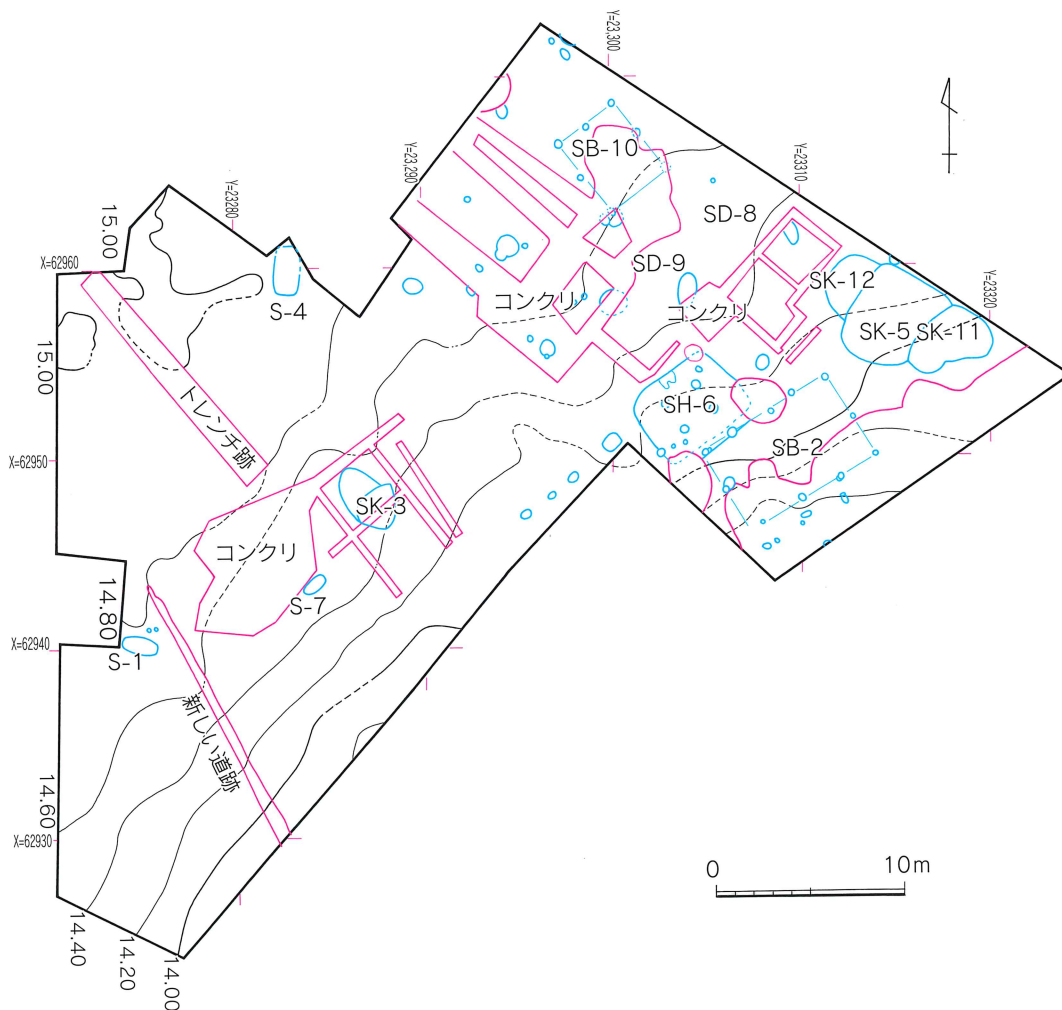


第4図 諸田南遺跡D地区位置図 (2,500分の1)

第2節 遺跡の概要

調査は東海アナース株式会社に委託をして行い、計1,200㎡で実施した。調査区は全体的に南の谷に向かって傾斜しており、最高所と最低所では1.2m程の高低差がある。調査区の北側3分の2程度は、コンクリートを流し込んだ建物の布基礎が縦横に入っており、遺構は一部破壊されていた。その他の区域も遺構を掘り込むほどの土坑（攪乱）が掘られており、完全な形で遺構が検出されたものは少ない。

調査された遺構は、縄文時代と考えられる陥穴3基、古墳時代後期の竪穴住居跡1基、同時期と思われる掘立柱建物2基、土坑5基と、時期の不明な柱穴、土坑である。



第5図 諸田南遺跡D地区遺構配置図 (200分の1)

第3節 遺構と遺物

1) 縄文時代

a 陥穴

S-1 (第6図)

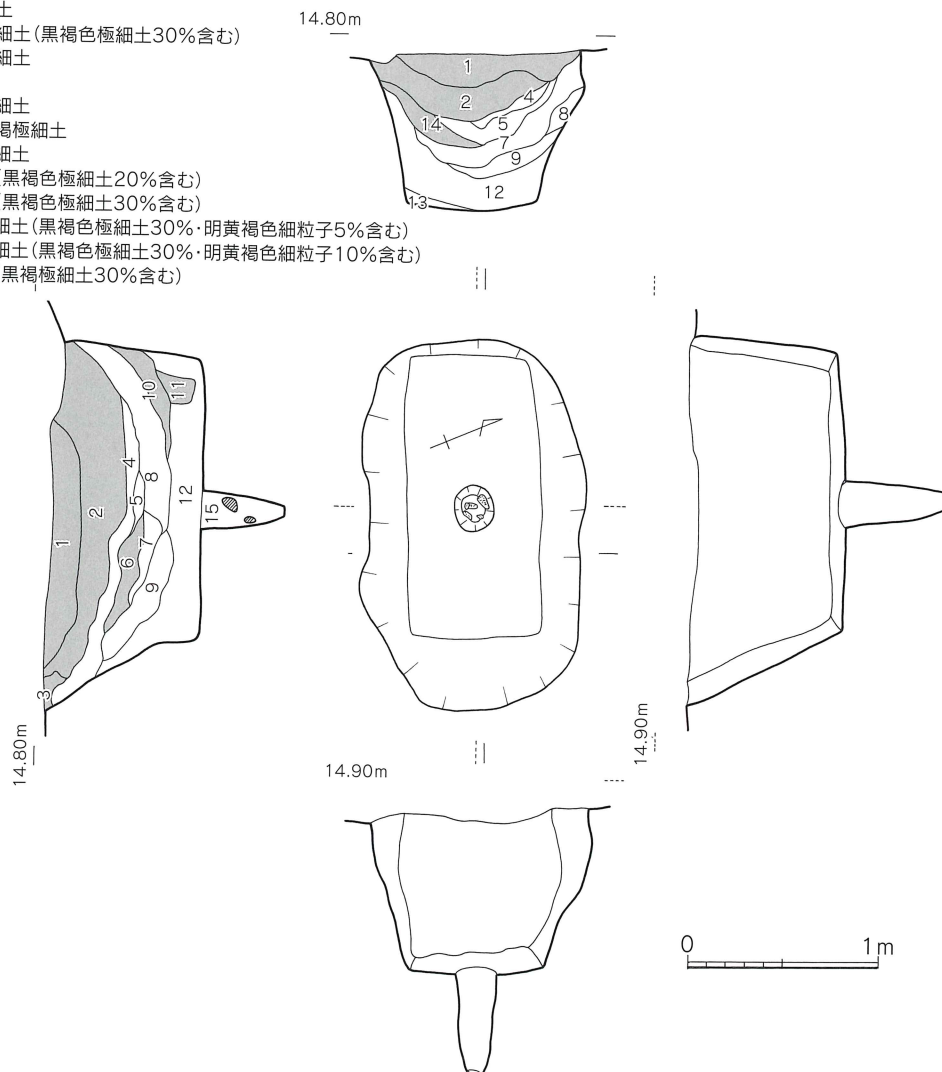
調査区の南西部で検出された土坑である。主軸はN-68。-Wで、概ね等高線に直交するように掘られている。大きさは上端で1.94m×1.05m、下端で1.50m×0.70m、深さは検出面から0.78mである。さらに底部ほぼ中央には、0.24m×0.21mで深さ0.45mのピットが穿たれている。ピットには5~8cm大の礫が充填されていた。

土坑埋土は、検出面から半分近くがクロボク層（第6図中の1から3層）で、中層（10層）にもクロボクが認められた。

遺物の出土は無かったが、埋土の状況から縄文時代と考えられる。また、形状から陥穴と考えられる。

土層説明

- 1 黒極細土(黒褐色極細土20%含む)
- 2 黒極細土
- 3 黒褐極細土
- 4 灰黄褐極細土(黒褐色極細土30%含む)
- 5 灰黄褐極細土
- 6 黒極細土
- 7 灰黄褐極細土
- 8 にぶい黄褐極細土
- 9 灰黄褐極細土
- 10 黒極細土(黒褐色極細土20%含む)
- 11 黒極細土(黒褐色極細土30%含む)
- 12 灰黄褐極細土(黒褐色極細土30%・明黄褐色細粒子5%含む)
- 13 灰黄褐極細土(黒褐色極細土30%・明黄褐色細粒子10%含む)
- 14 黒極細土(黒褐色極細土30%含む)
- 15 褐色細土

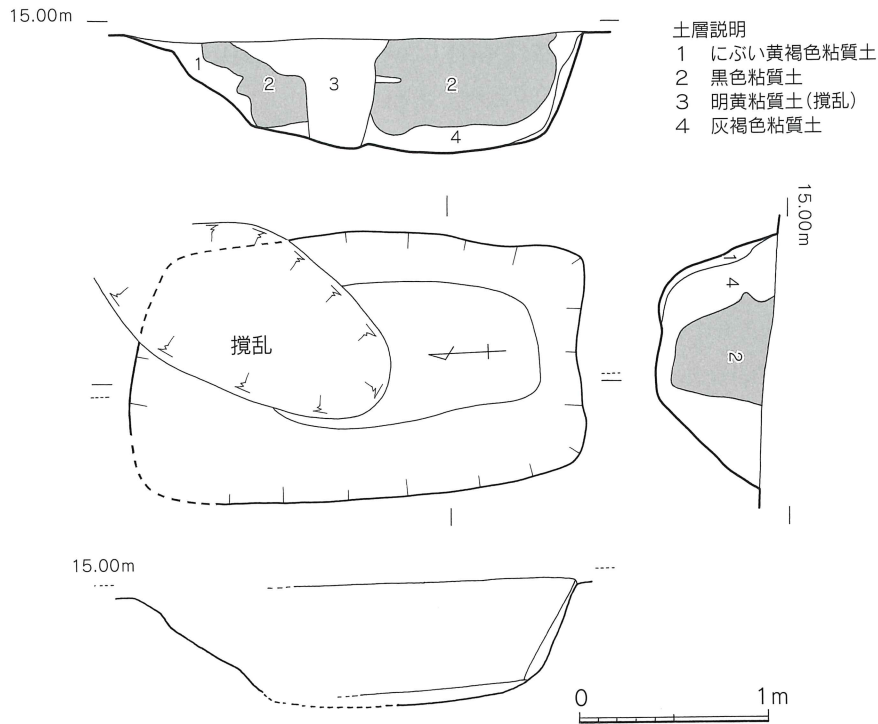


第6図 S-1 (40分の1)

S-4 (第7図)

調査区北西部にあり、一部電柱の堀形のために破壊されている土坑で、主軸はN-2°-Wである。大きさは上端で2.40m×1.41m、下端で(1.4+α)m×0.75m、深さは検出面から0.58mである。

土坑埋土は、底部付近までクロボクが堆積していた。形状から陥穴と考えられる。時期は不明である。



第7図 S-4 (40分の1)

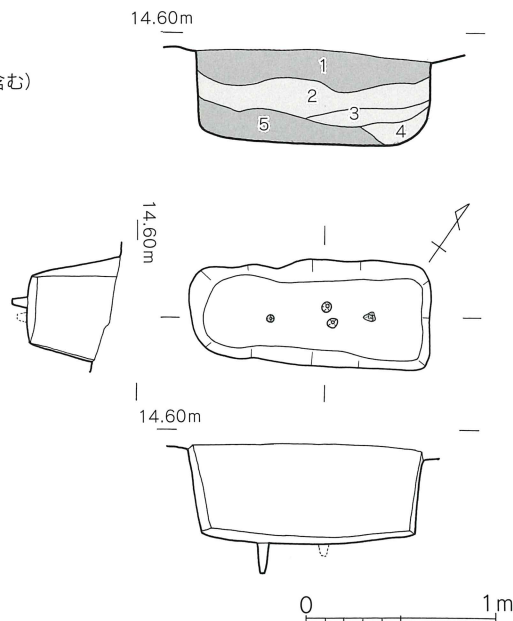
S-7 (第8図)

調査区中央やや南西にある土坑で、主軸はN-67°-Eである。大きさは、上端で1.25m×0.56m、下端で1.15m×0.35m、深さは検出面から0.49mである。底部には径4~5cmで深さ10cm前後のピットが3ヶ所ある。

埋土はほぼ底面までクロボクが堆積していた。遺物の出土はなく時期は不明であるが、形状から陥穴と考えられる。

土層説明

- 1 黒極細土
- 2 黒褐極細土
- 3 黒褐極細土(褐灰極細土30%含む)
- 4 黒褐極細土(黒色土20%含む)
- 5 黒極細土



第8図 S-7 (40分の1)

2) 古墳時代

a 竪穴住居跡と出土遺物

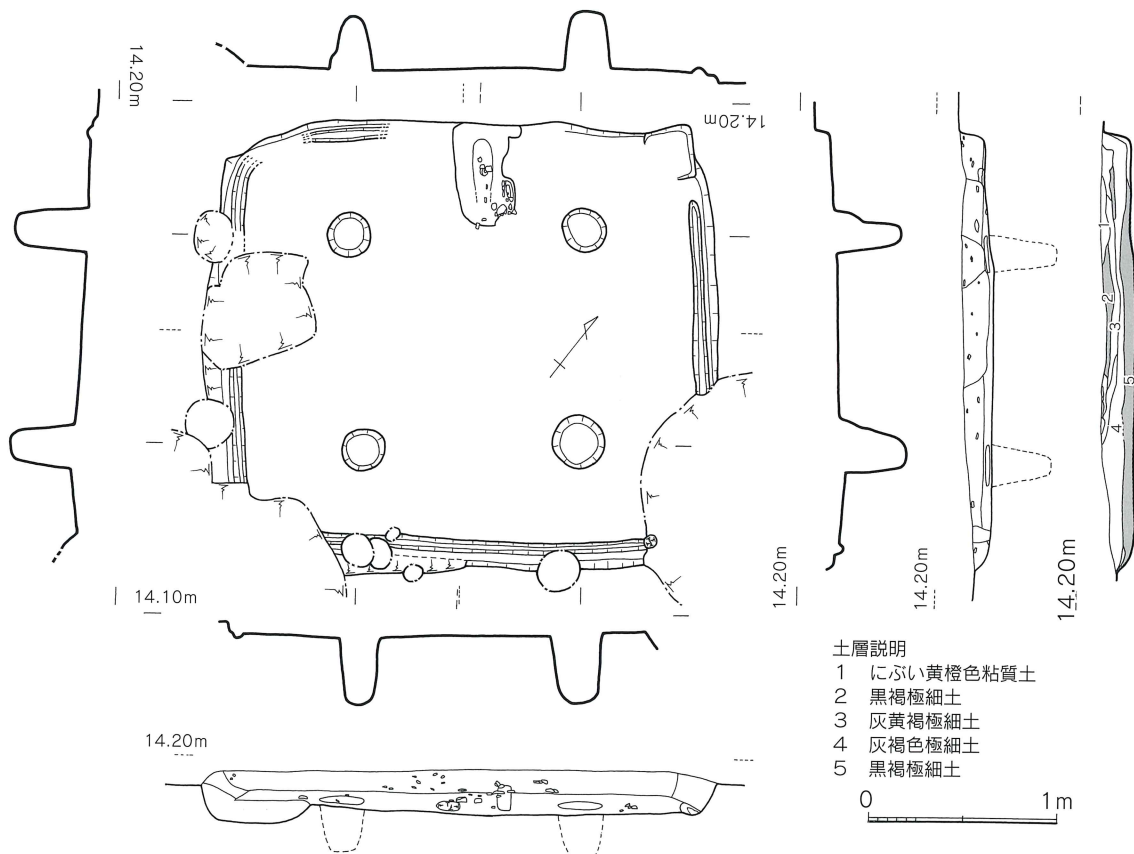
SH-6 (第9図)

調査区中央やや東よりで検出された住居跡で、調査区内では唯一の竪穴住居跡である。略東西で5.24m、略南北で4.70m、深さは残りの良い部分で15cm程である。南東角部や南西角部、西側中央付近が攪乱で破壊されており全形は不明であるが、残りの良好な部分では床面周囲に幅10cmで深さが5~6cmの壁溝が廻っている。主柱穴は4本であり、深さは床面から0.7m程である。

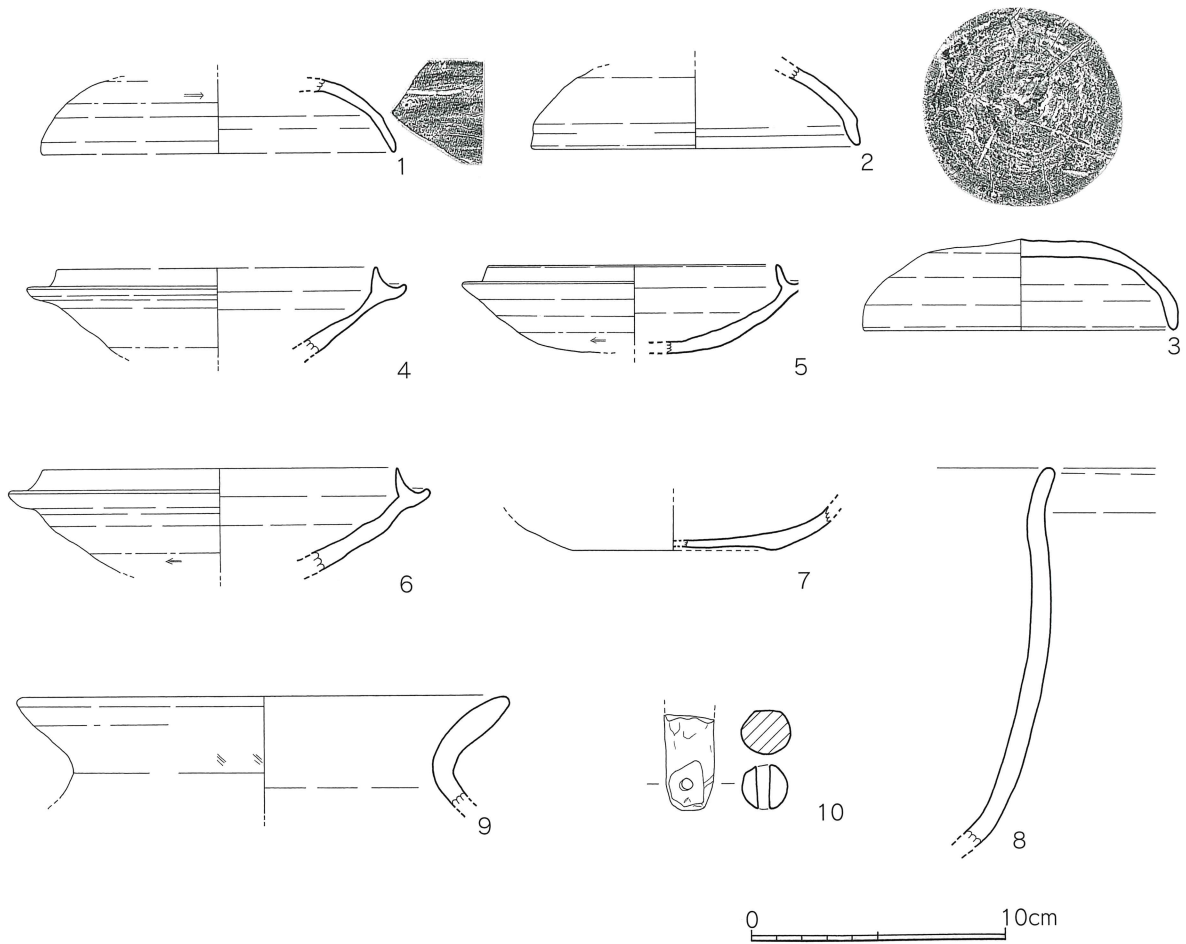
北辺のほぼ中央に竈跡(第10図)がある。竈は破壊されているが、被熱を受け赤褐色化した範囲が円形に広がり、黄白色を呈する凝灰岩様の切石を袖に使っているのが確認できた。

遺物(第10図)は、1から10である。1から6は須恵器蓋坏で、1から3の蓋はいずれも天井部は回転ヘラケズリ。4から6は坏身で、底部は回転ヘラケズリである。7は土師器坏で底部は剥離して不明、8と9は土師質の甕である。10は棒状土錘の破片である。断面は円形で、焼成前穿孔がある。

この住居跡の時期は6世紀後半である。



第9図 SH-6 (60分の1)



第10図 SH-6出土遺物 (3分の1)

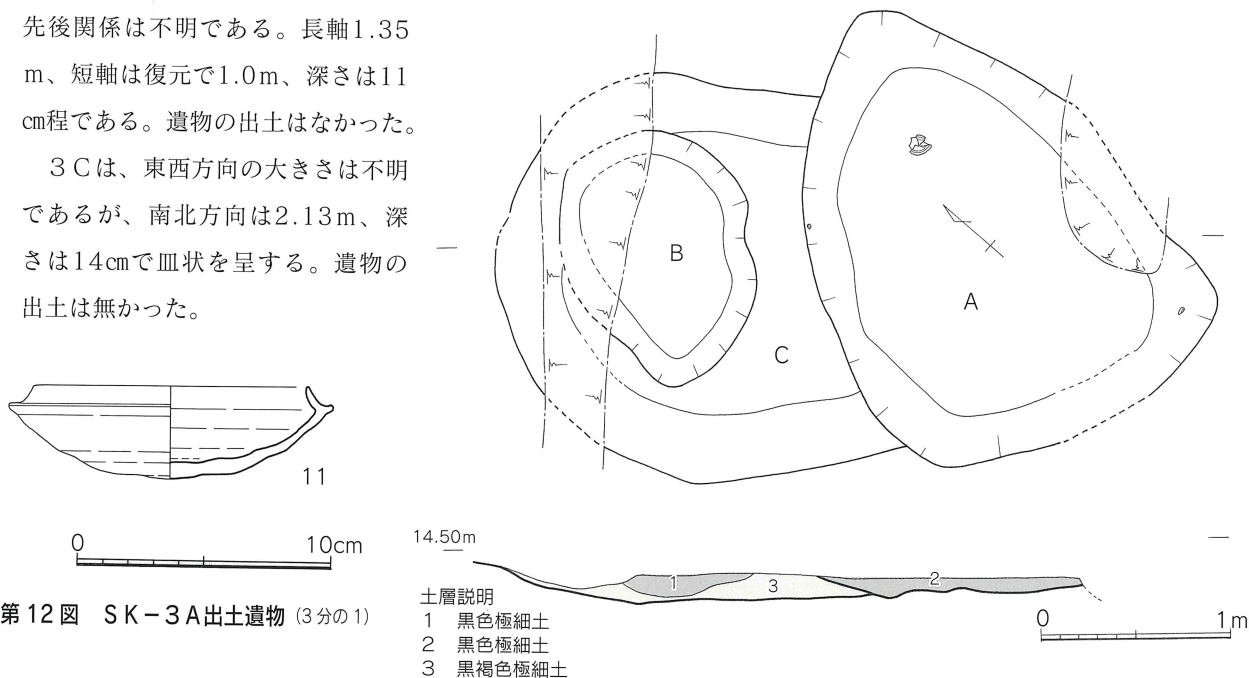
b 土坑と出土遺物

SK-3 (第11図)

3基の土坑が切り合っている。新しいものからA、B、Cとすると、SK-3Aは長軸2.45m、短軸1.8mの長楕円形を呈しており、深さは10cm程で皿状を呈する。床面から、ほぼ完形に復元できる須恵器坏身(第13図11)が出土した。口径10.8cm、深さ3.6cmで、底部の調整は摩滅のため不明である。

3Bは3Aとの切合い関係は無く、先後関係は不明である。長軸1.35m、短軸は復元で1.0m、深さは11cm程である。遺物の出土はなかった。

3Cは、東西方向の大きさは不明であるが、南北方向は2.13m、深さは14cmで皿状を呈する。遺物の出土は無かった。



第12図 SK-3A出土遺物 (3分の1)

第11図 SK-3 (40分の1)

SK-5、11、12 (第13図)

調査区の北東側で確認された土坑群で、掘下げ開始前の段階では3基の切合いが認められたため、それぞれをSK-5、11、12としたが、最終的にはSK-5は6回、SK-11は2回の切合いの結果であることがわかった。そのため、ここではそれぞれを5A、5Bなどと呼称し、説明したい。

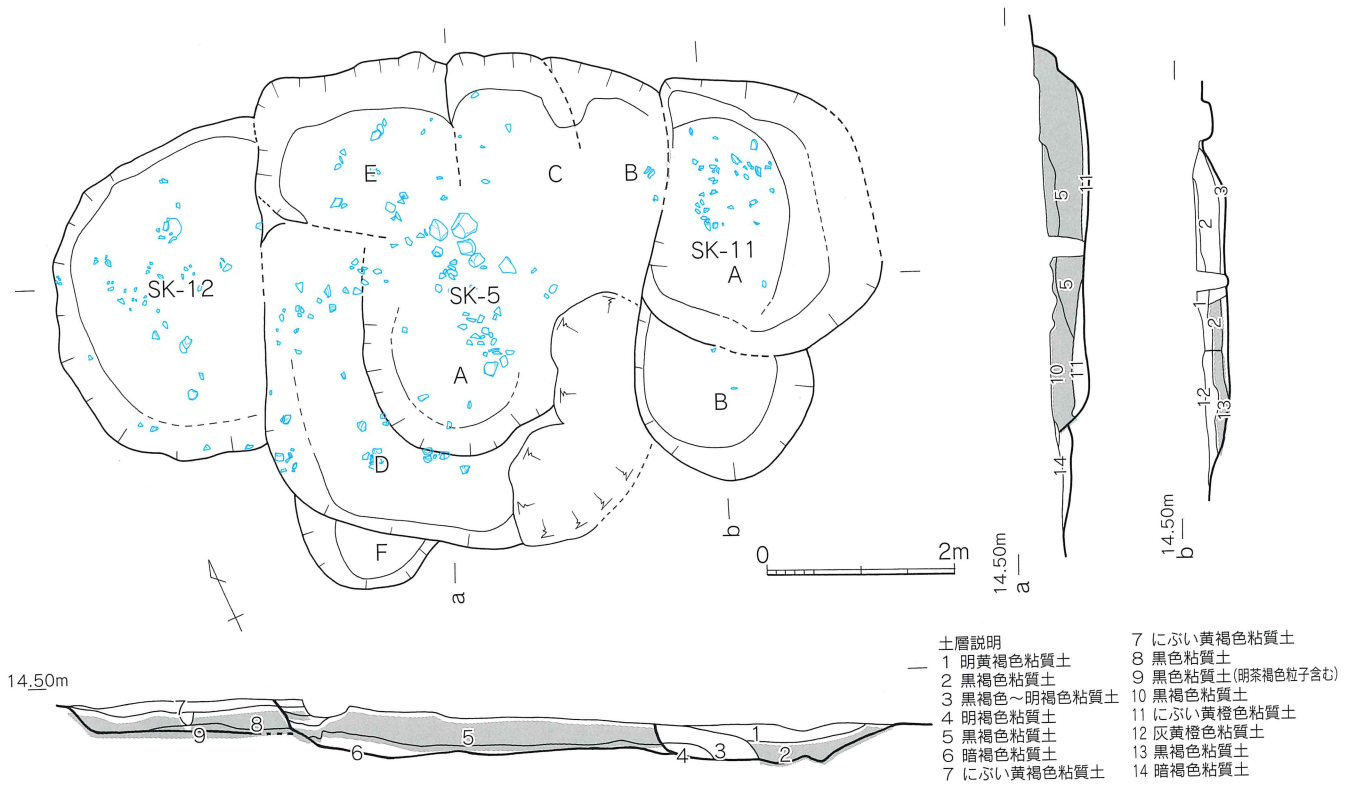
SK-5は最も大きな5Dがあり、SK-12とSK-5Fを切っており、SK-11から切られている。5A、5B、5C、5Eは最終的な掘り上がりの段階で、壁の痕跡や床面の段差等から確認できたが、土層断面からは明確には確認できていない。ほとんど同時期の掘削であった可能性が高い。最終的な大きさは南北3.48m、東西 $2.64 + \alpha$ mで、深さは最大で20cmである。

SK-11は、掘り上がりの段階で2つの土坑が切り合っているのが確認でき、土層断面により11Bが11Aを切っているのがわかった。さらに11AはSK-5を切っている。大きさは、11Bが直径1.2mほどの円形、11Aが1.9m_1.5mほどの略方形になる。床面は11Aが25cm、11Bが15cmと11Aの方が深く、そのため掘り上がりの図面は切合いが逆に見える。

SK-12はSK-5に切られている。大きさは南北2.35mで、東西は $1.04 + \alpha$ m、深さは25cmである。

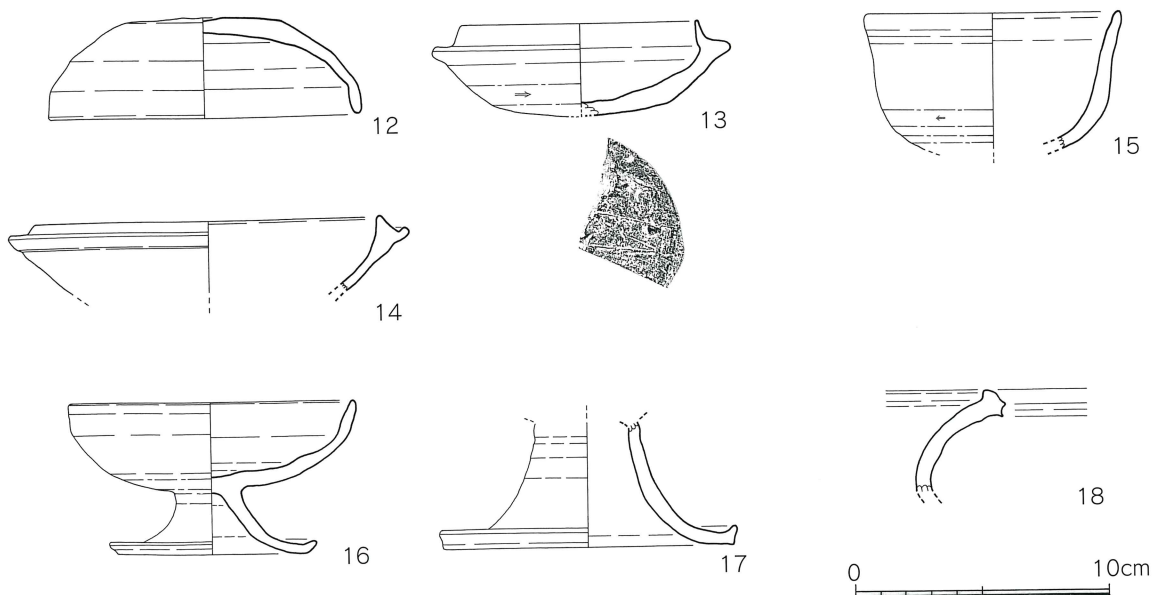
これらのSK-5から12の土坑群は、西側のSK-5が古く、東に行くほど新しい。つまり、SK-12→SK-5→SK-11という変遷が追える。その性格は不明であるが、土器や焼けた石が廃棄されたように出土していることから、何らかの継続的な行為の後に、それらを含めた「もの」を廃棄するために掘られたものであろう。

遺物は第14図12から20がSK-5、同21から23がSK-11、同24から29がSK-12出土である。12は須恵器坏蓋。口径は12.2cm(復元)で、天井部は回転ヘラ切りで切り離されている。13、14は須恵器坏身。13は口径9.4cm(復元)で、底部ヘラケズリ。底部には平行線のヘラ記号がある。14は口径13.6cm(復元)である。15は碗。口径は10.2cm(復元)で、口縁部はヨコナデ、下半はヘラケズリ。底部形状は不

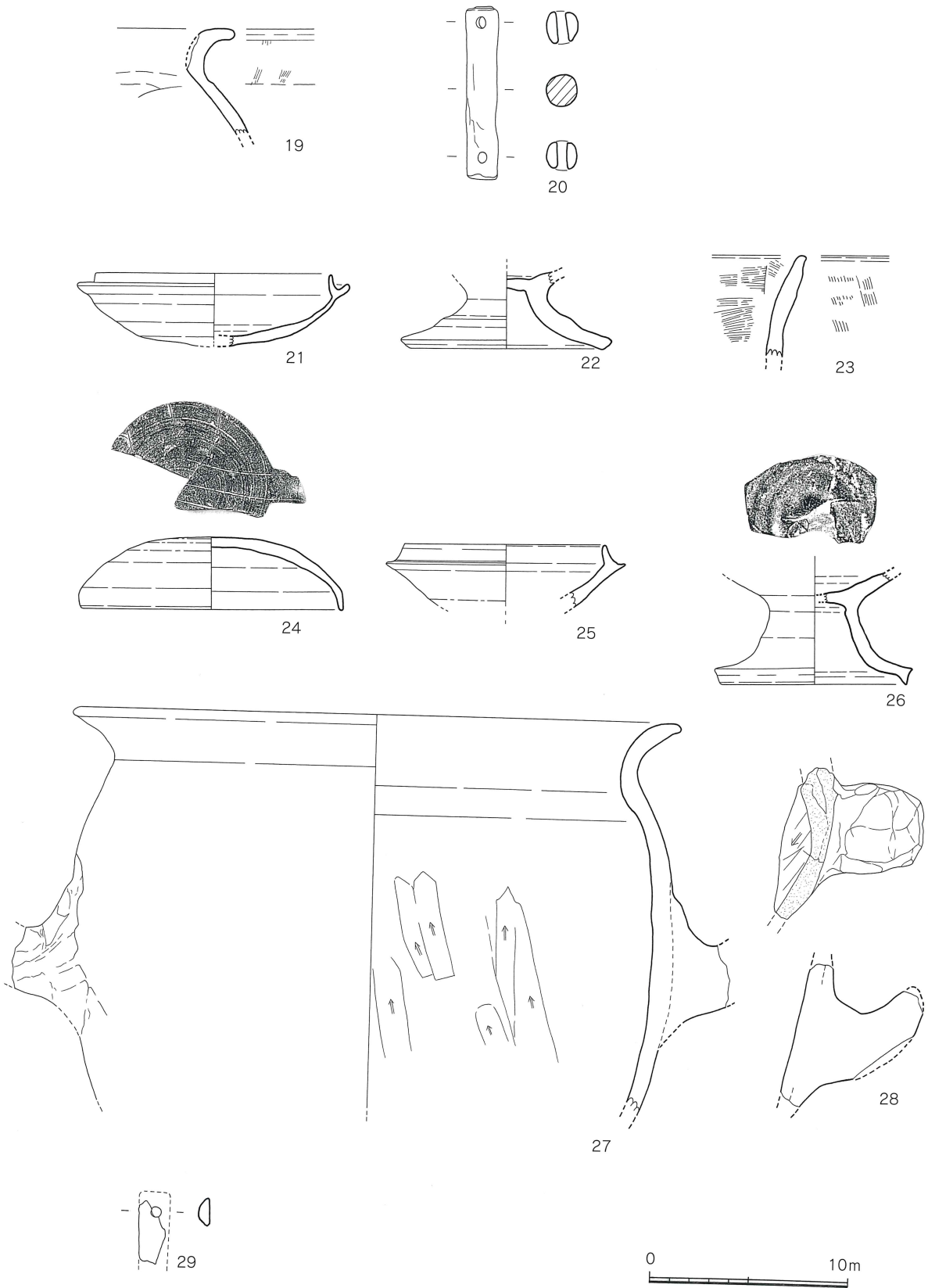


第13図 SK-5, 11, 12 (80分の1)

明である。16は須恵器無蓋高坏。口縁部は外傾しながら開く。脚部端部は外上方につまみ上げられる。17は須恵器高坏脚部。端部は16に似るが、やや強く上方につまみ上げられる。18は須恵器甕口縁部。外方向に突帯状に突出する。19は土師器甕。緩やかに外反しながら開く口縁部。20は土師質の棒状土錘。両端部にそれぞれ穿孔がある。21は須恵器坏身。底部調整は不明。22は須恵器高坏脚部と思われる。強くロクロ痕跡を残す。23は土師器甕口縁部。直線的に外傾して開く。24は須恵器坏蓋。口径は13.2cm(復元)で、天井部は回転ヘラケズリ。天井部には3本の平行線のヘラ記号がある。25は須恵器坏身。口径は10.2cm(復元)で、底部の調整は不明。26は低脚の高坏脚部。脚端部は下方につまみ出される。坏部内面に漢字の「一」状のヘラ記号がある。27、28は土師器甕。口縁部は緩やかに外反し、あまり張らない胴部を有する。取っ手は2ヶ所にヒレ状のものが貼り付けられる。29は土師質の棒状土錘で、穿孔がある。



第14図 SK-5, 11, 12出土遺物(1) (3分の1)



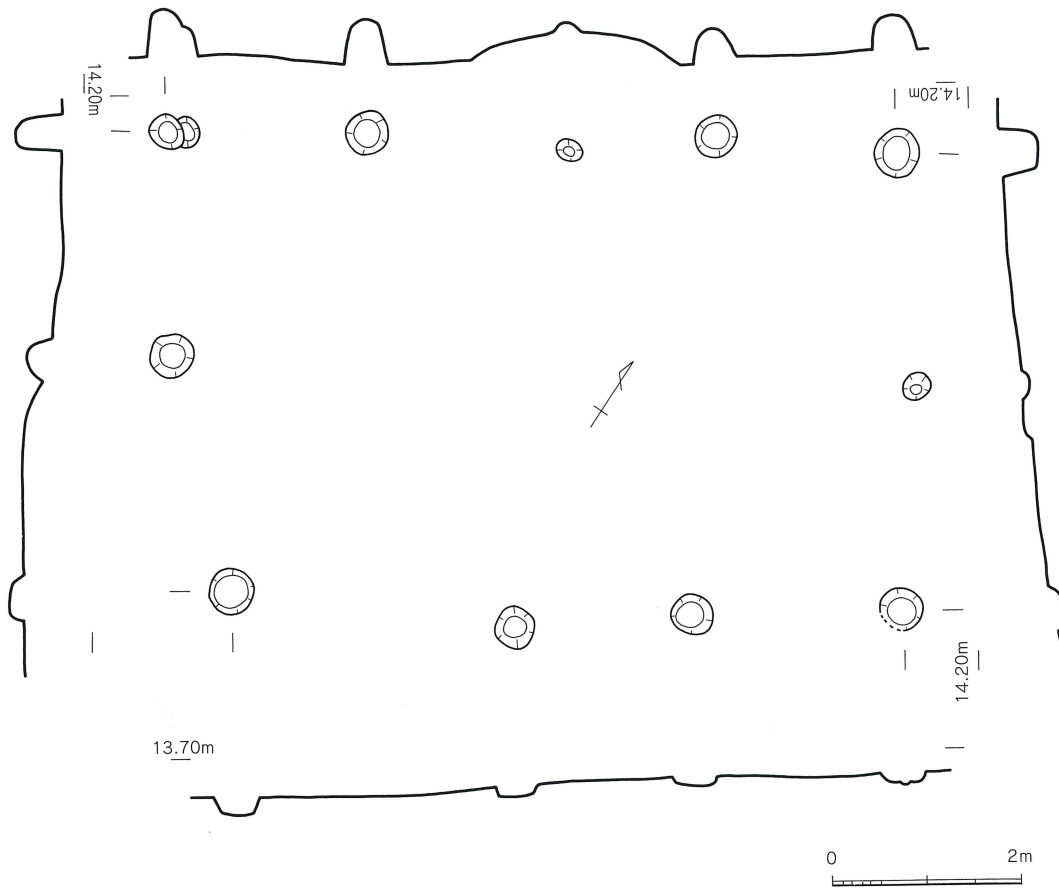
第15図 SK-5, 11, 12 出土遺物(2) (3分の1)

3) その他の遺構と遺物

a 掘立柱建物跡

SB-2 (第16図)

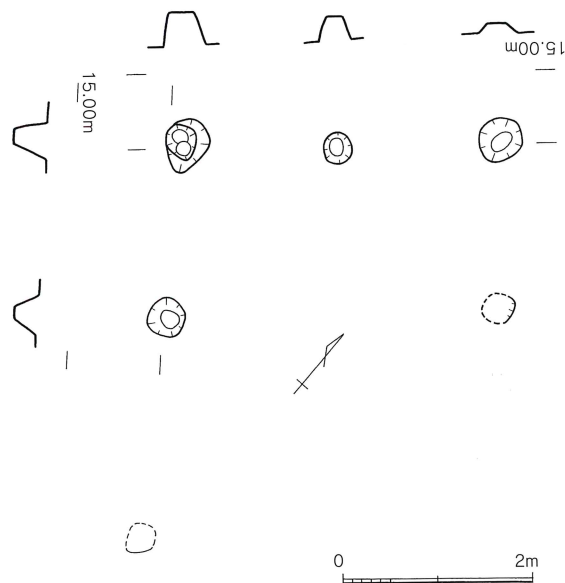
調査区の西側に位置する2間×3(4)間の掘立柱建物で、竪穴住居跡 (SH-6) の埋土を切っている。北側の梁行は4間で、南側の梁行きは3間と異なる。南東側に向けて傾斜が強まる地点に立地しており、南側の柱穴の残りは良くない。遺物の出土は無かった。時期は不明である。



第16図 SB-2 (80分の1)

SB-10 (第17図)

調査区北側にある2間×2間に復元できる掘立柱建物である。大きく攪乱で破壊されており、完全な形に復元できないが、おそらく中心部にも柱穴を持つ、総柱の倉庫になるものと考えられる。遺物の出土はなく時期は不明であるが、一般的な在り方から、古墳時代後期の可能性が強い。

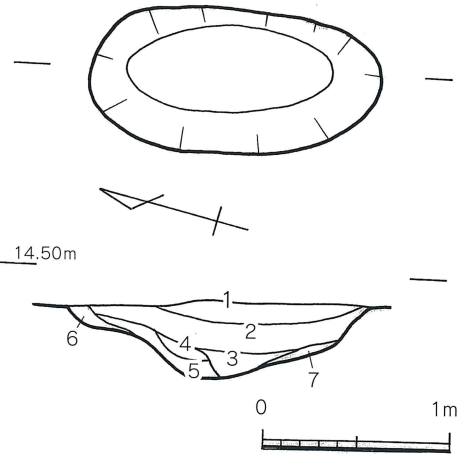


第17図 SB-10 (80分の1)

b 土坑と出土遺物

SD-8 (第18図)

調査区北東にある土坑で、長軸1.6m、短軸0.75mで深さ0.4mである。浅い皿状を呈するが、出土遺物は無く時期は不明である。



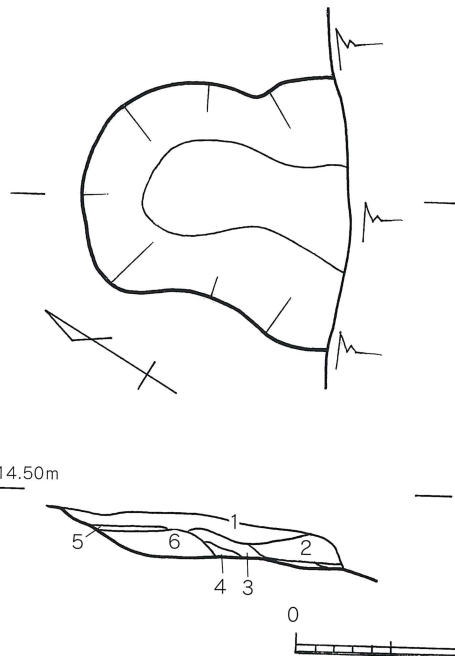
土層説明

- 1 灰褐色極細土
(灰黄褐色極細土 40%含む)
- 2 灰褐色極細土
(灰黄褐色極細土 20%、黒褐色極細土 10%含む)
- 3 灰褐色極細土
(灰黄褐色極細土 40%、黒褐色極細土 10%含む)
- 4 灰褐色極細土
(灰黄褐色極細土 40%、にぶい黄褐色土 10%含む)
- 5 灰黄褐色極細土
- 6 にぶい黄褐色極細土
- 7 灰褐色極細土

第18図 SD-8 (40分の1)

SD-9 (第19図)

調査区北東にある土坑で、長軸1.44 + α m、短軸1.45 mで深さ0.25mである。浅い皿状を呈するが、出土遺物は無く時期は不明である。



土層説明

- 1 灰黄褐色極細土
- 2 にぶい黄褐色極細土
- 3 にぶい黄褐色粘質土
- 4 にぶい黄褐色極細土
- 5 にぶい黄褐色極細土
- 6 灰黄褐色極細土

第19図 SD-9 (40分の1)

第4節 小結

両側を比高差5~6mの浅い谷で画された幅500mほどの台地が、遺跡のやや西側を基点として北東方向(海岸方向)に伸びる。遺跡はその基部の南端に立地し、南側に浅い谷を望む。台地上には諸田遺跡と諸田南遺跡という広大な遺跡が広がるが、台地上は古墳時代後期から古代、中世と利用がなされている。諸田南遺跡D地区は、古墳時代後期を中心とした遺跡で、台地上の利用状況に特異性は認められない。

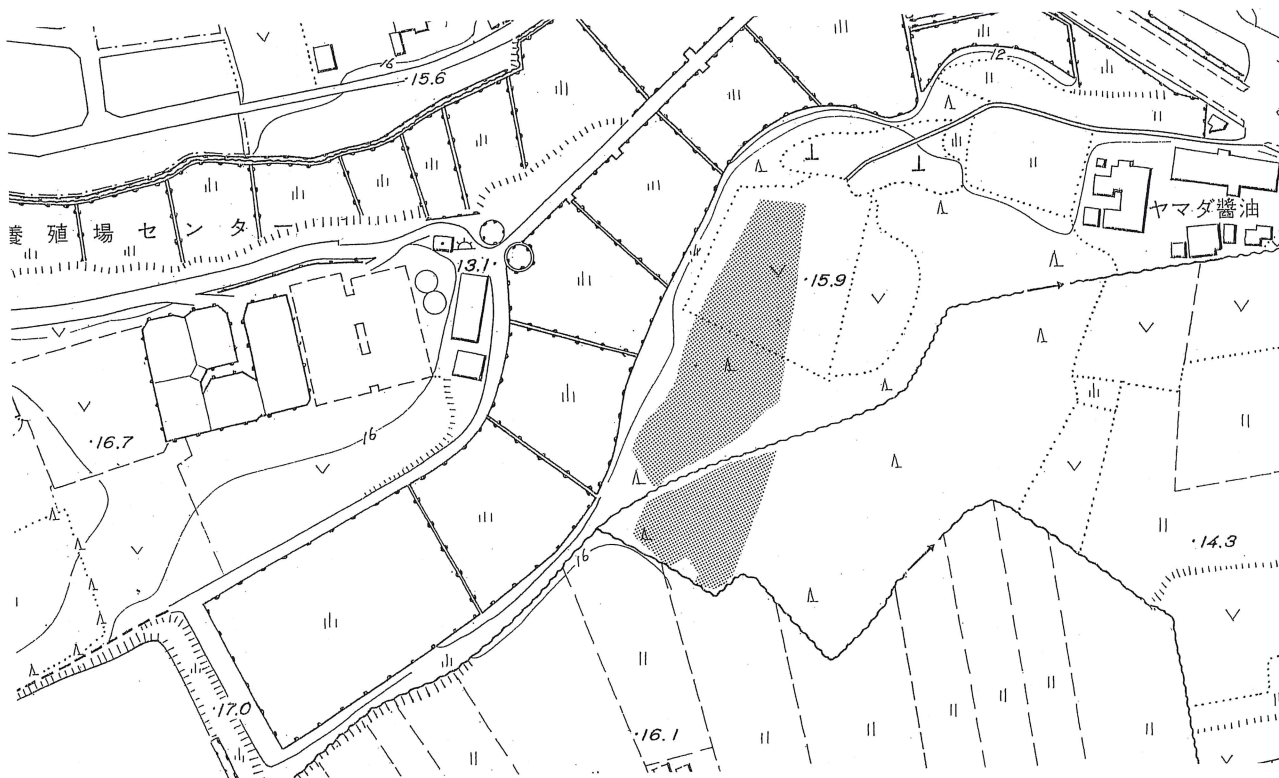
古墳時代後期の集落は、諸田遺跡や諸田南遺跡の他地区でも確認されており、さらに第4章で触れる谷を挟んだ南側の田代遺跡でも確認されていることを考えると、古墳時代後期の集落の広がりには幾つかのまとまりを持ちながら、かなりの範囲に及ぶことが想定できる。このことは、須恵器等を焼いた伊藤田窯跡群と至近(約2km)という立地と無関係では無いだろう。今後は、集落出土須恵器の分析から工人との係わりを探っていく必要がある。

第4章 田代遺跡

第1節 遺跡周辺の環境

諸田南遺跡D地区から谷を隔てた南側の台地端に立地する。田代遺跡の乗る平地は、南北幅300m、東西は2kmほどの台地で、田代遺跡はその中でも北面する中央に近い部分に立地する。谷部との比高差は2mほどである。微視的に見ると、遺跡の西側の谷が北側に回り込むため、遺跡は台地の角部にあたることになる。

遺跡の南側3分の1ほどのところを井路が通っており、明治段階の旧字図でも確認できる。しかし、地割りを見ると、明らかに畑地の区画に関係なく通っており、地割りが出来た後の新しい掘削であることがわかる。



第20図 田代遺跡位置図 (2,500分の1)



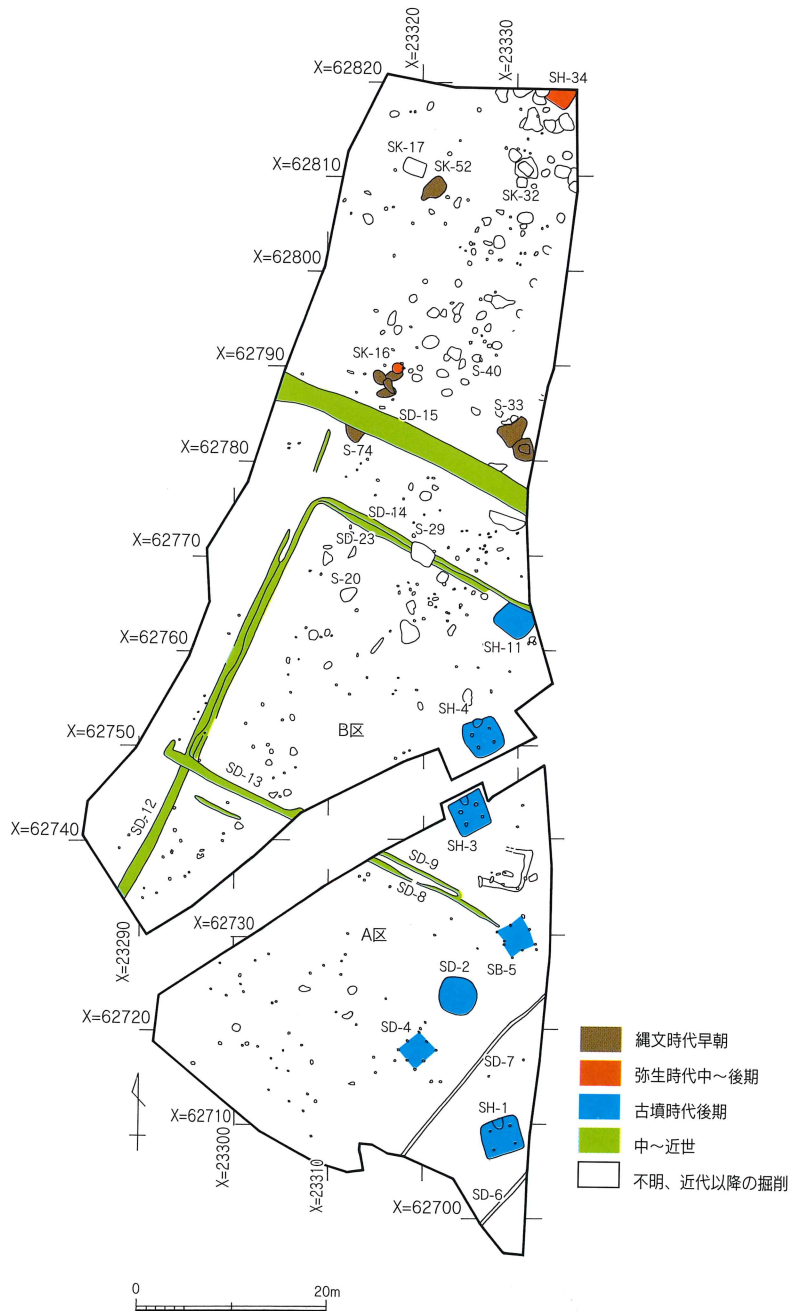
第21図 田代遺跡周辺旧字図 (約4,000分の1)

第2節 遺跡の概要

調査対象地区の南寄りに水路が通っていたため、水路を挟んで南側をA区、北側をB区として調査を行った。調査開始前は大部分が雑木林であったが、明治21年の旧字図では地目は畑地である。今回の調査でも畑地の区画に係わると考えられる溝が縦横に検出されている。その区画に係わると見られる溝に平行する幅の広い溝（SD-15）は、調査前の段階でも堀状に窪んでいた。最初の掘削は中世末に遡ると見られる。

遺構検出の結果、風倒木痕が特にA区を中心に10ヶ所近く確認されたが、その時期を特定することはできなかった。第23図に示した矢印が木が倒れた方向を示している。その他、B区では直径1m前後の土坑が多数検出されたが、多くは近代以降のものであったため、それらは図示していない。

遺構は、縄文時代早期の土坑5基、弥生時代中期の住居跡1基と貯蔵穴1基、古墳時代後期の竪穴式住居跡4基、掘立柱建物2棟、土坑1基等が検出された。また、表採ではあるが旧石器が5点出土している。

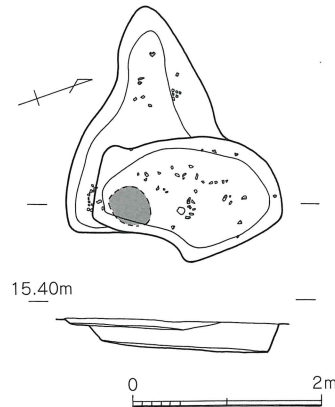


第22図 遺構配置図 (800分の1)

第3節 遺構と遺物

1) 旧石器時代

特に調査区南側のA区で旧石器が出土している。いずれも表採ではあり第58図に示す。102は腰岳産黒曜石製のナイフ型石器、103は玉髓製の石槍で押圧剥離で調整されている。104はサヌカイト製の角錐状石器、105は赤色硅質岩製の石核で、小口に細石刀状の剥離痕がある。106はチャート製の剥片である。



第23図 S-33 (80分の1)

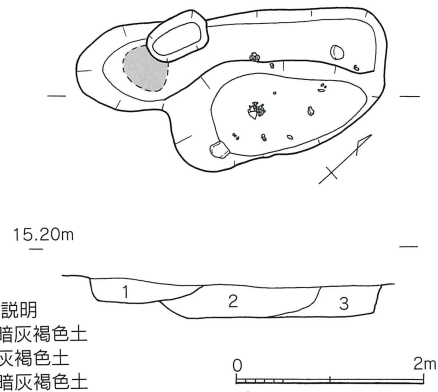
2) 縄文時代

a 土坑と出土遺物

縄文時代の土坑は4基あり、B区のほぼ中央あたりに集中する。床面片側が焼けて焼土化しているいわゆる炉穴である。出土遺物はいずれも無文土器である。

S-33 (第23図)

3基の土坑が切り合っているが、中央の33Aのみに焼土化した部分が認められる。大きさは南北2.0m、東西1.0~1.3mで、深さは30~35cmである。南側床面が、直径30cmの範囲で被熱を受け焼土化していた。出土遺物は第26図1~4の無文土器と第28図10、11である。土器は口縁部が直線的に伸びるものと小さく折れるものがある。底部は丸底である。10と11は硅質頁岩製で、10は石核、11は剥片である。



土層説明
1 暗灰褐色土
2 灰褐色土
3 暗灰褐色土

第24図 S-52 (80分の1)

S-52 (第24図)

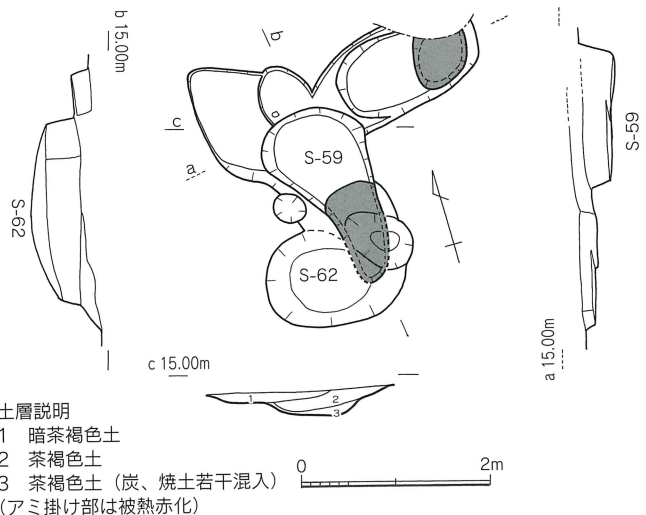
SD-15に切られている土坑で、現状では直径2.3mほどの円形を呈しているが、後世の攪乱あるいはピット等の影響と考えられる。床面の2ヶ所に被熱を受け赤化した部分が認められることから、本来は2基の長方形を呈する土坑(炉穴)があったものと考えられる。

出土遺物は第27図5~9の無文土器と第29図12から14である。口縁部が直線的に伸びるものと小さく折れるものがある。

S-59、62 (第25図)

2基の炉穴が接近している。S-59は東西1.60m、南北0.85mの長楕円形で、深さは30cmである。床面は東側が僅かに窪んでおり、直径0.5mほど被熱で赤変している。

S-62は、S-59に直交するように掘られ

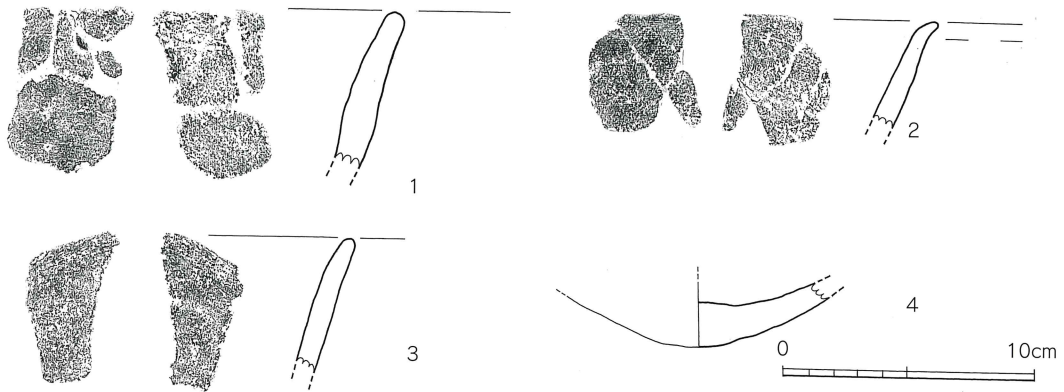


土層説明
1 暗茶褐色土
2 茶褐色土
3 茶褐色土(炭、焼土若干混入)
(アミ掛け部は被熱赤化)

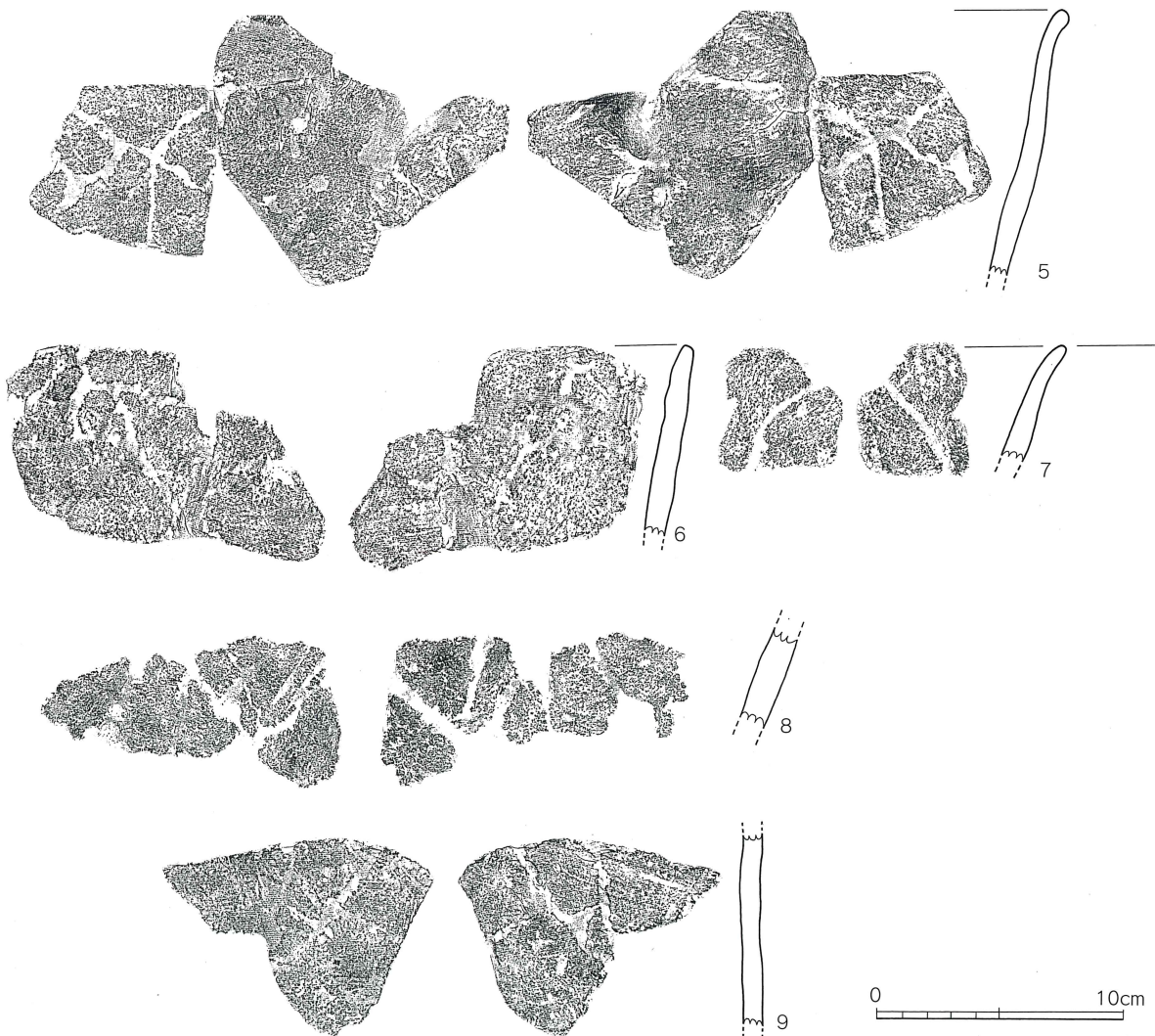
第25図 S-59、62 (80分の1)

ており、南北1.95m、東西1.11~0.52mで北側の方が幅が広い。幅の狭い南側床面には、1.05mにわたって被熱を受け焼土が堆積していた。

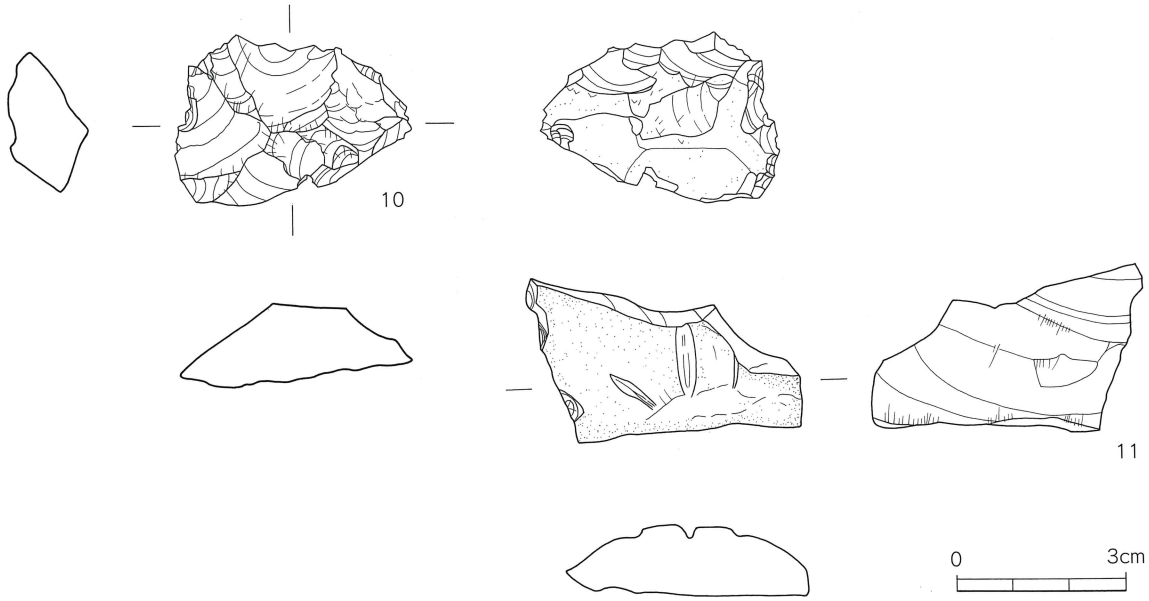
出土遺物は細片のみで図示できない。



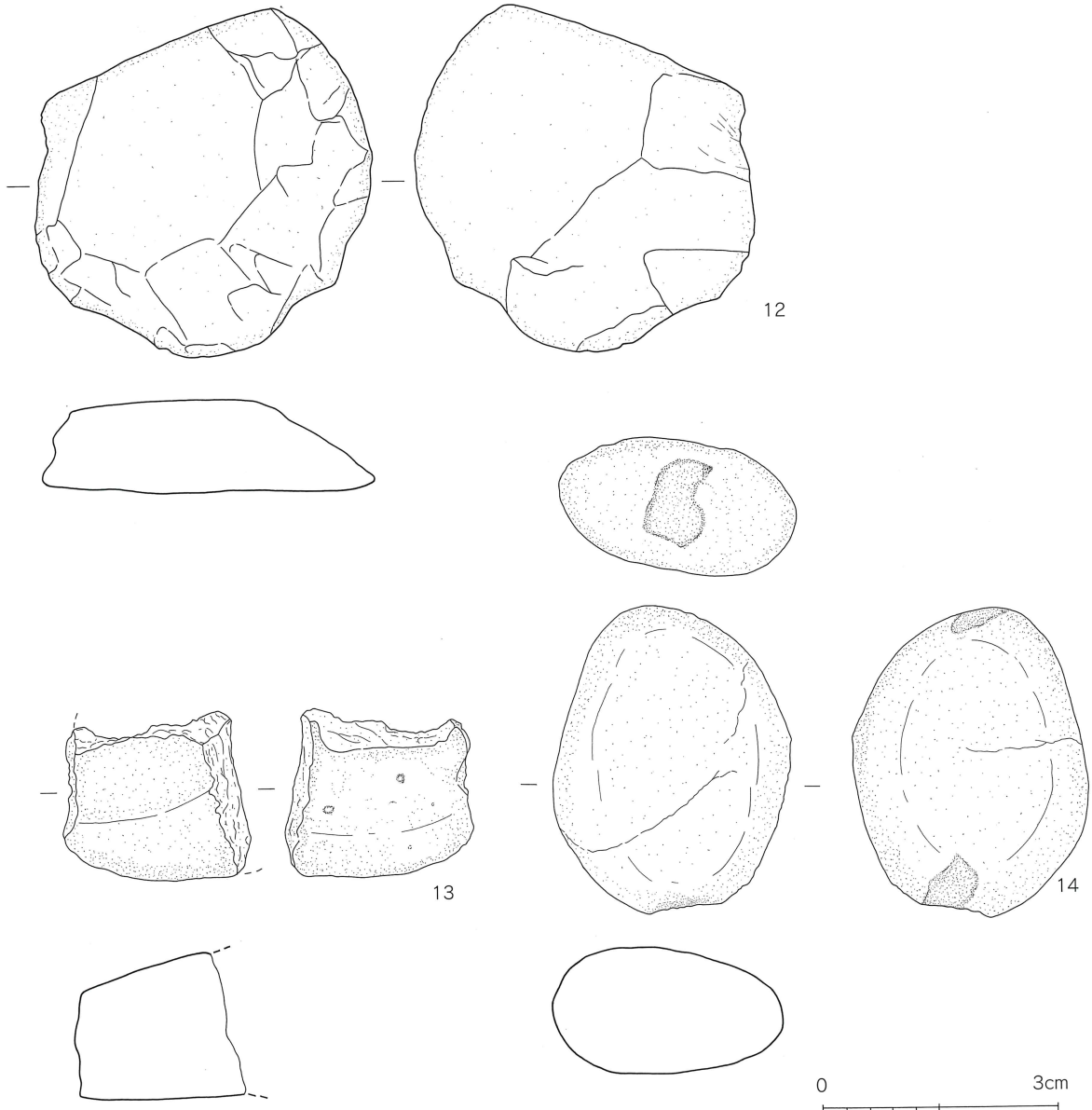
第26図 S-33出土縄文土器 (3分の1)



第27図 S-52出土縄文土器 (3分の1)



第28図 S-33出土石器 (4分の3)



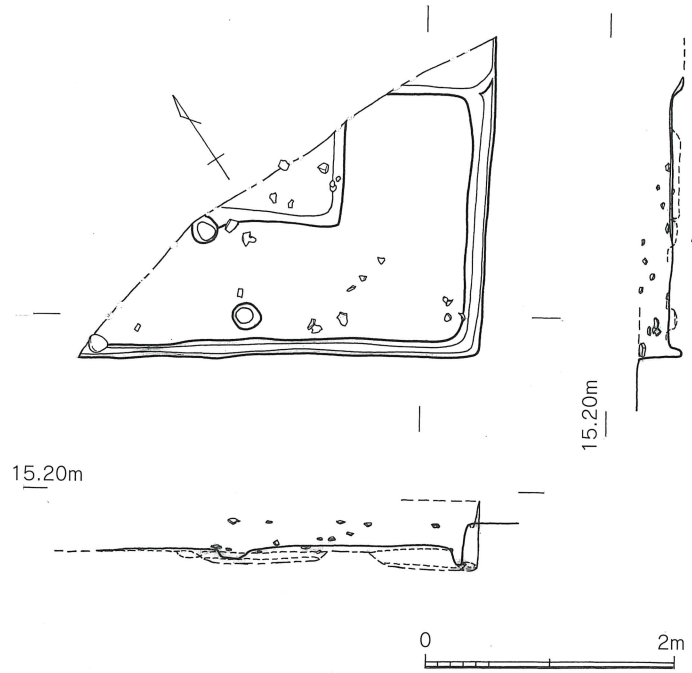
第29図 S-52出土石器 (3分の1)

3) 弥生時代

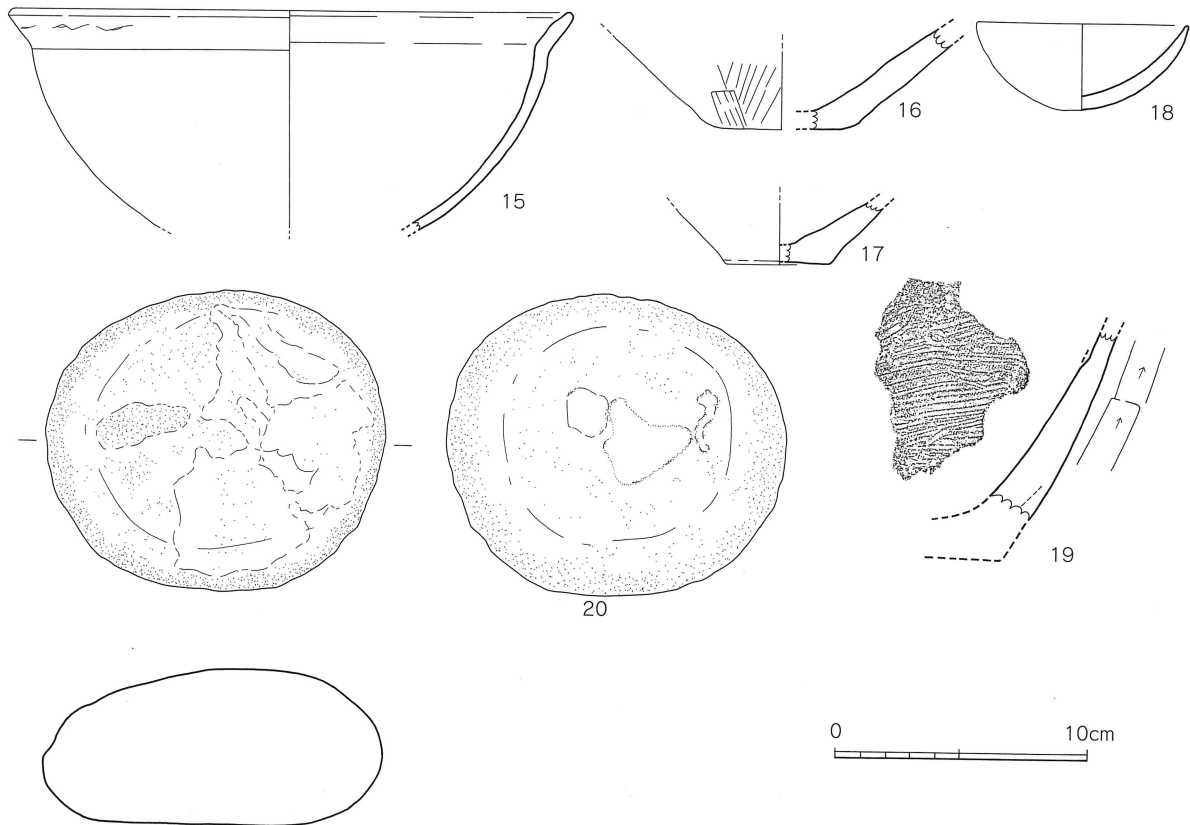
a 竪穴住居跡と出土遺物

SH-34 (第30図)

調査区北西端で確認された竪穴住居跡で、3分の2ほどは調査区外に伸びる。プランは方形又は長方形を呈し、深さは25cm前後で、中央には方形に一段の掘込み（深さ7cm前後）がある。床面は北西部で約10cmの段があり、ベッド状施設があった可能性がある。柱穴や炉跡は調査範囲内には無いが、状況から見て竪穴住居と考えられる。出土遺物は、第31図15から20である。15は鉢、16と17は壺の底部、18は平底を呈する小型の鉢である。19は甕と思われる。時期は、弥生時代後期の前半代であろう。



第30図 SH-34 (60分の1)

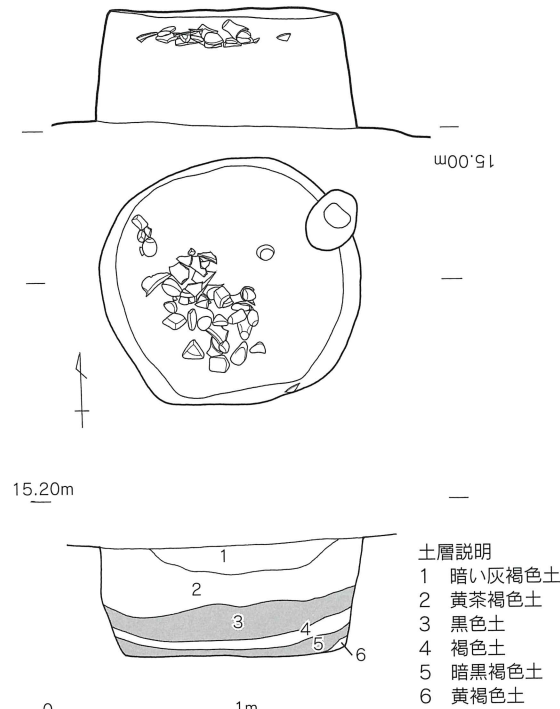


第31図 SH-34出土遺物 (3分の1)

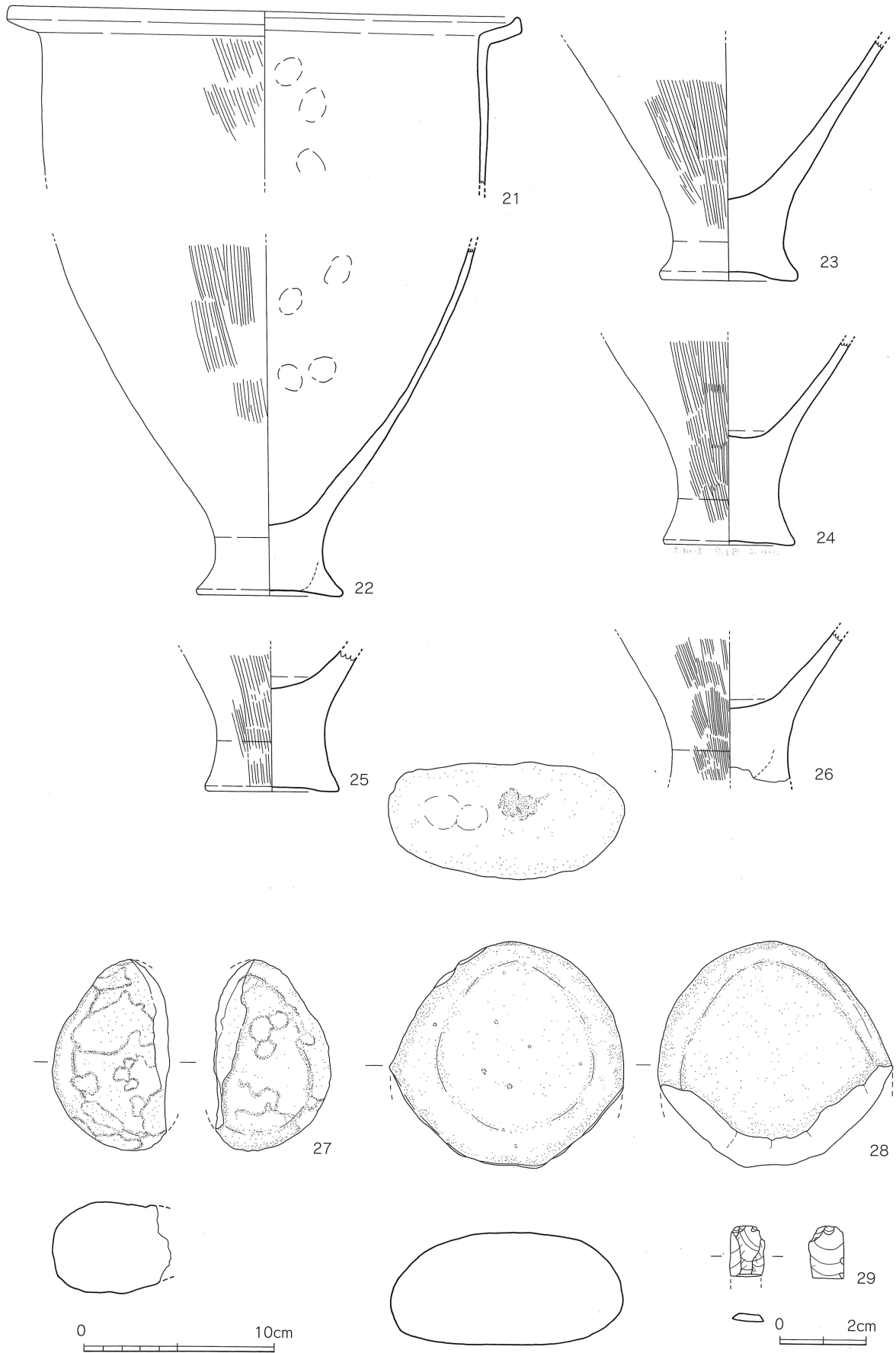
b 貯蔵穴と出土遺物

SK-16 (第32図)

調査区中央北よりで1基単独で確認された。上端の直径は1.30~1.36m、床面で1.2mで、深さは0.62mである。土層断面図から見て、少なくとも40cm以上は削平されているものと考えられる。堆積はレンズ状になされており、第4層堆積後に礫とともに土器が廃棄されていた。遺物は、第33図21から29である。21は口縁部が逆し字状に開き、端部をつまみ上げる。底部は22から26のような厚手の平底になろう。時期は弥生時代中期の後年である。



第32図 SK-16 (40分の1)



第33図 S-16出土遺物 (3分の1)

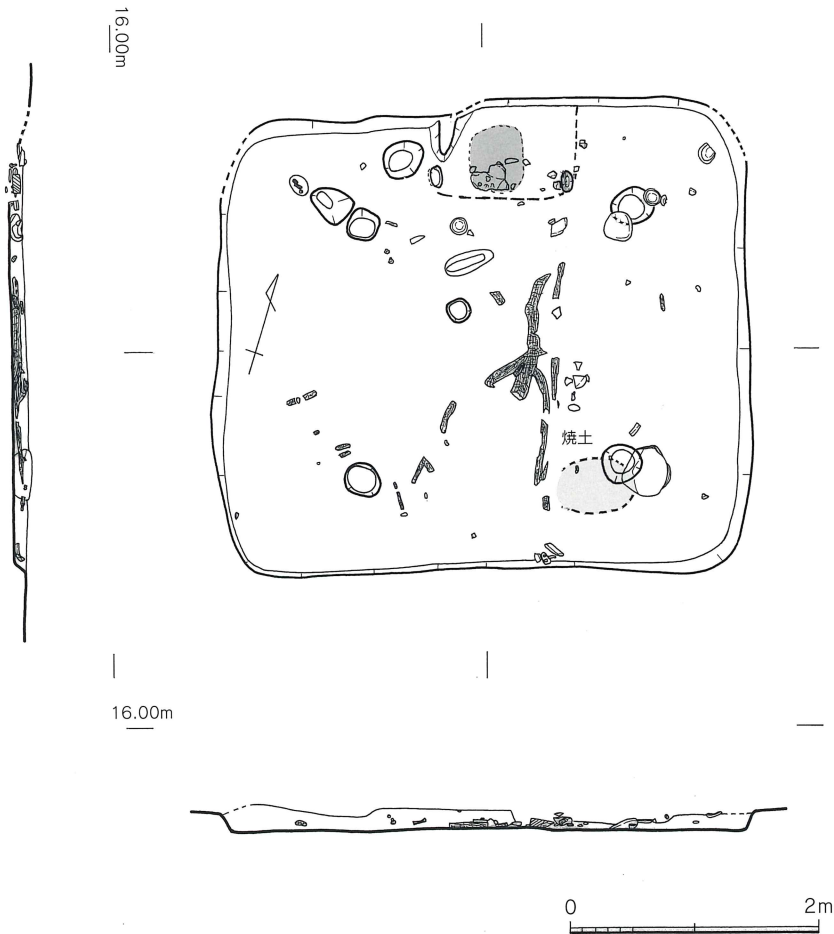
4) 古墳時代

a 竪穴住居跡と出土遺物

SH-1 (第34図)

B区南端近くにある東西4.37m、南北3.75mの竪穴住居跡で、深さは残りの良い西側で20cm、他は10cm近くしか残っていない。床面には直径10cm、長さ1m近い炭化材が2本と、その他にも小さな炭化材が散乱した状態であったが、炭化材が中央付近にしかないこと等から火災住居ではないと考えられる。埋没過程で火を焚いたものであろう。

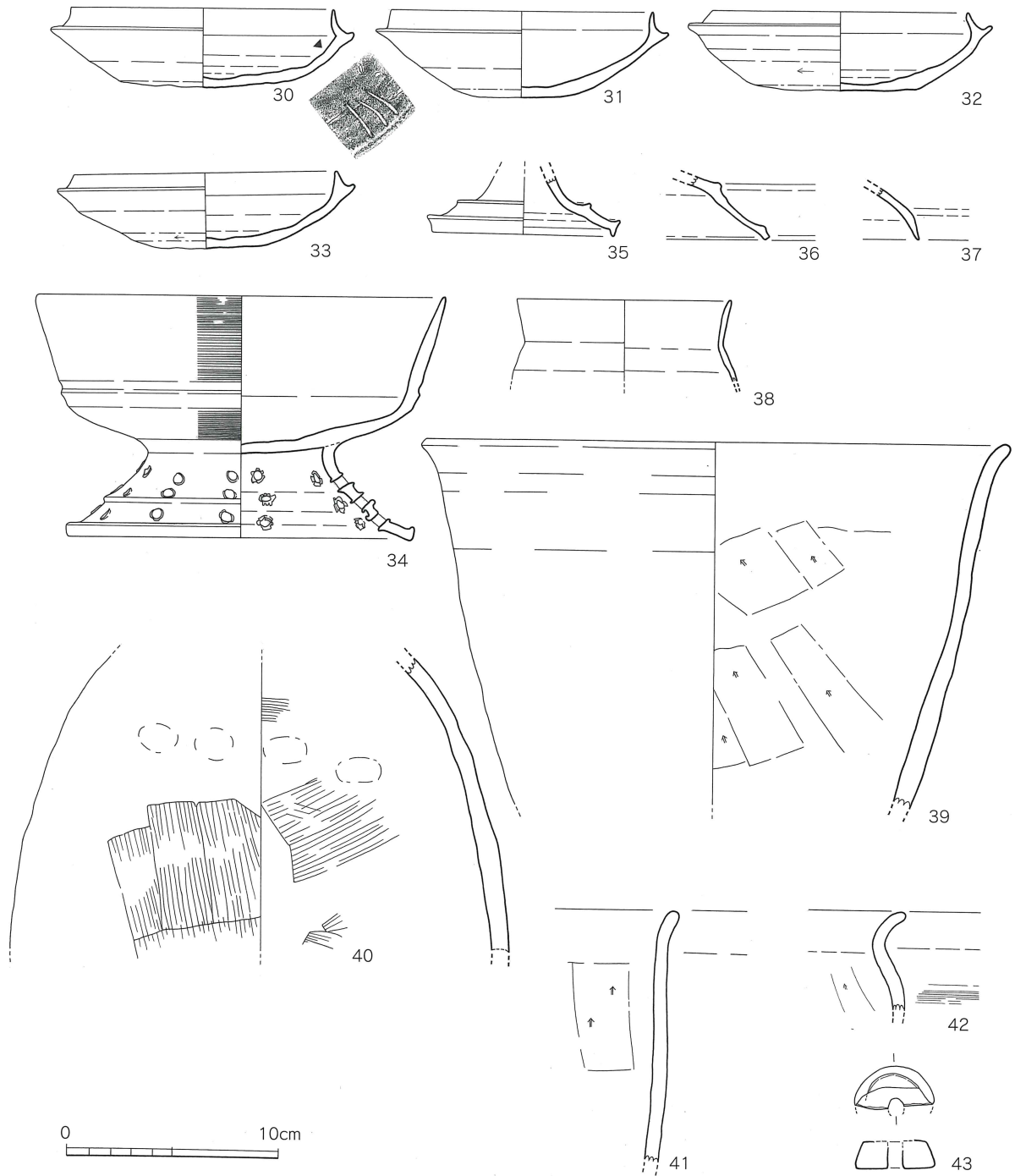
南側一辺の中央付近には据付の竈がある。上部が削平されていたことから、ほとんど構造的には確認できなかったが、袖石を据えたと考えられる長楕円形のピットが袖部下部にあり、それに挟まれた中央部は直径約50cmの円形に被熱し、赤化していた。向かって左側には僅かに袖部が残存していた。主柱穴は4ヶ所である。



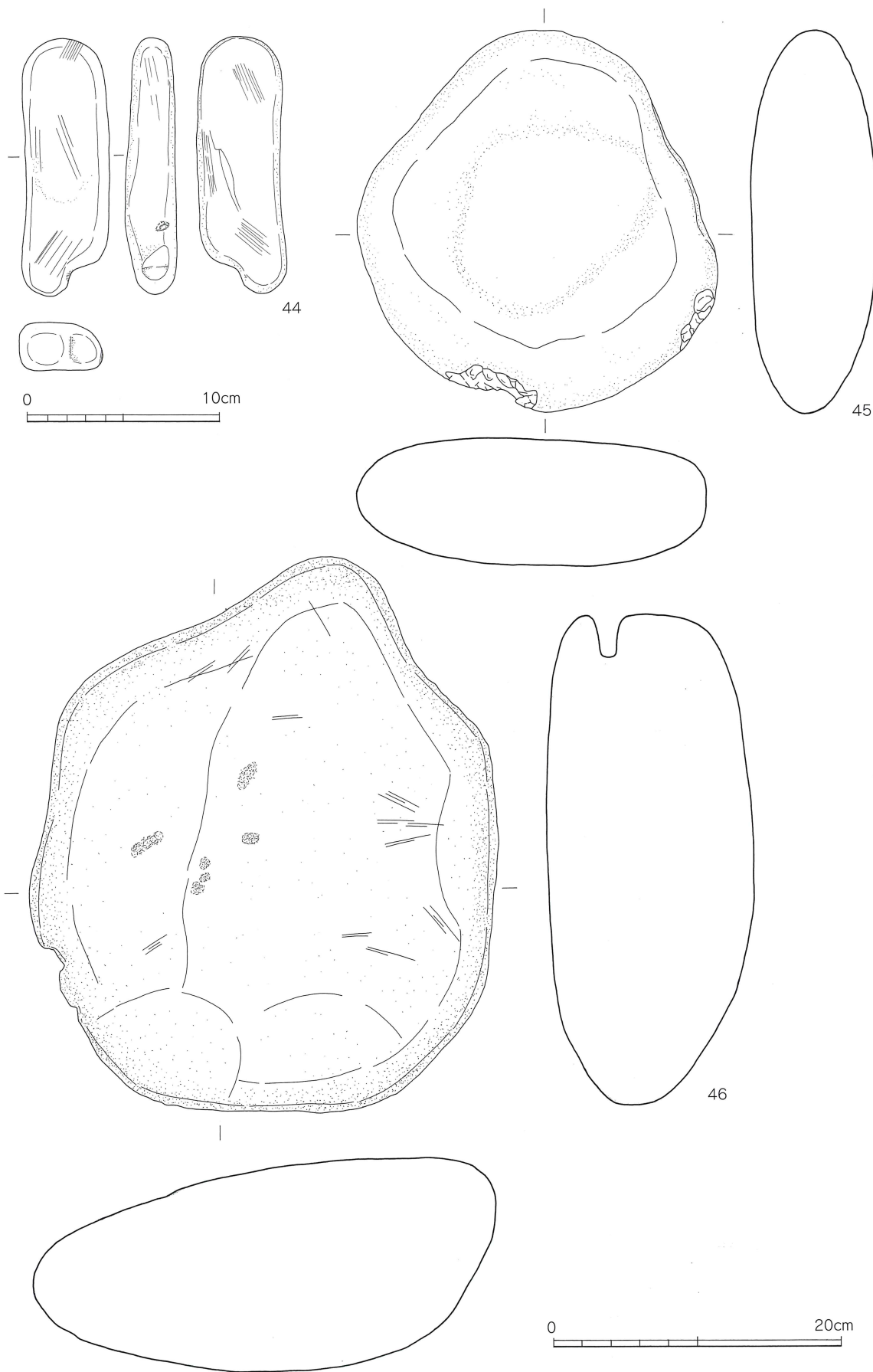
第34図 SH-1 (60分の1)

出土遺物は第35図30から46である。32から37は須恵器である。32から33は坏身で、底部はいずれも回転ヘラ削りである。30は内面口縁直下から体部にかけて三本の平行するヘラ記号が見られる。37は坏蓋。34は低脚付きの碗で、脚部には3段にわたって現状で9列（想定であと+2列）円形の穿孔がある。穿孔は外側から行われており、体部と脚部は直接接合されている。35は高坏脚部、36は脚部である。38から42は土師器である。43は滑石製の紡錘車である。

住居跡の時期は6世紀後半代である。



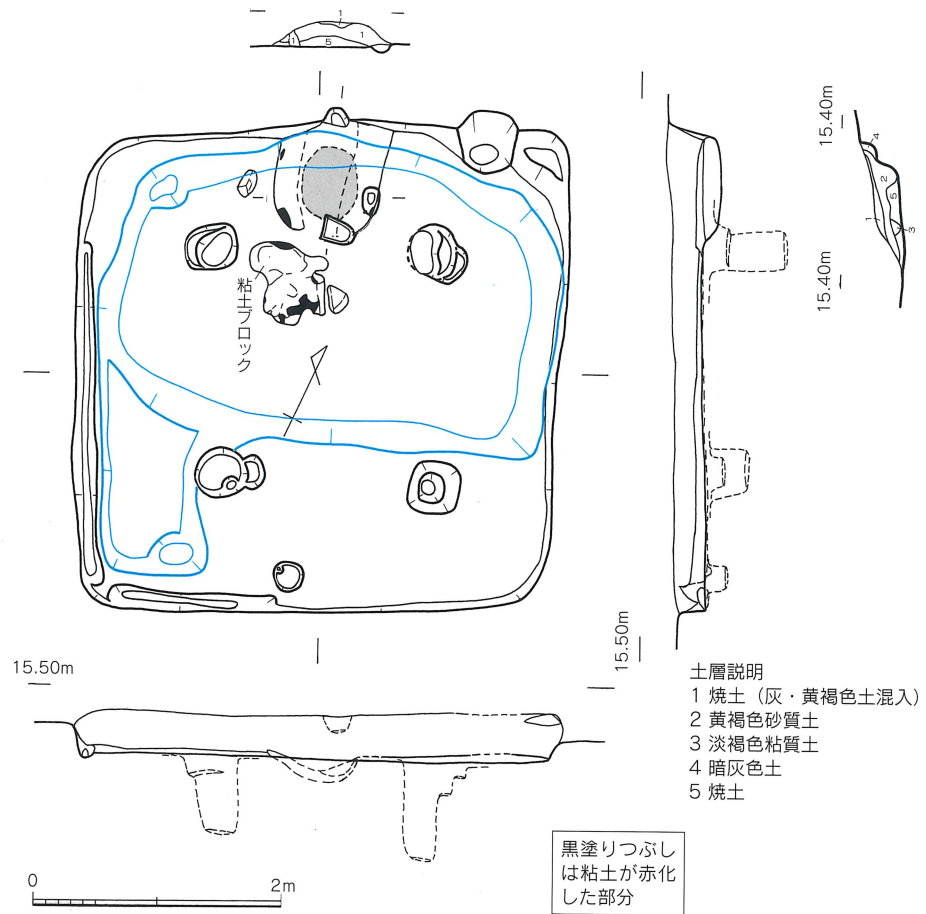
第35図 SH-1 出土遺物 (3分の1)



第36図 SH-1 出土遺物 (3分の1)

SH-3 (第36図)

B区北端にある東西4.0m、南北3.90mのほぼ正方形を呈する竪穴住居跡である。深さは20~30cmと残りが比較的良い。北側の一辺中央部に据付の竈がある。竈は破壊されていたが、周辺には灰白色の固い粘質のブロックが散乱していた。袖部と思われる部分にも淡灰茶色砂質土が認められ、一部被熱で赤化していた。その袖部に挟まれた焚き口の部分は65×45cmの楕円形に赤化しており、特に内側(図のアミカケ部分)

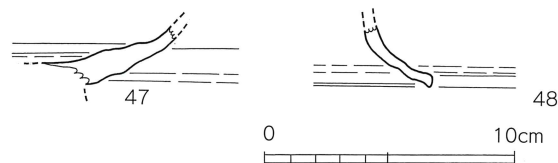


第37図 SH-3 (60分の1)

は強い被熱を受けていた。また、竈外側の壁際には外に向かって壁が掘り込まれており、煙道部の一部が残存していると考えられる。

住居跡床面の内、北側3分の2程は貼り床で、貼り床を取り除くと2.5×3.6mの長方形の土坑となった(図37の青線部分)。深さは床面から30cmほどある。

遺物は少なく、図示できるほど大きなものもほとんど無い。図示できたものは2点のみである。第38図47と48は須恵器高坏である。

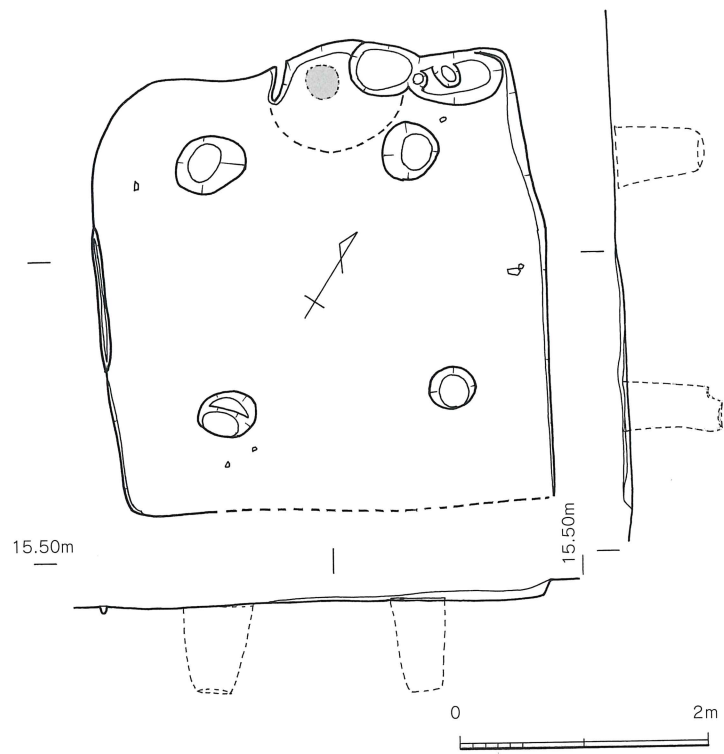


第38図 SH-3出土遺物 (3分の1)

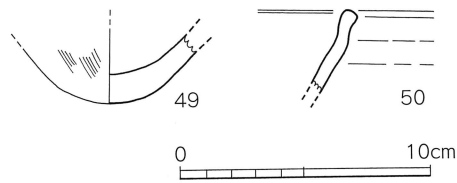
SH-10 (第38図)

B区南端で確認された竪穴住居跡で、一部水路によって削平されているとともに、上部も削平されており壁はほとんど残されていない。かろうじて貼り床のプランで住居跡の大きさがわかる。それによると、東西3.6m、南北4.16mで、北側一辺中央に据え付けの竈がある。竈は上部が完全に削平されているため、上部構造は不明であるが、袖の一部と焚き口の円形に比熱した部分が残っていた。

出土遺物は第40図49と50である。49は土師器の甕、50は須恵器である。



第39図 SH-10 (60分の1)

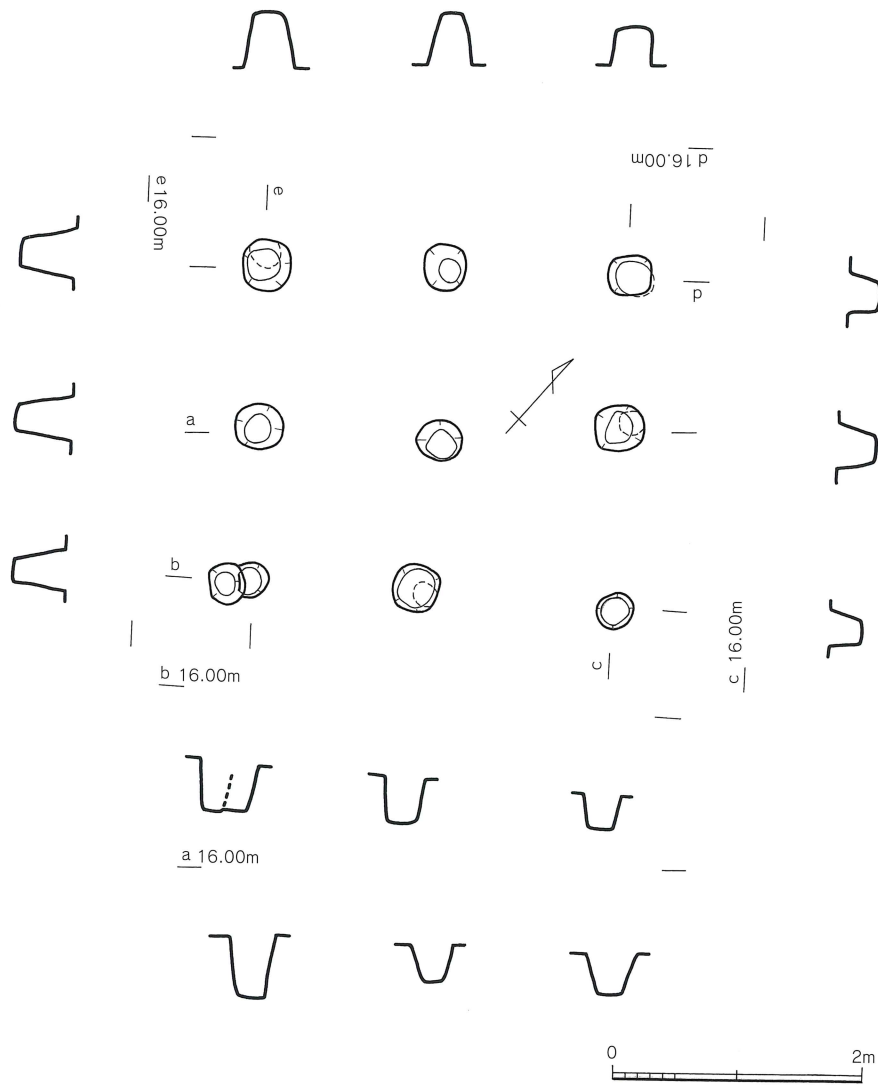


第40図 SH-10出土遺物 (3分の1)

b 掘立柱建物

SB-4 (第41図)

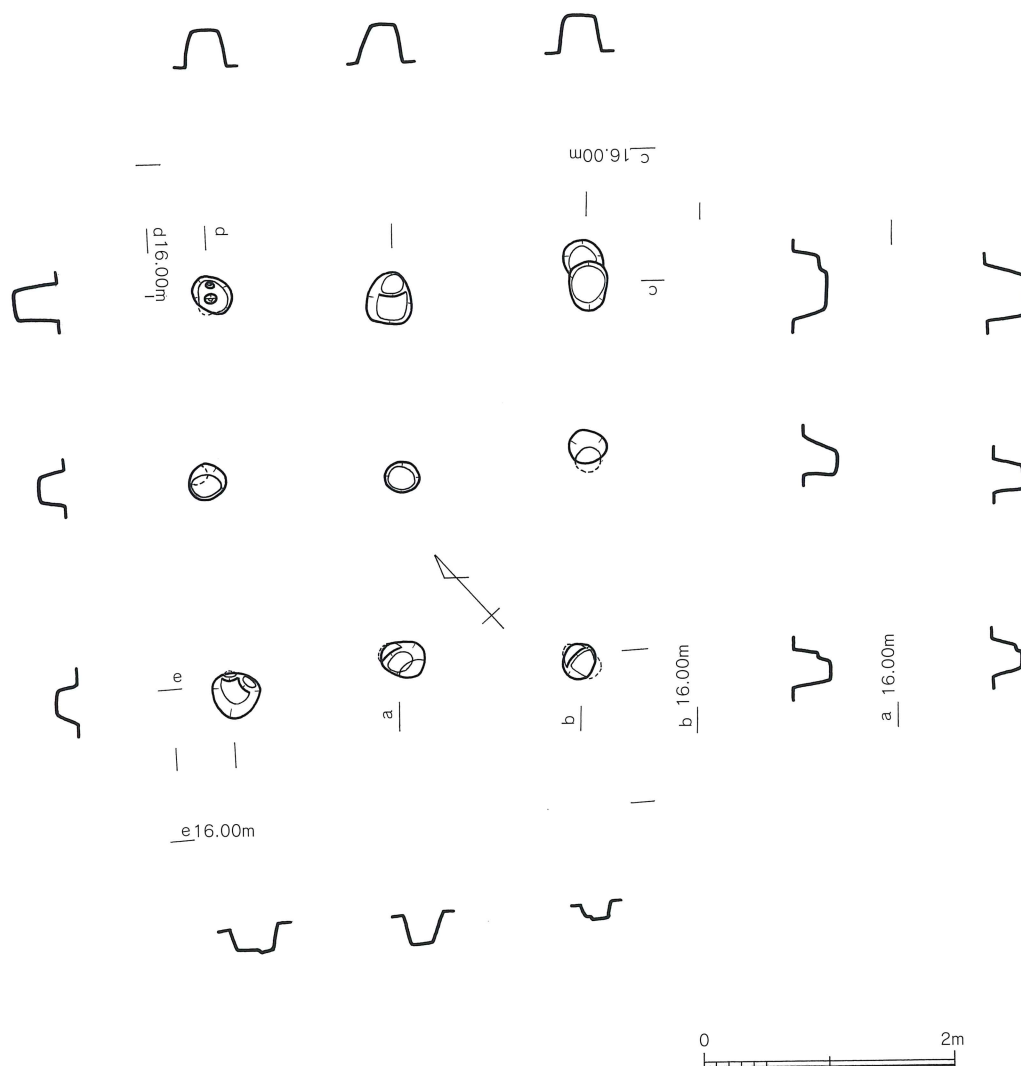
B区中央で確認された2間×2間の倉庫である。略南北方向に3.0m、略東西方向に2.6mの長方形を呈する。柱穴の直径は30cmから40cmで、深さは20cmから30cmである。柱穴から遺物の出土はなかったが、状況から古墳時代後期と考えられる。



第41図 SB-5 (60分の1)

SB-5 (第42図)

B区中央やや北側で確認された2間×2間の倉庫である。略南北方向に3.1~3.2m、略東西方向に2.9~3.1mのほぼ方形を呈する。柱穴の直径は30cmから40cmで、深さは15cmから30cmである。柱穴から遺物の出土はなかったが、状況から古墳時代後期と考えられる。



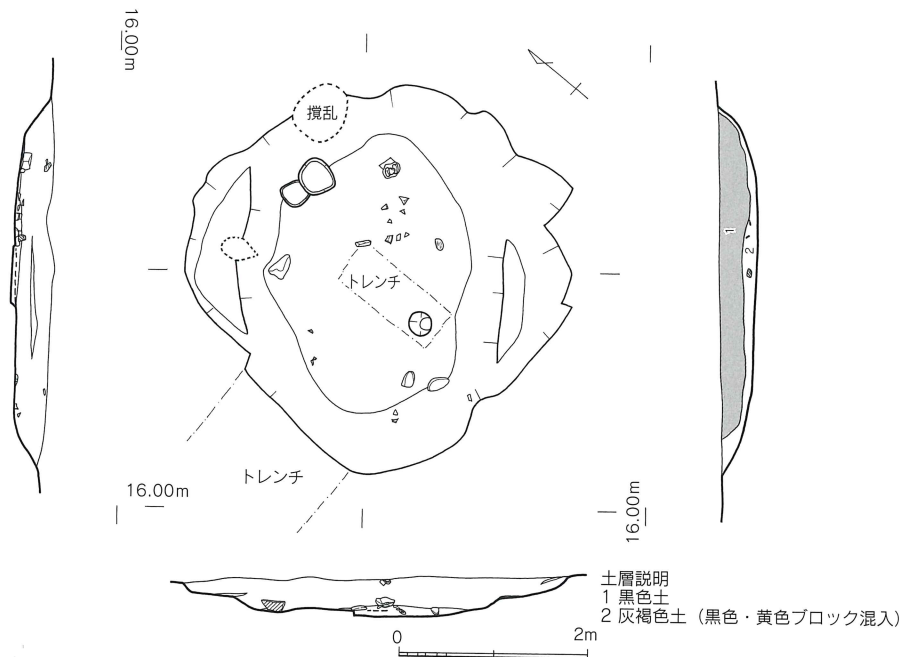
第42図 SB-4 (60分の1)

c 土坑と出土遺物

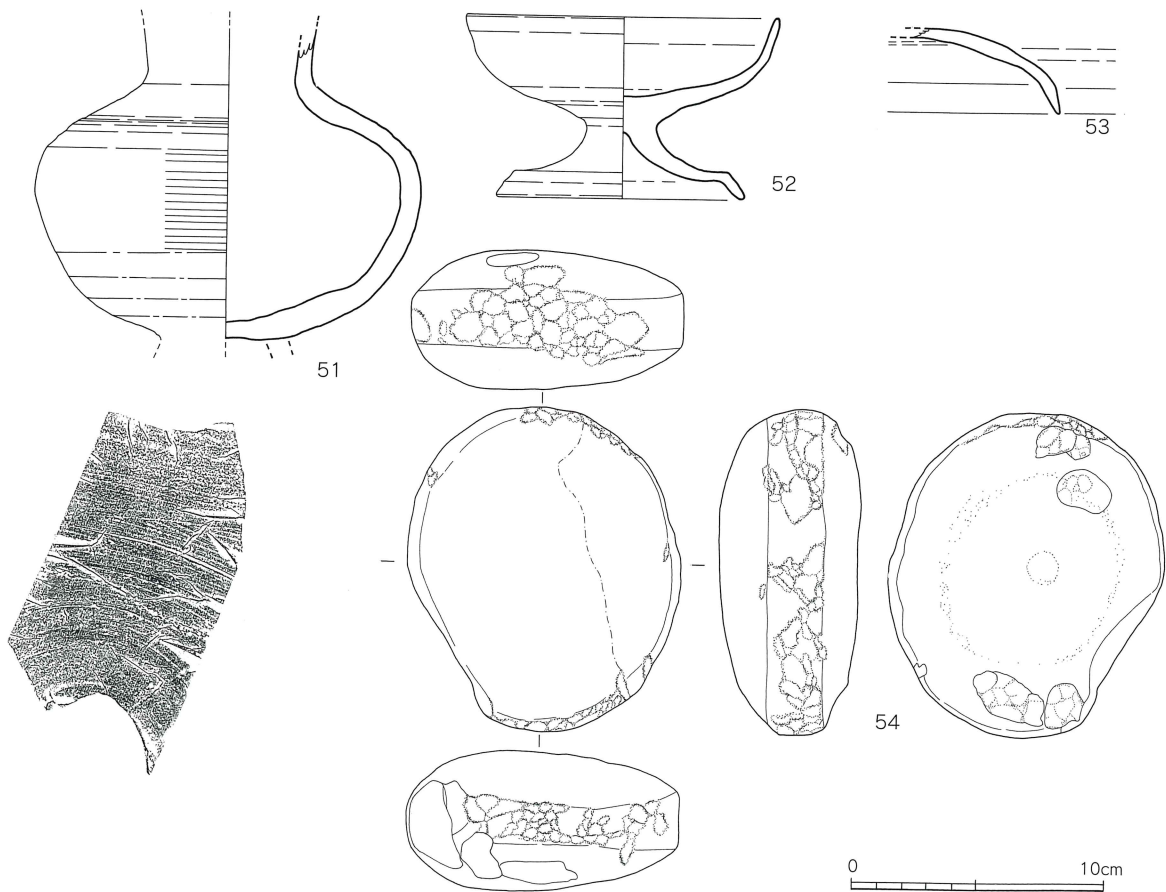
SK-2 (第43図)

B区ほぼ中央で検出された土坑で、一辺1.8m前後の不整な方形を呈する。深さは30cmほどで、床面は不整の楕円形となりほぼ平坦をなすが、硬化した部分はない。壁はなだらかに立ち上がり、東西方向にそれぞれ一段の平場が附く。堆積は2層で、主に遺物が含まれる床面に堆積した灰褐色土を黒色土が覆う。

遺物は第44図51から54である。51から53は須恵器で、51は脚付きの壺、52は低脚の高杯、53は坏蓋である。54は敲石である。



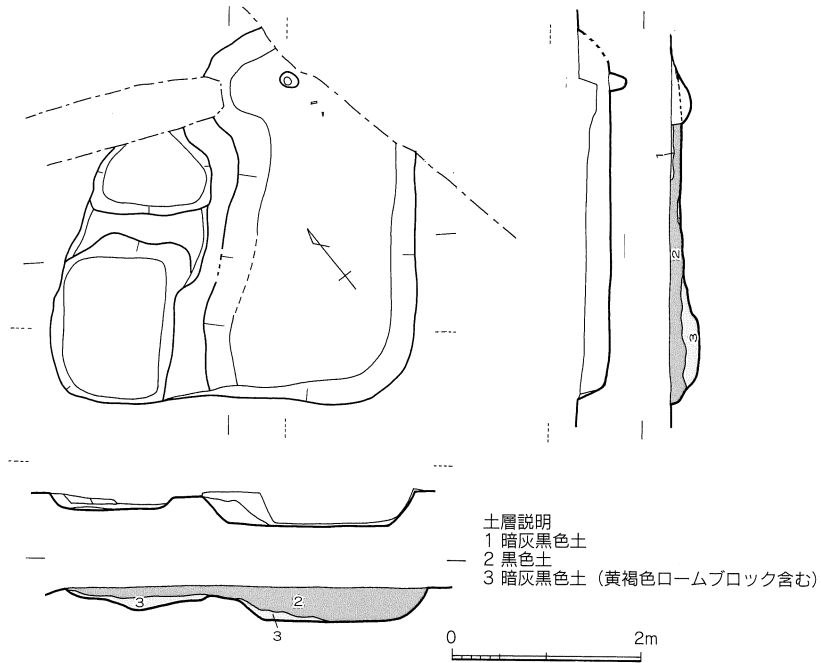
第43図 SK-2 (80分の1)



第44図 SK-2 出土遺物 (3分の1)

SK-11 (第45図)

A区中央東側で確認された土坑で、SD-14に切られている。東西方向に3.9m、南北方向は4.0+αmで、一部調査区外に伸びている。不整な長方形を呈するものと考えられる。床面は平坦ではなく、ほぼ中央を南北方向に伸びる幅30cmほどの掘り残しを挟んで、両側が一段低くなっている。西側はまた東西方向の直線状の掘り残しを挟んで、両側が土坑状に窪む。出土遺物は須恵器の細片で、図示できるものはない。



第45図 SK-11 (80分の1)

5) 中世～近世

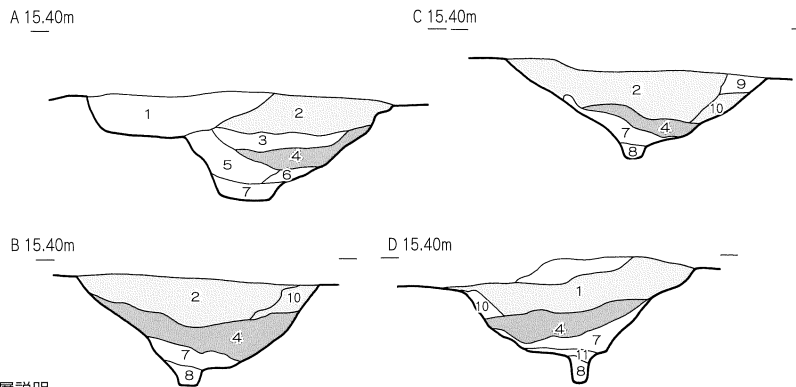
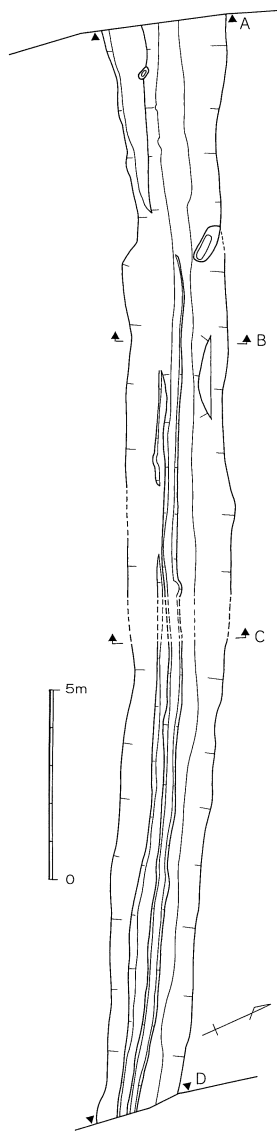
a 溝と出土遺物

SD-15 (第46図)

A区中央付近を略東西に伸びる溝で、幅2.5～2.7m、深さ0.9～1.3mで総延長29mを検出した。溝はほぼ直線で、床面の標高は西に行くほど僅かに低くなる。この溝の堆積土を見ると、明確な砂層はなかったが、断面形状から水路であったことが想定される。旧字図を見ると、調査区A区とB区の間を流れる水路によって切断されているものの、唐池（現在は埋め立てられている）から伸びる水路から分岐した枝水路があったことを想定させる地割りが存在する。おそらく、遺跡の北側の谷に排水するための排水路として機能していたものと考えられる。

溝堆積土は、4ヶ所の断面を見ると概ね4層が堆積しているが、それらは再掘削に伴うものであり、少なくとも3回の掘り直しがあったことがわかる。後述するように、最終的な埋土であるI層とII層（第47図の2層）からは近世の遺物が、III層（第47図の3、4層）と最下層のIV層（第47図の第7、8層）からは中世の遺物が出土していることから、当初の掘削は中世に遡ることが確実である。

遺物は、I層から第48図55～58、II層から59～67、III層から18～71、IV層から72～75が出土している。

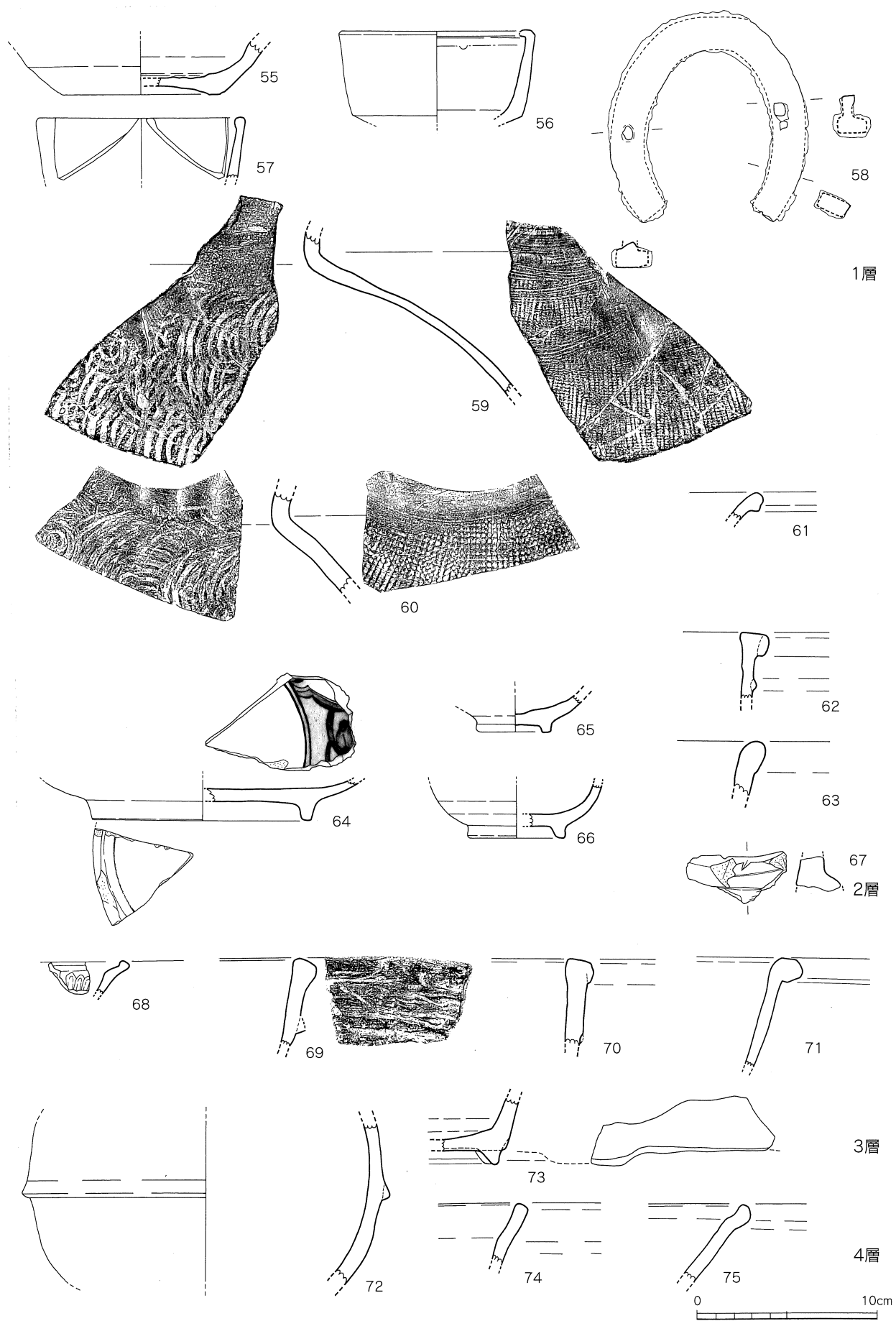


- 土層説明
- | | |
|-------------------|--------------------|
| 1 暗灰褐色土 | 7 暗黄褐色土 |
| 2 黒色土 (黄褐色ブロック含む) | 8 暗茶褐色土 |
| 3 暗黄褐色土 | 9 黄色褐色ブロック土 |
| 4 暗灰黒色土 | 10 黒色土 (黄褐色ブロック含む) |
| 5 暗黄褐色土 | 11 暗灰褐色土 |
| 6 暗黄茶色土 | |

0 2m

第46図 SD-15 (200分の1)

第47図 SD-15土層断面図 (80分の1)



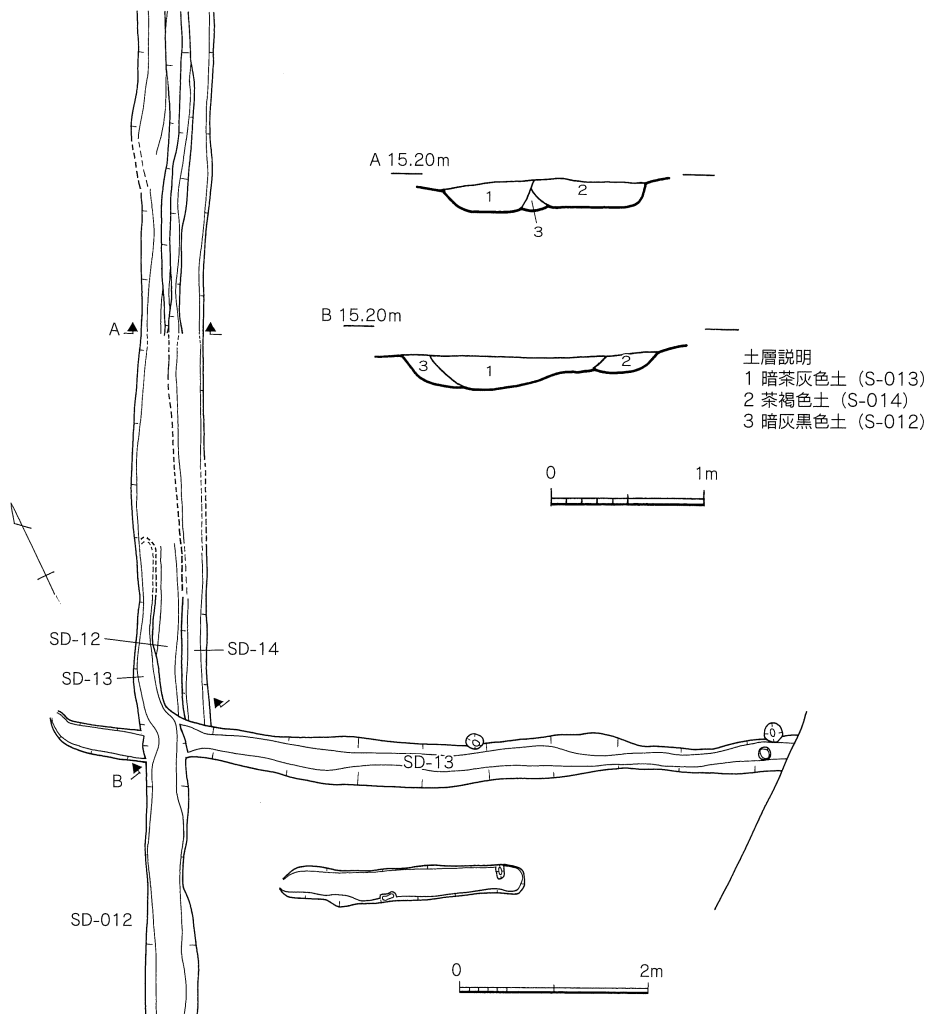
第48図 SD-15出土遺物 (3分の1)

このように、Ⅲ層とⅣ層からは16世紀代の遺物しか出土しておらず、当初の掘削から1回目の掘り直しについては、16世紀に行われたと考えられる。

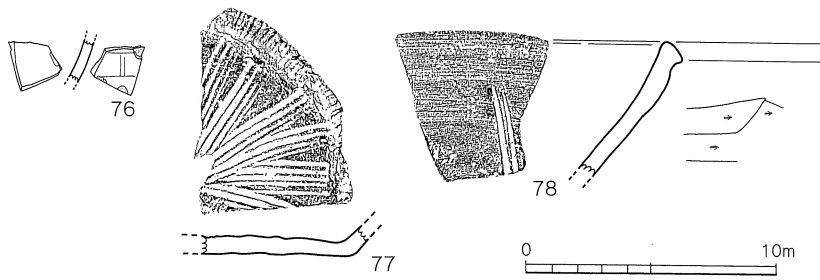
SD-12、13、14、23 (第49図)

A区において確認された溝で、一部B区でも続きが確認されている。幅はいずれも30~50cmで、深さは15~20cmである。基本的には遺跡の北側の谷に平行に、丘陵裾部に沿って掘られており、そこから直角に丘陵内側に折れ曲がる。旧字図を見ると、基本的な地割りの境界線に相当するようであり、畑地の境を示す溝と考えられる。これらの溝は、切り合い関係から「SD-12」→「SD-14」→「SD-13・SD-23」の順に掘削されているのがわかる。

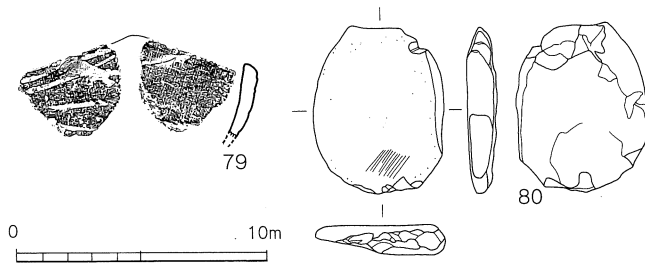
遺物は、図示できるものがS-12から3点、SD-14から2点出土したのみで、他は細片で時期が特定できない。第50図76は龍泉窯青磁の碗で、外面に直線的なへら描き文が見られる。77は瓦質の播鉢で、放射状の摺目が入られている。78は瓦質の播鉢で、外面にへらケズリがある。いずれも16世紀代と考えられる。このことから、最初に掘削されたSD-12は、SD-15同様中世まで遡るものと考えられる。第51図はSD-14出土遺物であるが、79は縄文時代晩期前半滋賀系土器、80は石錘であり、直接SD-14の時期を示すものではない。



第49図 SD-12、13、14、23 (部分) (80分の1)



第50図 SD-12出土遺物 (3分の1)



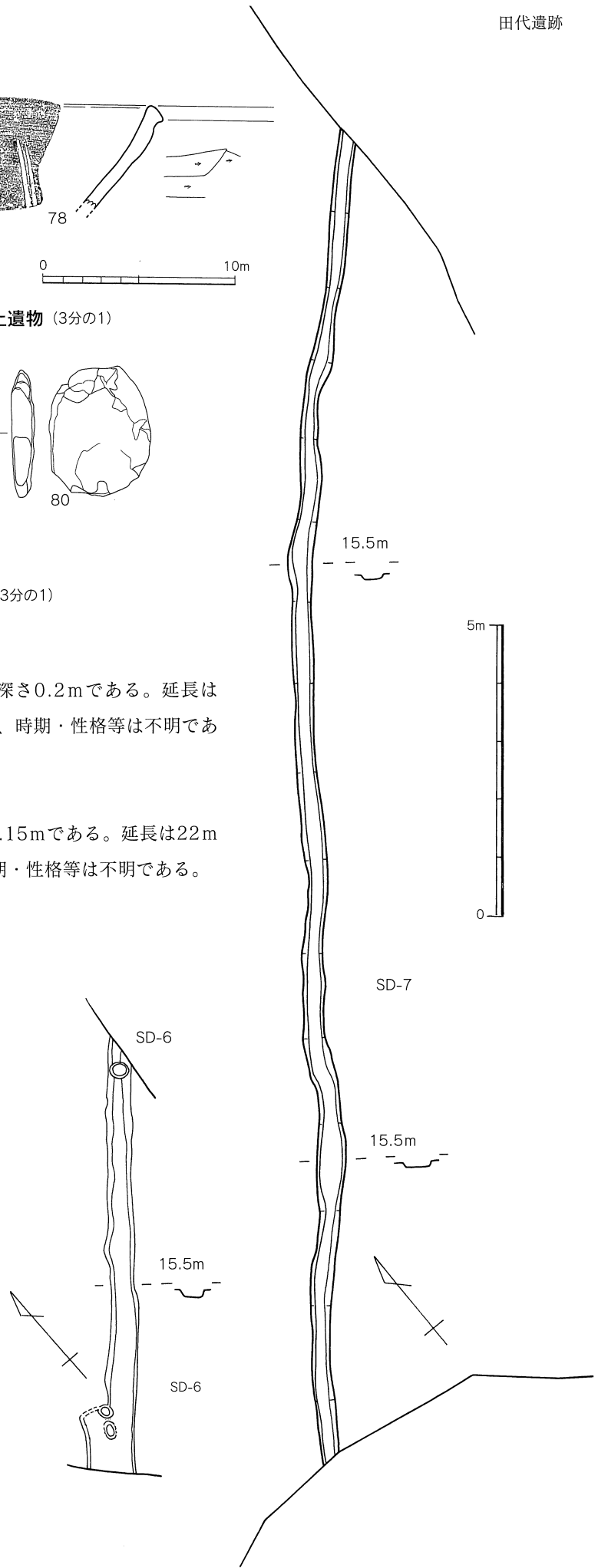
第51図 SD-14出土遺物 (3分の1)

SD-6 (第52図)

B区南端で確認された溝で、幅0.5m、深さ0.2mである。延長は13m確認している。遺物は出土しておらず、時期・性格等は不明である。

SD-7 (第52図)

B区で確認された溝で、幅0.4m、深さ0.15mである。延長は22m確認している。遺物は出土しておらず、時期・性格等は不明である。



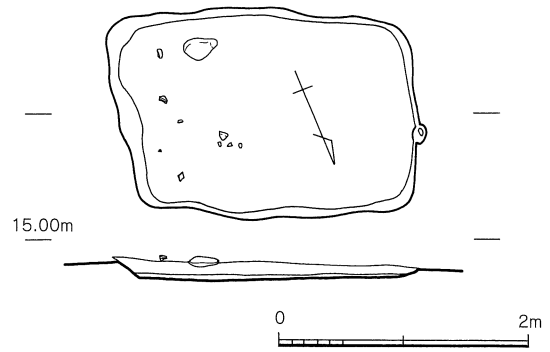
第52図 SD-6, 7 (100分の1)

b 土坑と出土遺物

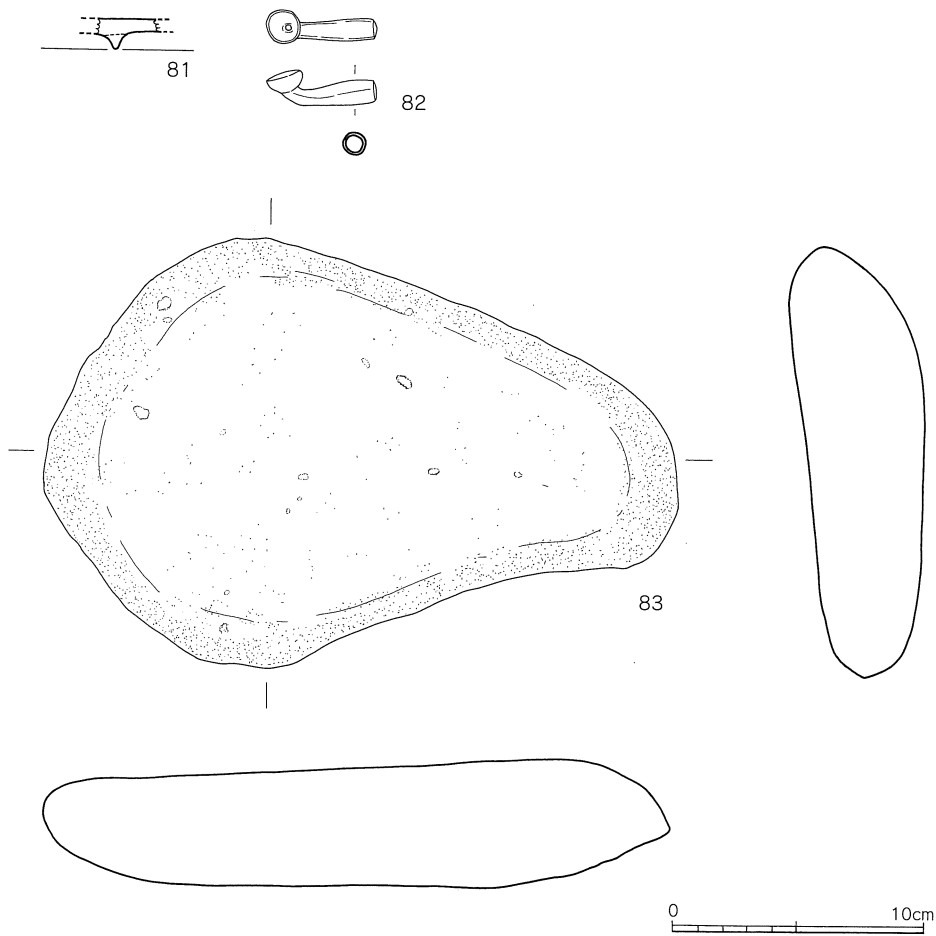
SK-17 (第53図)

A区北寄りにある土坑で、東西2.40m、南北1.65mの長方形を呈する。深さは残りの良いところで約15cmである。遺物は東側に集中して出土している。

第54図81は土師質土器碗、82は煙管、83は磨石である。



第53図 SK-17 (40分の1)

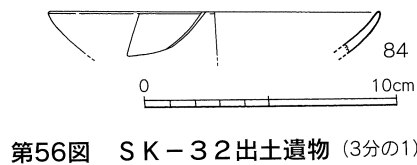
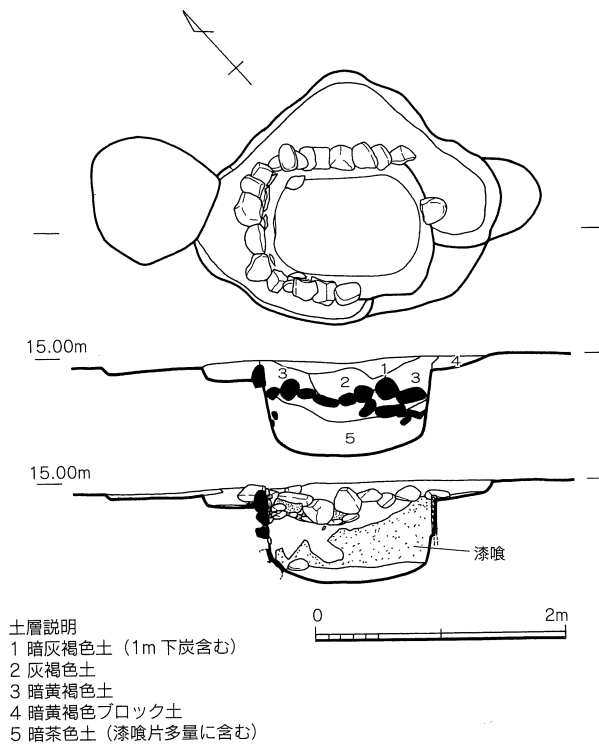


第54図 SK-17出土遺物 (3分の1)

SK-32 (第55図)

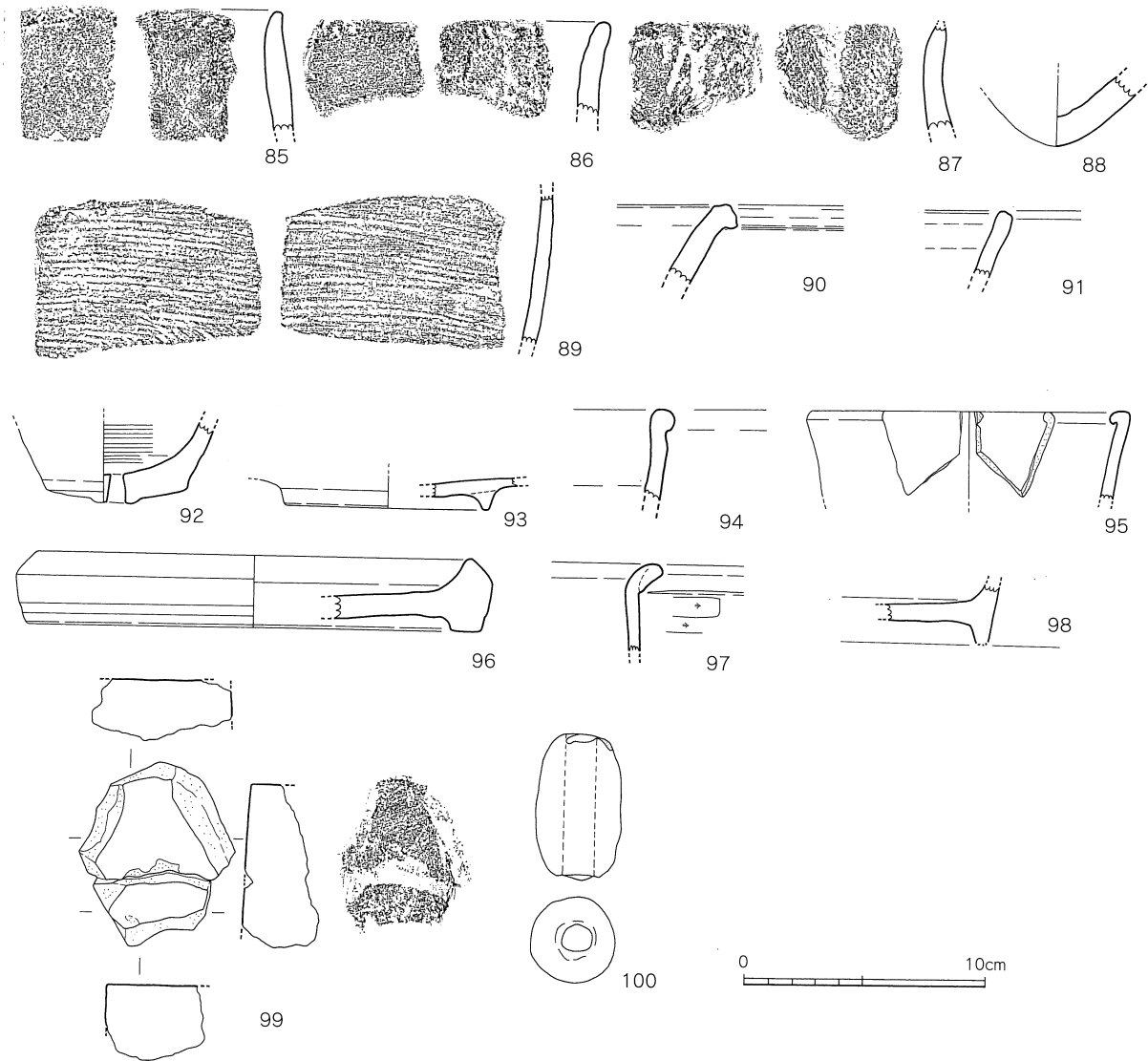
A区北寄りにある土坑で、2段掘りになっており、内側の土坑で東西1.30m、南北0.9mの長方形を呈する。深さは残りの良いところで約0.74mである。外側の掘り込みは不整の楕円形で、東西2.5m、南北2.0mほどである。2段目の土坑の淵には円礫を3段積み、その下から底面にかけては漆喰を塗っている。埋土中層には礫が堆積していた。

遺物は第56図84は白磁の小皿で、18世紀以降であり、江戸時代に納まる。

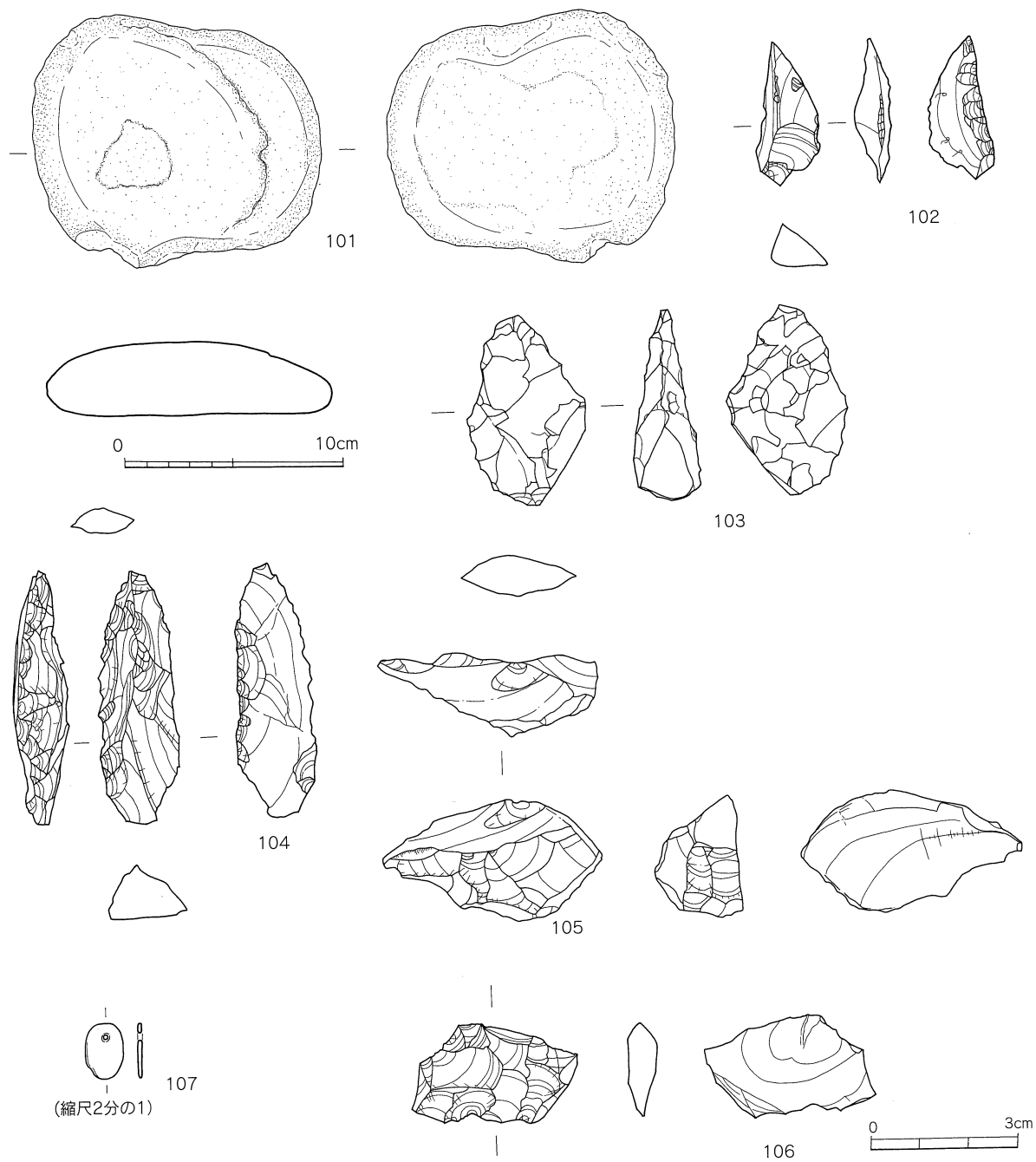


6) その他の遺物

第57図は、攪乱から出土したり、表採した遺物である。85から88は縄文時代早期の無紋土器、89は縄文時代後期の条痕文を有する土器である。90は須恵器の甕口縁部。91は鉢である。92から99は近世以降の遺物で、92や96、99は用途が不明である。第58図101以降は石器で、旧石器については22ページで触れた。107は粘板岩製の垂飾品で、穿孔がある。



第57図 その他の遺物 その1 (3分の1)



第58図 その他の遺物 その2

第4節 小結

田代遺跡は、北西側に幅20mほどの谷を望む台地縁辺部に立地している。縄文時代の焼土坑は、その台地の先端部付近に集中している。弥生時代の遺構もほぼ重なる。古墳時代になると、台地の縁辺部から約30mほど入った地点に南北方向に遺構が展開する。東側への展開が不明であるが、谷に面した部分は居住区とは違う場であったことが想定できるような配置である。

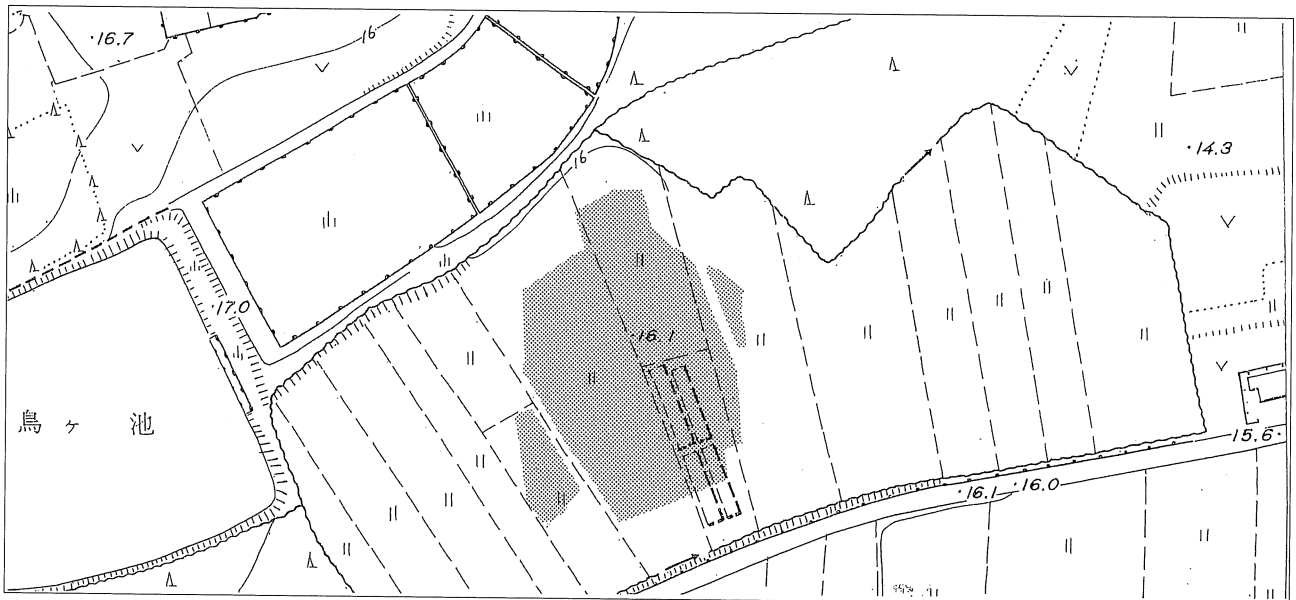
中世になると、その後半期に狭い溝による区画と伴に、谷に向かってほぼ直角方向に伸びるように大きな溝が掘削される。明治時代の旧字図でも確認できるこの区画は、おそらく上畑成遺跡で検出された溜池灌漑に伴う水路から枝分かれする配水溝と考えられる。それに平行する狭い溝は、畑地の区画溝と考えられるだろう。今回の調査によって、この地区の土地の区割りが16世紀にまでは遡ることが明らかになった。後述の上畑成遺跡の成果も同様である。

第5章 上畑成遺跡

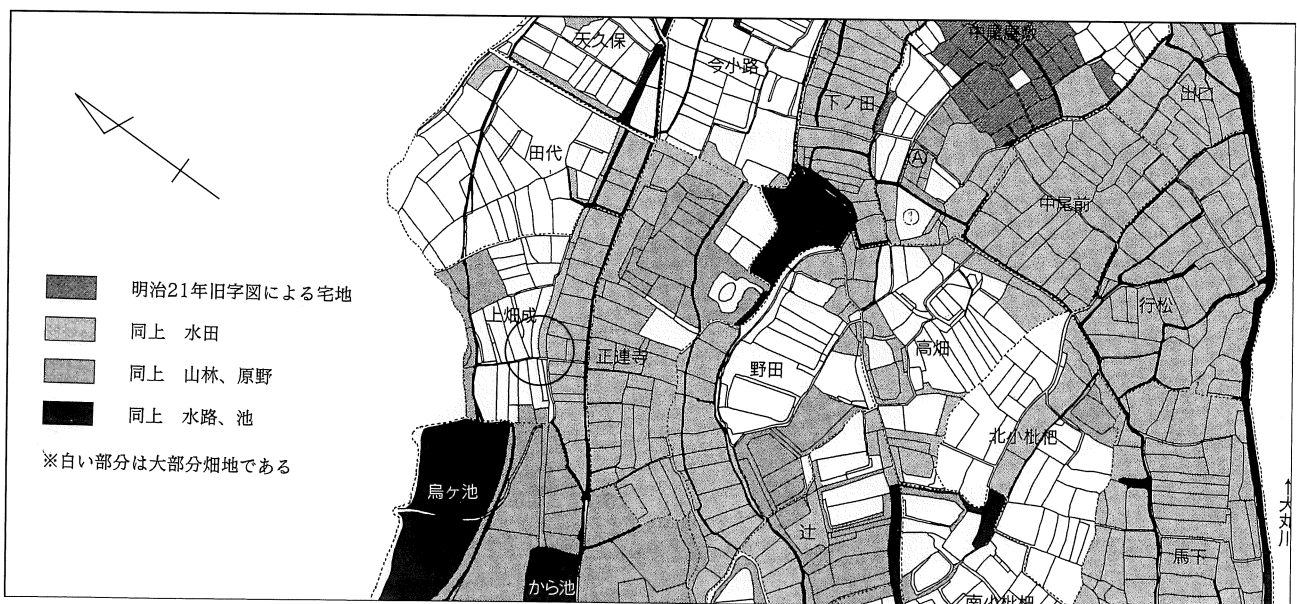
第1節 遺跡周辺の環境

上畑成遺跡は、新しい水路を挟んで田代遺跡に隣接しており、実質的には同一の遺跡と考えても差し支えないものである。ただ、田代遺跡が西側から北側にかけて回り込む谷に面する台地の西の端に立地していたのに対し、上畑成遺跡は台地中央部に立地していることにより、遺構の内容には若干の相違も見受けられる。

明治21年の旧字図を見ると、上畑成遺跡の調査箇所は南端は、東西に細長い地割りから南側が水田、それより北側は畑地となっている。東西に細長い地割りは、西へ辿ると「から池」（現在は埋められている。）に行き着くことから、水路の痕跡と考えられる。実際、調査区から約200m東へ行くと、今でも水路として水が流れている。旧字図でわかるように、水路が南側に付け替えられたことにより、旧水路が水田化したものである。



第59図 上畑成遺跡調査区位置図 (2,500分の1)



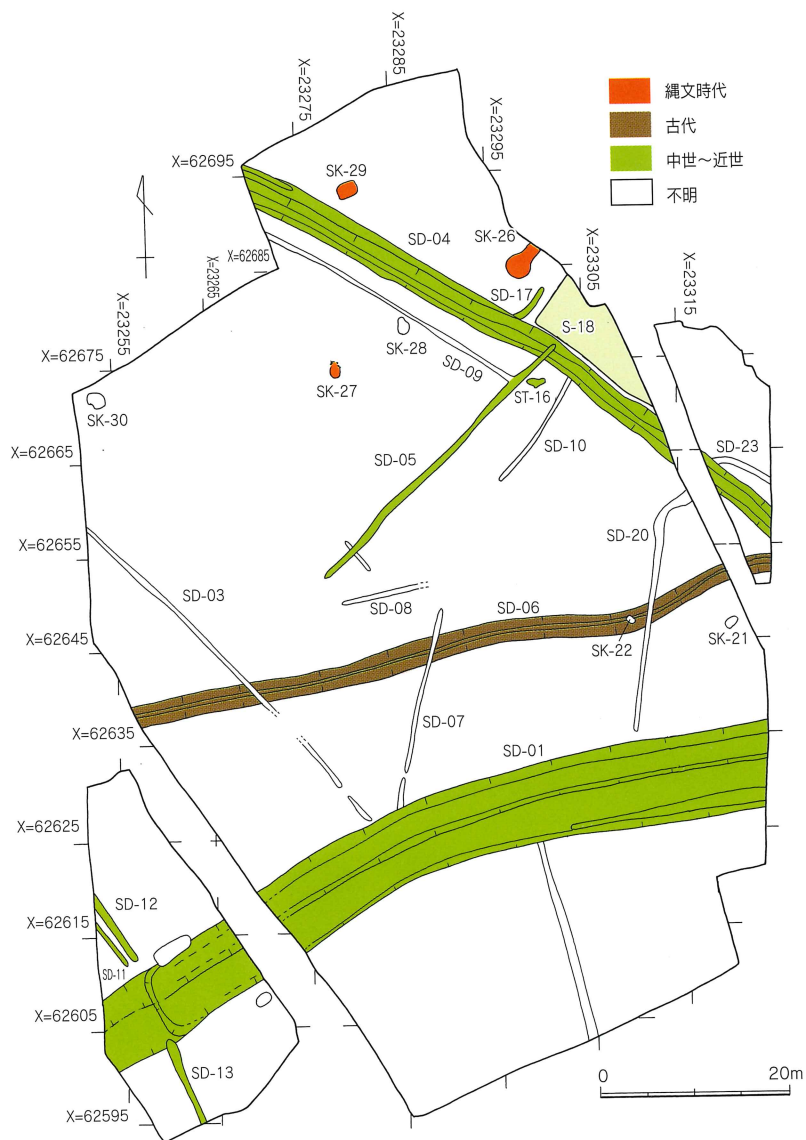
第60図 上畑成遺跡周辺旧字図 (○印が遺跡)

第2節 遺跡の概要

遺跡の南半は耕地整理で削平されていたため溝等の深い遺構のみが残っていたが、北半では残りが良く縄文時代の遺構等も発見された。検出された遺構は溝と土坑を中心とするもので、竪穴住居跡や掘立柱建物など居住に係わる遺構は皆無である。この地が田代遺跡とは異なり、主に生産に係わる遺跡であることを示している。

最も遡る遺構は縄文時代早期の土坑（炉穴）で、次いで古代の溝1条、中世の溝2条と墓1基、近世の水田跡などが検出されている。

また中世以後の遺構の中に奈良時代の須恵器がかなり含まれており、この付近に古代の集落が存在したことをうかがわせる。



第61図 上畑成遺跡遺構配置図 (800分の1)

第3節 遺構と遺物

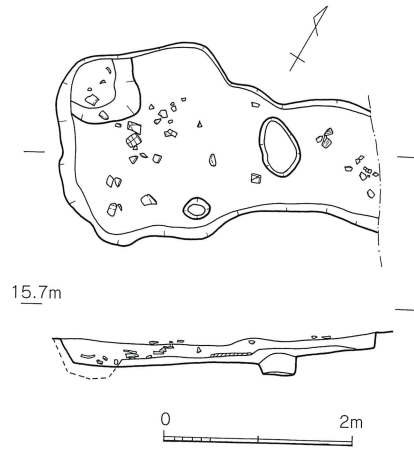
1) 縄文時代

a 土坑と出土遺物

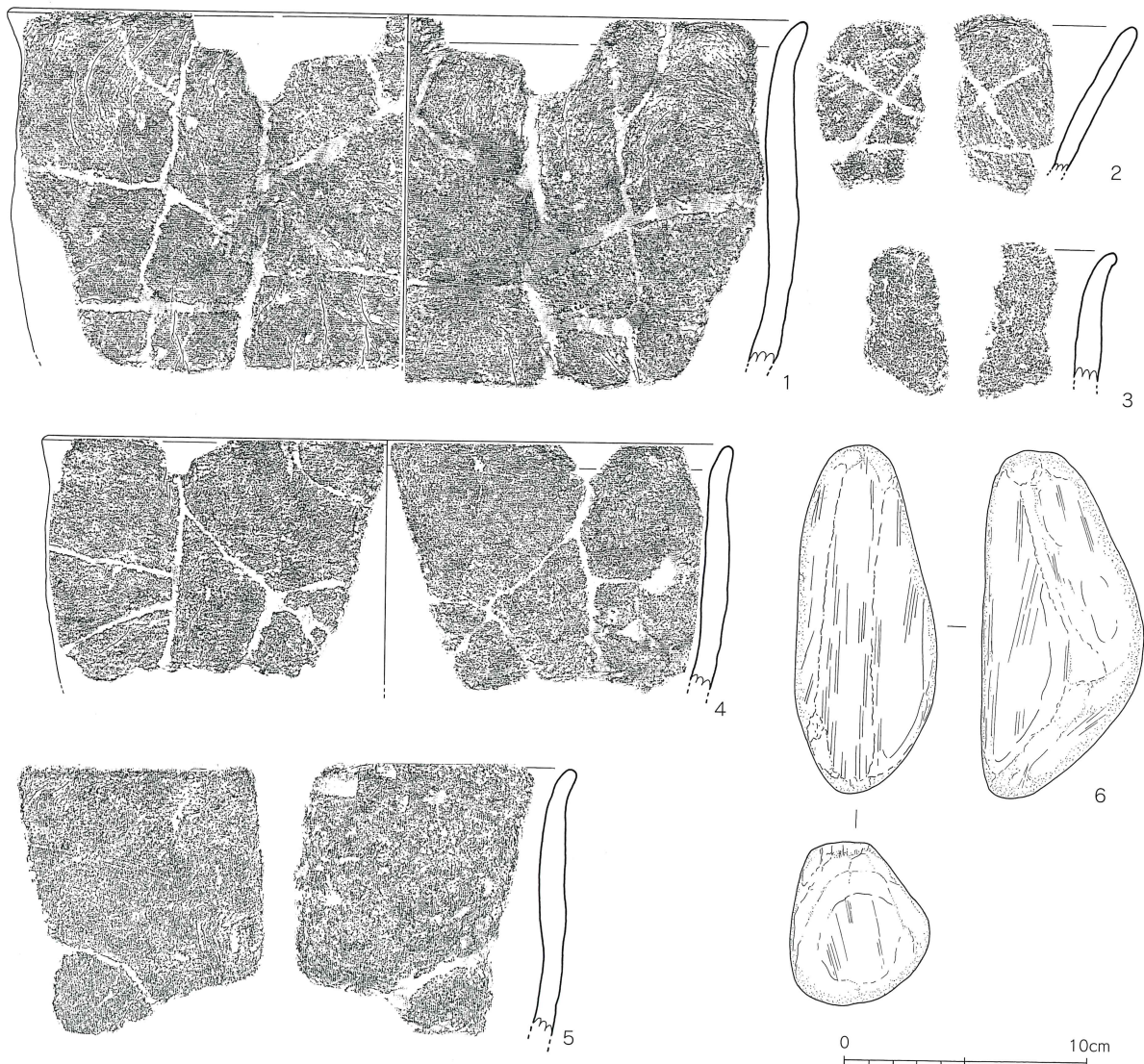
SK-26 (第62図)

調査区北側で確認された土坑で、一部調査区外に伸びている。東西方向に $3.4 + \alpha$ m、南北方向は $1.195 \sim 1.2$ mで不整の長方形であるが、西側に方形の土坑があり、そこから東側に別な土坑が接続しているように見える。深さは西側の方形部分で20cm前後、東側は10cm前後である。床面には2ヶ所焼土面があり、2つの土坑が重複していることを示唆するが、両者の明確なプランは確認できなかった。床面の北西隅には一辺0.7mの土坑がある。

遺物は、2ヶ所に集中して出土しているが、いずれも床面からは若干浮いている。第60図1から6までがSK-26出土遺物である。1から5は縄文時代早期の無文土器である。無文土器は2を除いて口縁端部で小さく外反し、胴部が緩くふくらむ形態を有する。6は磨石である。



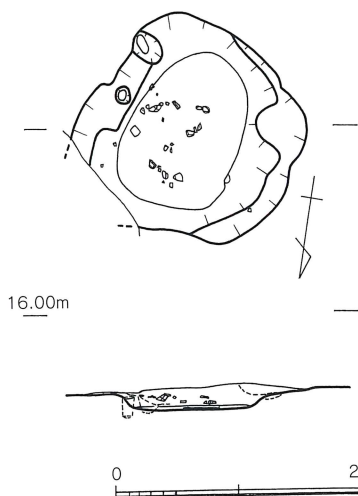
第62図 SK-26 (80分の1)



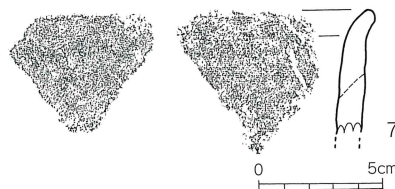
第63図 SK-26出土遺物 (3分の1)

SK-27 (第64図)

SK-26とはSD-4を挟んで約25m西側に位置する土坑で、一辺1.6mほどの隅丸方形になる。深さは20cm程度で壁の立ち上がりは緩やかとなり、床面はほぼ平坦である。床面にはほぼ中央部に焼土面がある。遺物は、いずれも床面から浮いた状態で出土している。遺物は図示できたものは1点のみであるが、いずれも縄文時代早期の無文土器である。第63図7は無文土器口縁部である。



第64図 SK-27 (60分の1)

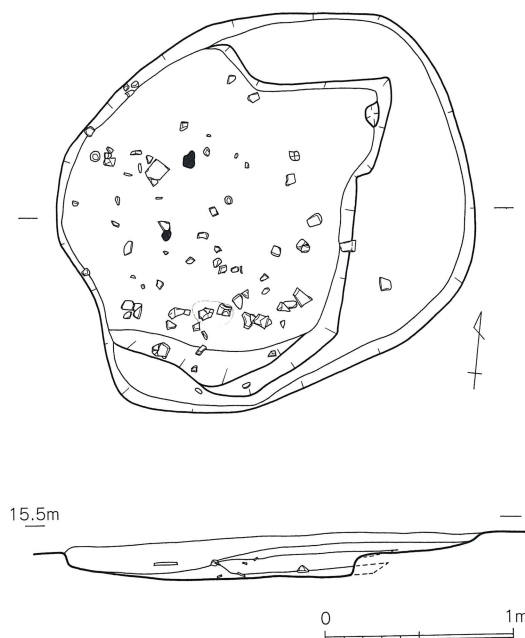


第65図 SK-27出土遺物 (3分の1)

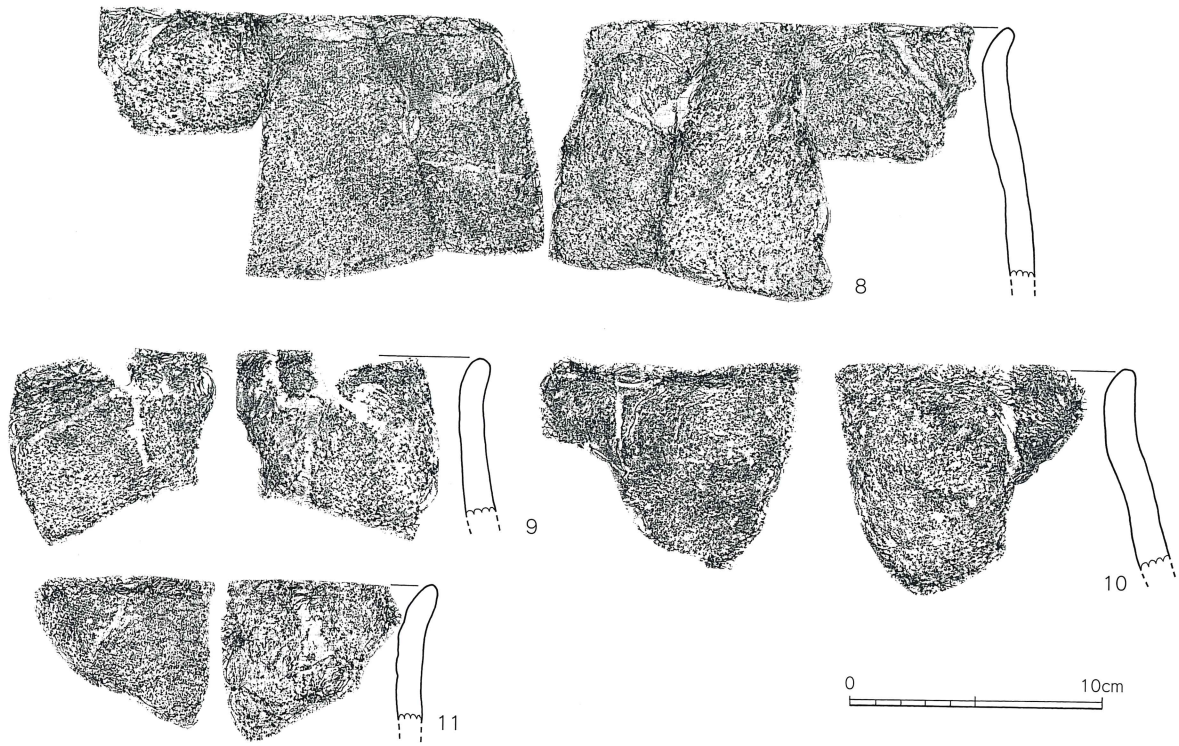
SK-29 (第66図)

東西2.22m、南北2.05m、深さ22cmの楕円形の土坑である。底面は2段になっており、深い方から縄文土器が出土した。

遺物は第67図8から11で、いずれも縄文時代早期の無文土器である。口縁端部で小さく折れる。



第66図 SK-29 (40分の1)



第67図 SK-29出土遺物 (3分の1)

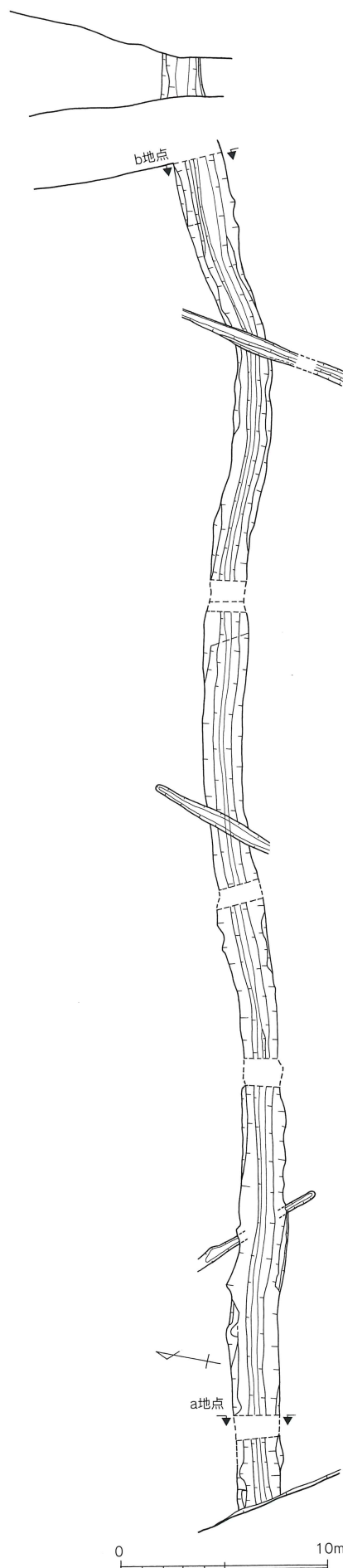
2) 古代

a 溝と出土遺物

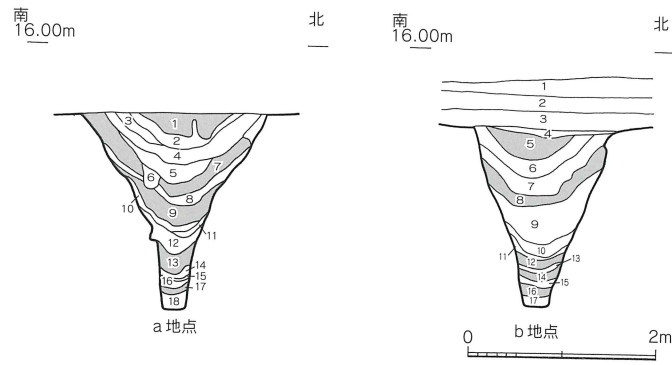
SD-06 (第68図)

調査区のほぼ中央を東西に抜ける溝で、最終的な掘り上がり段階の大きさは、幅2.0m、深さ2.0mである。断面を見ると、底部から70cmほどは幅約25cmの箱形と狭く、そこから上部が「ハ」の字状に開き、全体として「Y」字形を呈する。埋土は黒褐色を呈する風化土層をキー層に大きくは5層に分層され、少なくとも5回はしばらくの間、掘直しなどに伴い堆積土が風化する時期があったことがわかる。水流を証拠立てる砂層の堆積はない。

出土遺物は、第70図12から15である。13と14は土師器坏で、底部はいずれも回転ヘラ切り離しである。15は須恵器甕口縁部。12は弥生土器後期後半の高坏口縁部。本来この溝に伴うものは13と14であり、8世紀末から9世紀前半頃である。

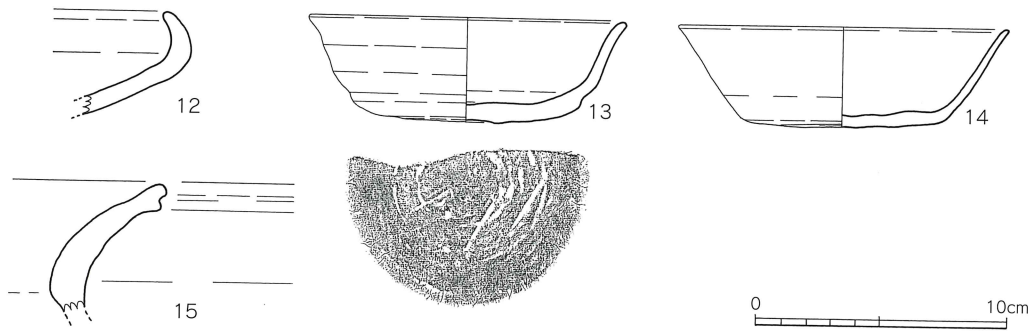


第68図 SD-06 (300分の1)



第69図 SD-06土層断面図 (80分の1)

土層説明		土層説明	
1	▲ 暗茶褐色土 (風化土層)	1	▲ 1~4 圃場整備後の堆積
2	▲ 暗茶褐色土	2	▲ 5 淡黒褐色土
3	▲ 茶褐色土	3	▲ 6 暗茶褐色土
4	▲ 暗茶褐色土	4	▲ 7 黄褐色土
5	▲ 暗茶褐色土	5	▲ 8 暗黒褐色土 掘り直し⑤
6	▲ 暗黒褐色土	6	▲ 9 暗茶褐色土
7	▲ 暗黒褐色 (風化土層)	7	▲ 10 黄茶褐色土 掘り直し④
8	▲ 暗黄褐色土 掘り直し⑤	8	▲ 11 黄褐色土
9	▲ 黄茶褐色土 (風化土層) 掘り直し④	9	▲ 12 淡黒褐色土 掘り直し③
10	▲ 黄褐色土	10	▲ 13 暗黄褐色土
11	▲ 灰褐色土 掘り直し③	11	▲ 14 淡黒褐色土 掘り直し②
12	▲ 黄褐色土 掘り直し③	12	▲ 15 黄褐色土 掘り直し①
13	▲ 暗黄褐色土 (風化土層) 掘り直し②	13	▲ 16 淡黒褐色土
14	▲ 黄褐色土 掘り直し①	14	▲ 17 黄色褐色土
15	▲ 暗黄褐色土	15	
16	▲ 黄褐色土	16	
17	▲ 暗黄褐色土 (風化土層)	17	
18	▲ 黄褐色土	18	



第70図 SD-06出土遺物 (3分の1)

3) 中世～近世

a 溝と出土遺物

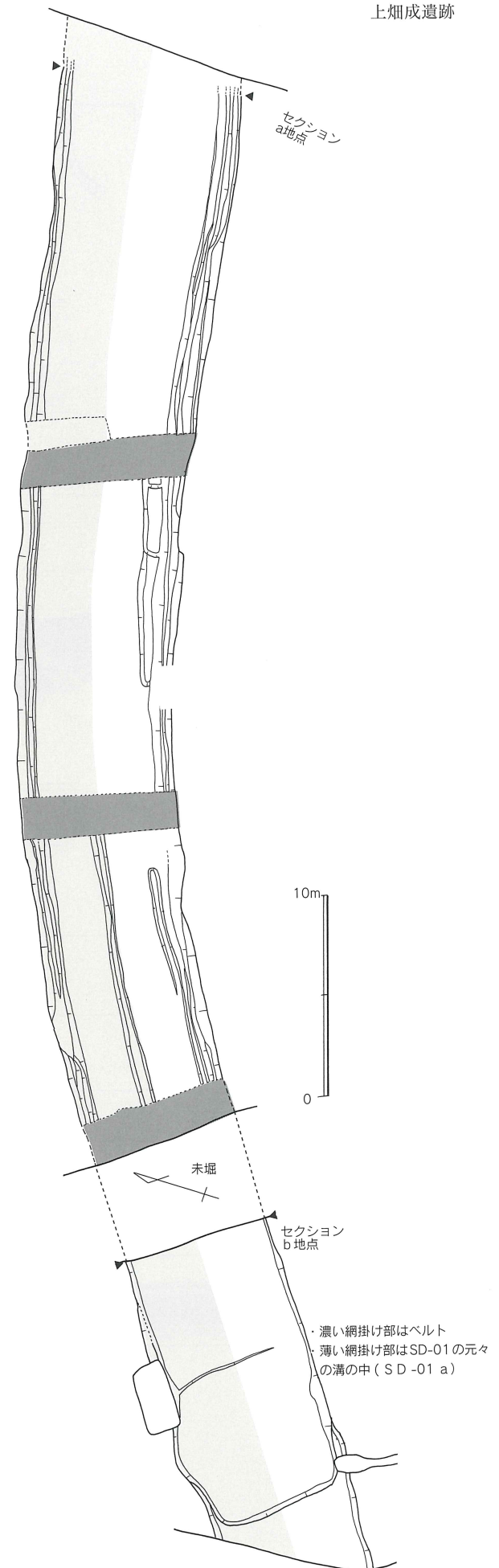
SD-01 (第71図)

調査区の南側を東西に伸びる溝で、最大幅7.0mと大きな溝である。深さは検出面から1.1mであるが、断面図(第75図)からわかるように、一度大きな拡幅が行われており、上面の水田化がなされている。当初の溝をSD-01 a、拡幅後の溝をSD-01 bとすると、SD-01 aは、推定幅4.2mで深さ1.0m以上の溝であったと考えられる。最下層には暗褐色の水成堆積による粘質土が堆積しており、水路であったことがわかる。そして、その溝が埋まりきる前に、SD-01 aを埋めた上で3m近く南側に拡張しSD-01 bを作っている。

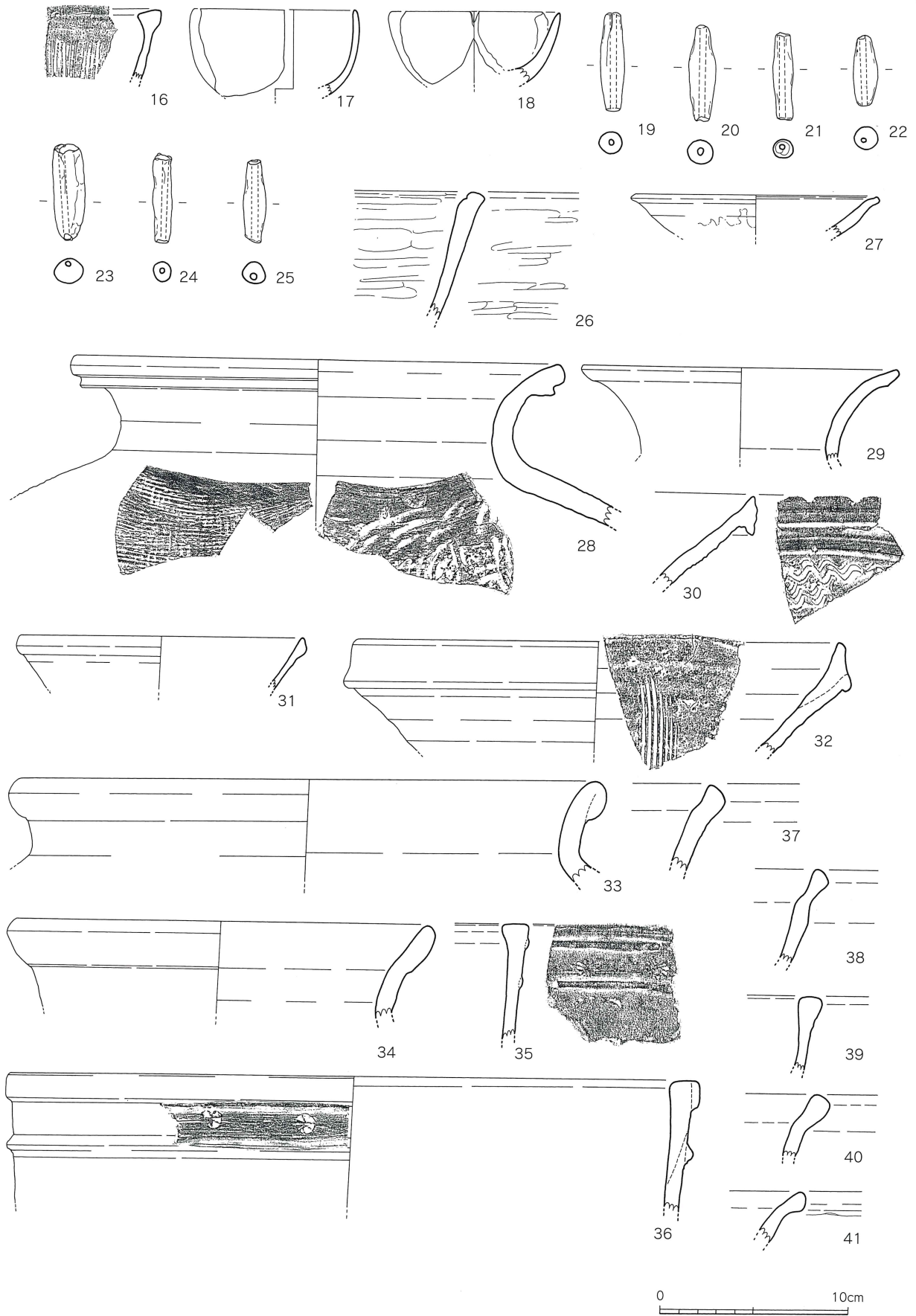
第75図上側の1層は60年代の圃場整備以後の水田に伴うもので、2層がその直前に畑地であったことを示す耕作土。3層は畑地化する前の水田層で、明治21年段階の旧字図の地目に相当か。4層の上部は近世後期の遺物を含む水田層。5層はSD-01 aを埋めた土壌で、上部是水田床で硬化している。

出土遺物は、第72図16から第74図88で、その内16から27は2層から4層の一括資料である。16は中国産と思われる播鉢で、16世紀後半のもの。17と18は18世紀後半の肥前系染付碗。26は土師質の鉢、27は唐津焼溝縁皿。28から88は各層位出土遺物。28から30は古墳時代の須恵器。4層から5層出土のものでは、31の白磁碗や32の備前焼播鉢、34の須恵質の甕、37から41の瓦質土器鍋、鉢類、35、36の火鉢、44の播鉢、42の土師器坏、43の土師器小皿がある。上部の2層から3層出土のものでは、46から64の陶磁器類と65の瓦当がある。

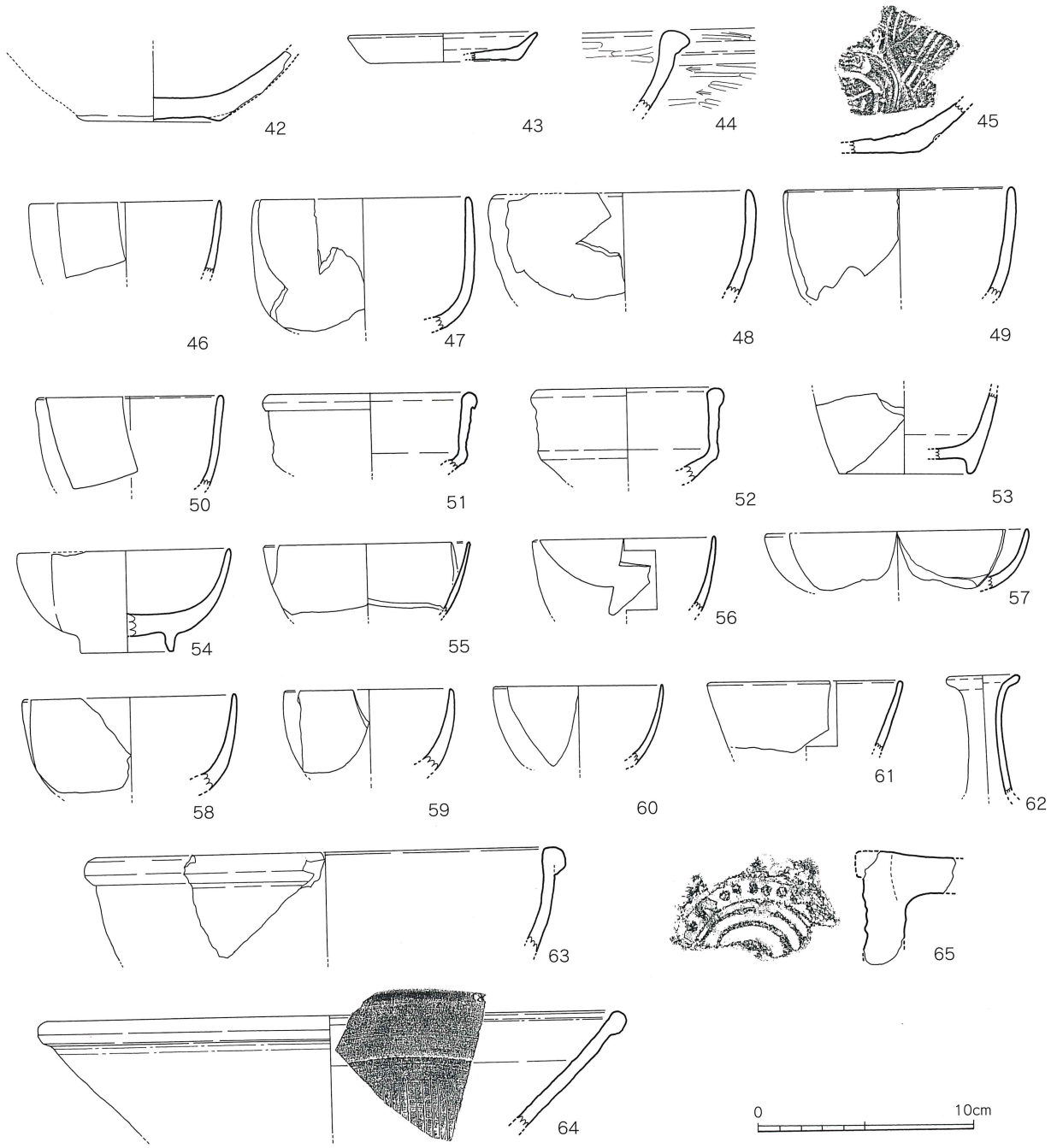
すなわち、4層と5層には一部12世紀代のものも含まれるが、主体は16世紀代であり、掘削時期も16世紀代と考えられる。埋没は2層と3層出土遺物の主体を占める陶磁器類が18世紀後半であり、この時期には中位までは埋まっていたものと考えられる。



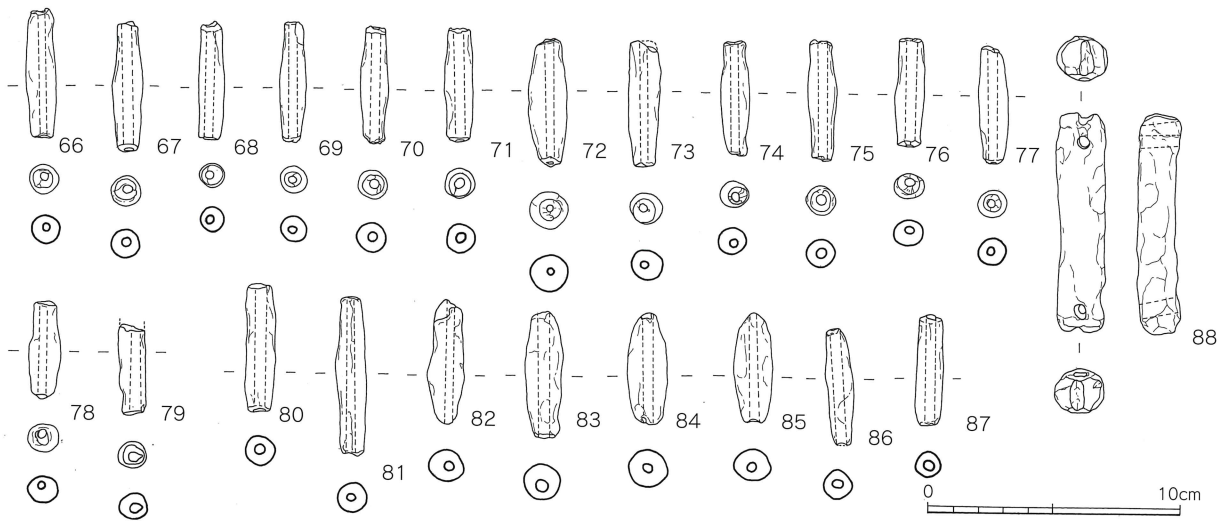
第71図 SD-01 (300分の1)



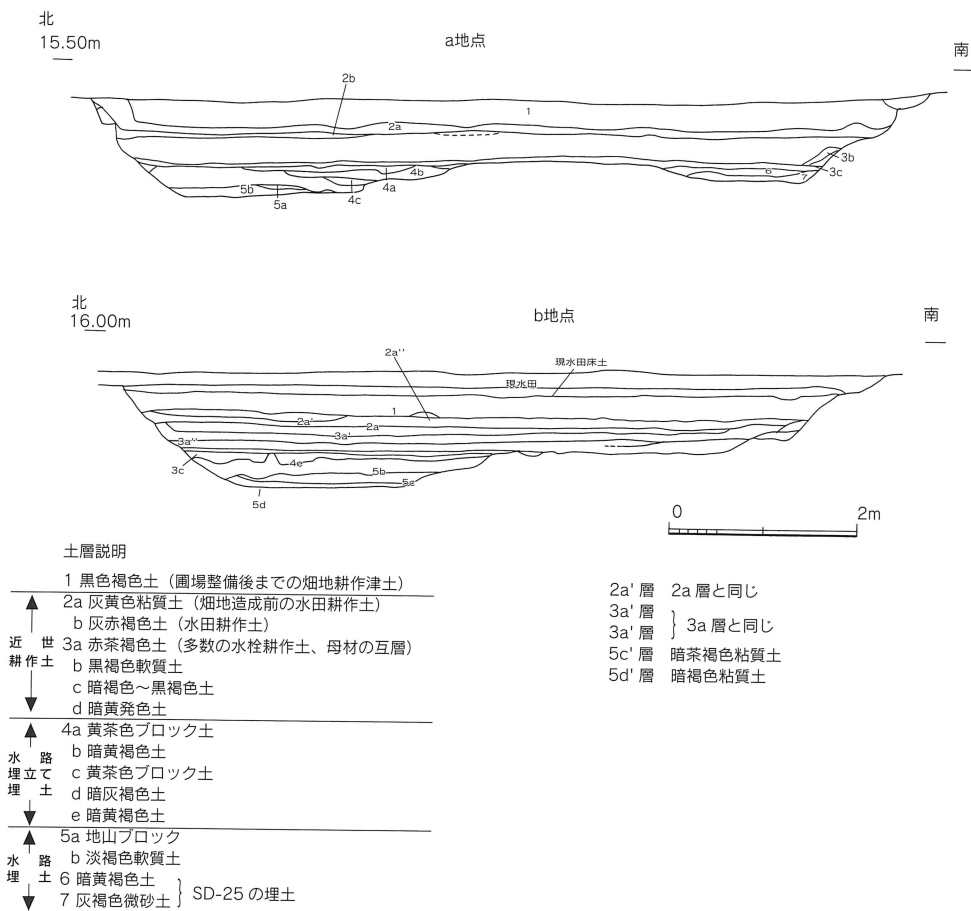
第72図 SD-01出土遺物 その1 (3分の1)



第73図 SD-01出土遺物 その2 (3分の1)



第74図 SD-01出土遺物 その3 (3分の1)



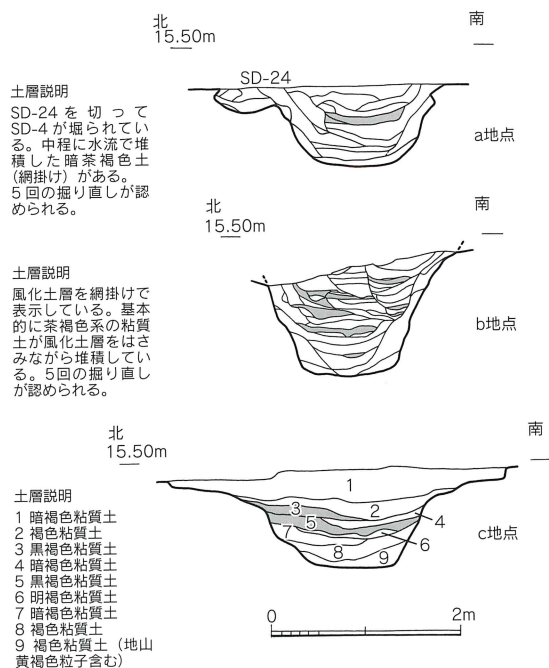
第75図 SD-01 土層断面図

SD-04 (第76図)

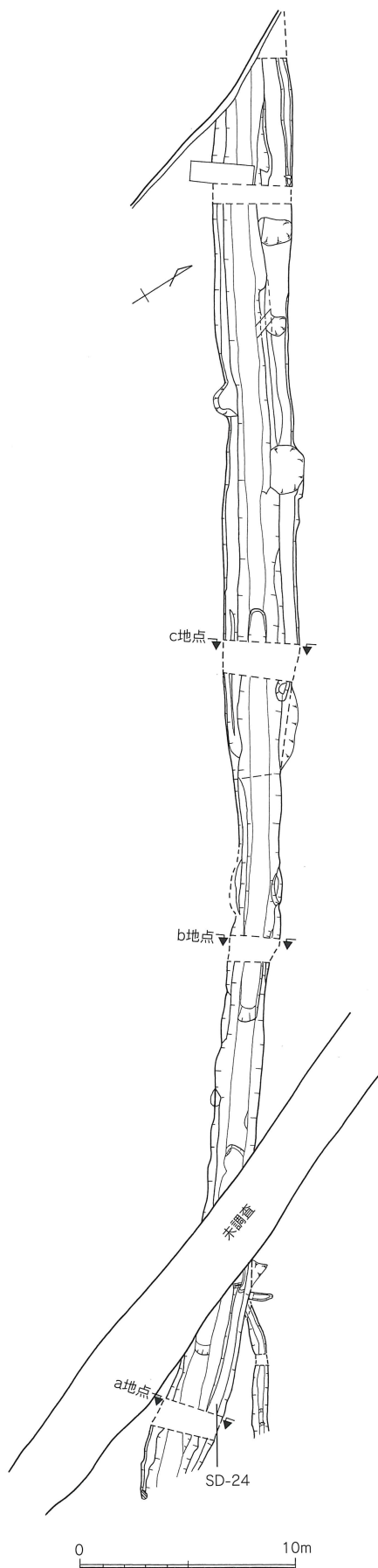
調査区北部で南東から北西に延びる溝。幅最大幅3.6m、平均で2.0m、深さ1.1mの溝で、やや南側に湾曲しながら延びる。底面の標高は調査区内の最も東側で13.3m、最も西側で14.3mと1mの差があり、この溝は東側から西側に向かって水流があったことがわかる。断面図(第77図)を見ると、少なくとも4回の掘り直しが認められる。最下層には流水で堆積したと考えられる淡黒褐色土があり、途中に数回の風化土層を挟む。

遺物は、第78図89から100である。89は須恵器高坏。90は肥前系染付で18世紀後半、91は福岡産(高取、上野系)陶器で17世紀初頭から前半、92は土師質甕(古墳時代)、93から95は瓦質土器鍋、96と97は瓦質土器火鉢である。98は磨石、99は敲石、100は砥石である。

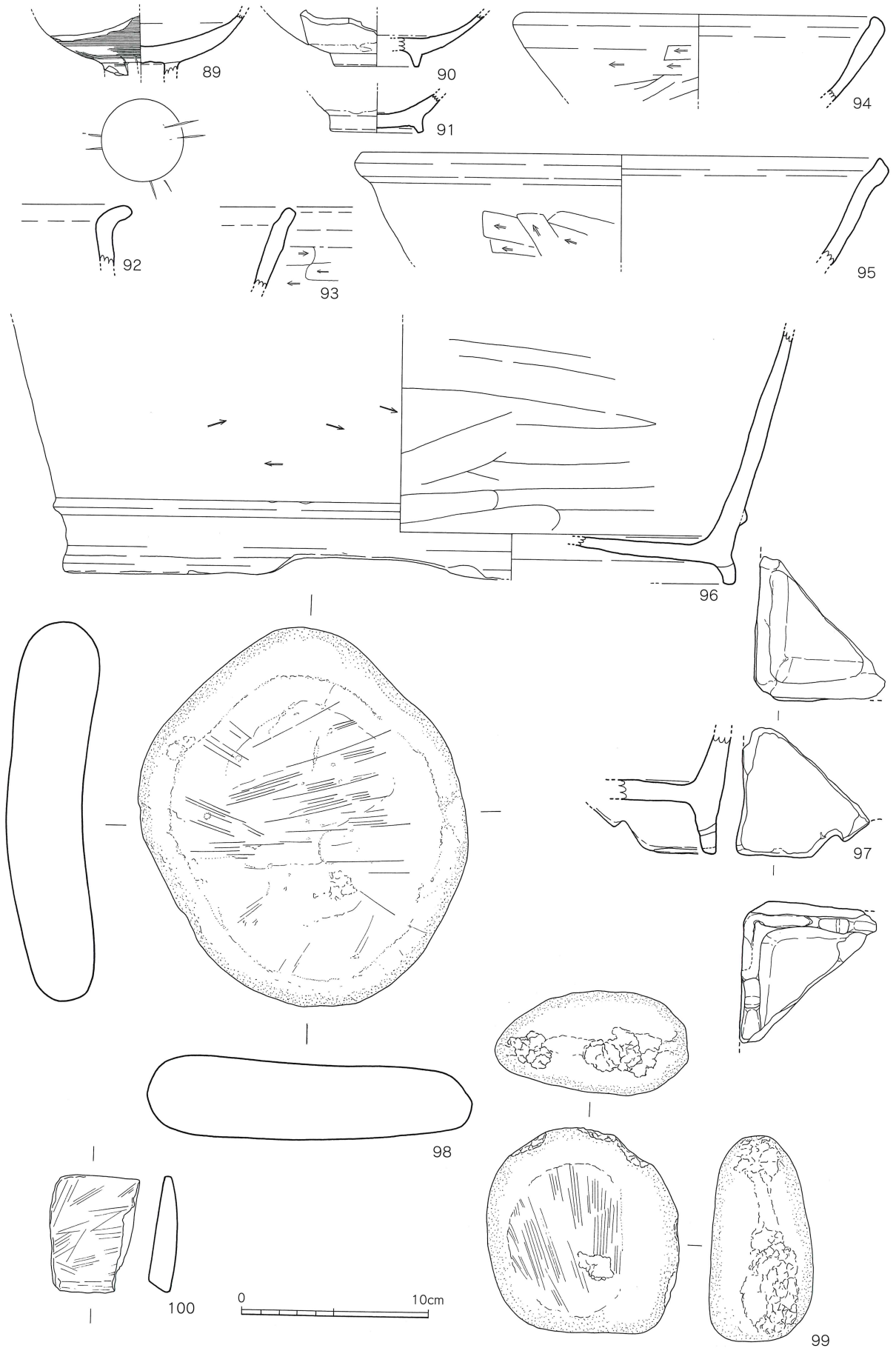
層位毎の取り上げが不十分であったが、瓦質土器が下層から出土しており、SD-04の掘削は瓦質土器の示す16世紀に遡ると考えられる。



第77図 SD-04土層断面図(80分の1)



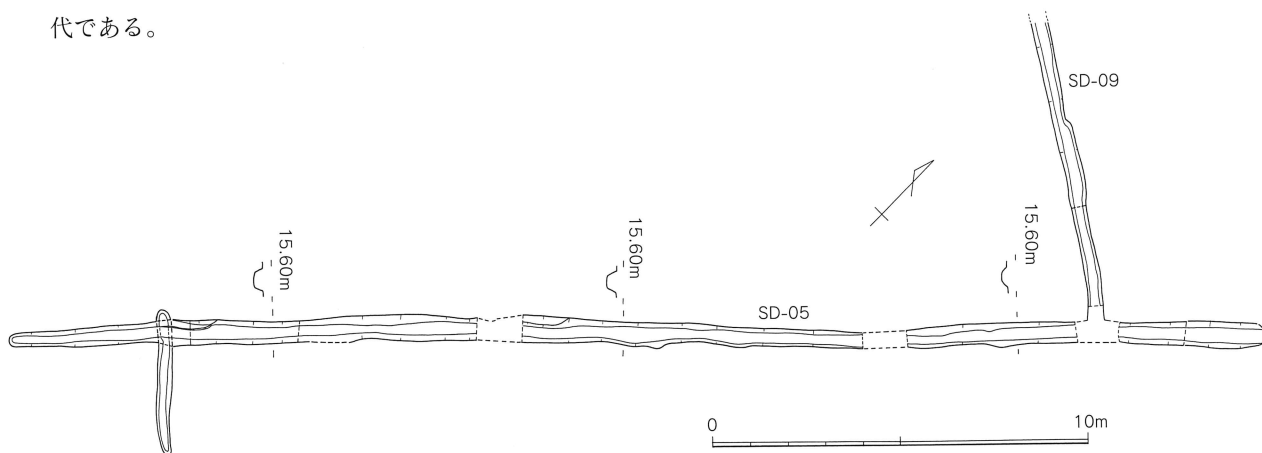
第76図 SD-04(300分の1)



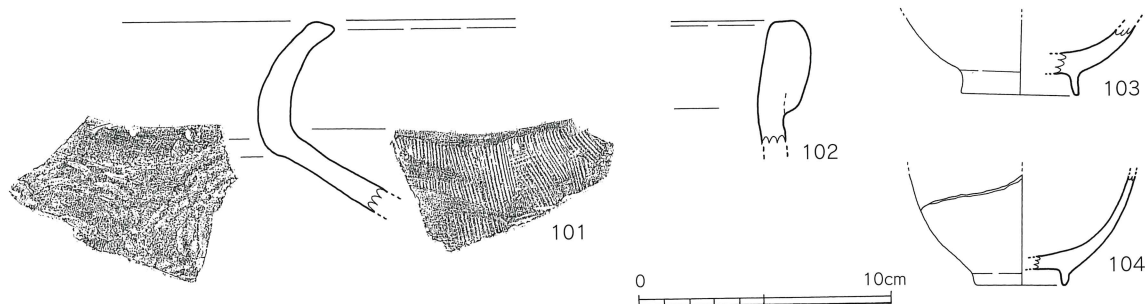
第78図 SD-04出土遺物 (3分の1)

SD-05 (第79図)

SD-04を切って北東から南西に向けて延びる溝で、幅0.5~0.6m、深さ0.3~0.4cm、検出した総延長は33mである。出土遺物は第80図101から104で、いずれも溝の時期を直接示すものではない。101は須恵器甕、102は中世5~6a期の備前焼甕、103は18世紀後半の肥前系染付、104は型紙摺りの染付で明治10年代である。



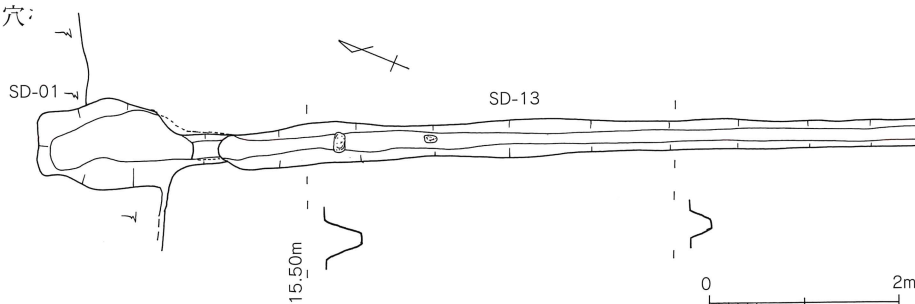
第79図 SD-05 (200分の1)



第80図 SD-05出土遺物 (3分の1)

SD-13 (第81図)

調査区南西部で検出された溝。SD-13は幅0.4mで深さ0.4mである。SD-13はSD-01の壁にトンネル状に穴



第81図 SD-13 (80分の1)

その他の溝

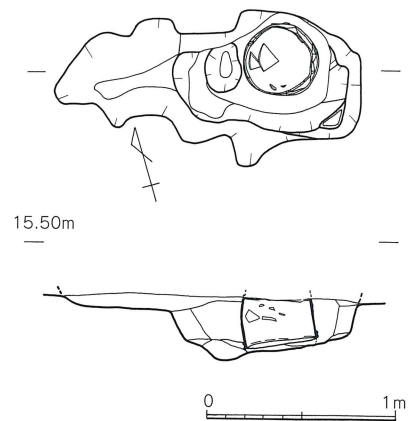
上記した溝以外にも、SD-03、07、08、09、10、20、23、24、25がある (SD-02は現代)。これらの中には圃場整備事業 (昭和50年代) による掘削以前は使用されていたものも含まれている可能性がある。遺物の出土が無くその峻別は出来なかったが、田代遺跡でも見たように、明治段階の旧字図に見る地割りと重なるような溝もあり、土地を区画する溝あるいは水路として機能したものと考えられる。SD-17はSD-04に一部重なりながら途中で北東方向にほぼ直角に曲がる溝で、S-18とした近世以後

b 墓と出土遺物

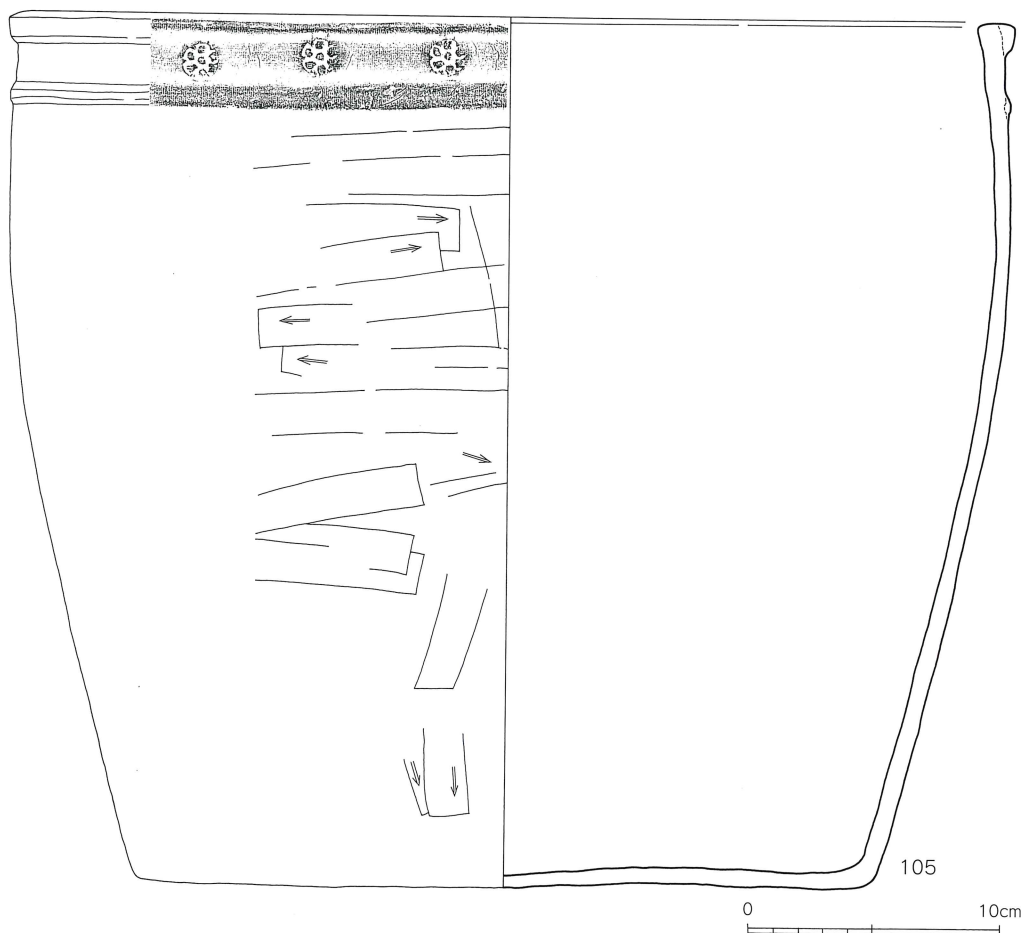
ST-16 (第82図)

SD-4とSD-5が直角に交わる地点に位置する土坑で、内部には瓦質火鉢が倒位に埋置されていた。土坑の大きさは東西1.0m、南北0.6mで、残存する深さは0.27mである。火鉢胴部の3分の1ほどが削平されていることからすれば、本来の土坑はさらに10~20cmは深かったものと考えられる。火鉢の外側を覆う埋土は地山の黄色土ブロックを含む黒褐色土で、火鉢内部の土壌はぼろぼろとした黒褐色土である。内部の土壌は、本来空洞であったところに後に流入したものである。さらに、伏せた火鉢の内側からは人の奥歯と臼歯が出土したことから、墓であると考えられる。

第83図105の火鉢は、口縁端部が肥厚し、その下位に一条の断面台形状の突帯を廻らせ、その間に梅花文がスタンプされている。スタンプは3個一組で6ヶ所に押される。



第82図 ST-16 (40分の1)

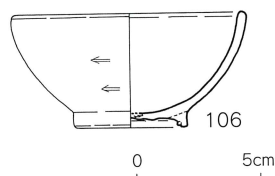


第83図 ST-16出土遺物 (3分の1)

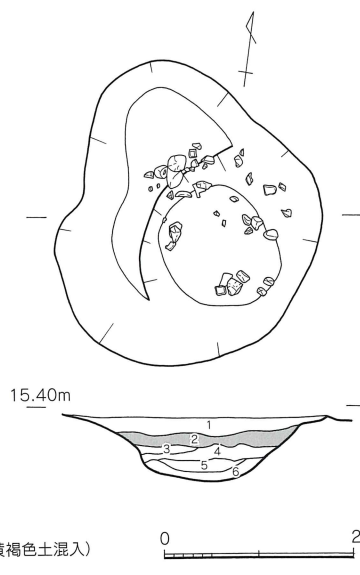
c 土坑と出土遺物

SK-28 (第84図)

SD-9に隣接して築かれた土坑で、南北3.2m、東西2.8m、深さ0.68mの不整な楕円形を呈する。内部からは角礫と伴に瓦質の碗(第85図106)が出土した。口径9.4cmの小型の碗で、高台が附く。16世紀後半のものである。



第85図 SK-28出土遺物 (3分の1)



土層説明
 1 暗褐色土
 2 黒色土
 3 黄褐色土
 4 暗褐色土
 5 褐色土 (黄褐色土混入)
 6 明褐色土

第84図 SK-28 (80分の1)

d 水田

S-18 (第61図)

調査区東側に広がる近世以降の水田である。SD-04の東側は一段低く、その部分に水田層が残っていた。SD-17が、S-18の水田に伴う用水路と考えられる。

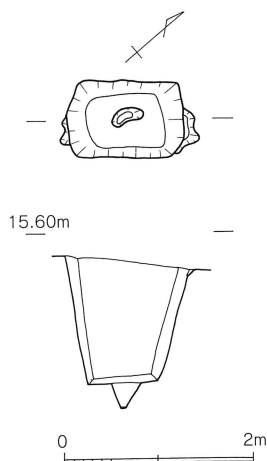
4) その他の遺構と遺物

SK-14 (第86図)

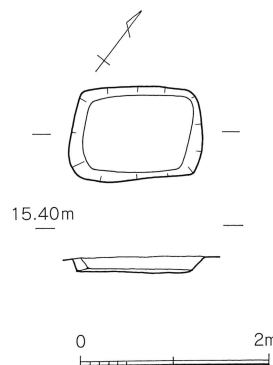
調査区南西端で検出した土坑で、長軸1.22m、短軸0.81m、深さ0.9m前後の長方形を呈する。床面には、深さ15cm程度のピット(長さ33cm、幅13cm)が1ヶ所ある。検出面では黒色土が広がり、下部には淡黒褐色土が堆積していた。形状から陥穴と考えられるが、出土遺物は無く時期は不明である。

SK-21 (第87図)

SD-01とSD-06に挟まれた東寄りで確認された土坑で、長軸1.40m、短軸0.94m、深さ15cmほどの隅丸長方形を呈する。黒褐色土が堆積しているが、遺物の出土はなく時期、性格とも不明である。



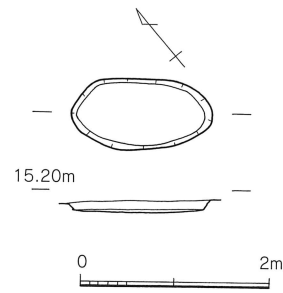
第86図 SK-14 (80分の1)



第87図 SK-21 (80分の1)

SK-22 (第88図)

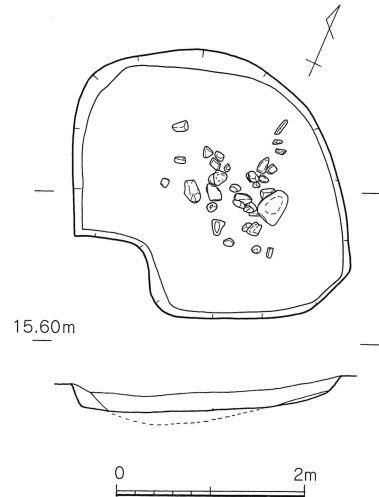
SD-06の埋土を切って掘られた土坑で、長軸1.49m、短軸0.72m、深さ10cmほどの長楕円形を呈する。黒褐色土が堆積しているが、遺物の出土はなく時期、性格とも不明である。



第88図 SK-21 (80分の1)

SK-30 (第89図)

調査区中程の西端で確認された土坑で、一辺1.4mほどの略方形を呈し、深さは20cmほどである。礫が多く出土したが、土器の出土はなく時期、性格は不明である。



第89図 SK-30 (80分の1)

第4節 小結

90図に見るように、田代遺跡と野田遺跡に挟まれた台地上に立地する上畑成遺跡は、古代以降水路の通る場所として利用されていた。その中で、水田が形成されたり、小字名でみるような「畑地」となったりしたのであった。

縄文時代の遺構は田代遺跡と共通するものであり、時期も等しい。弥生時代から古墳時代の遺構は無いが、後の時代の遺構に土器が流れ込んでいること、田代遺跡や野田遺跡の状況を見ると、上畑成遺跡の周辺で古墳時代の集落が展開していたのは間違い無い。

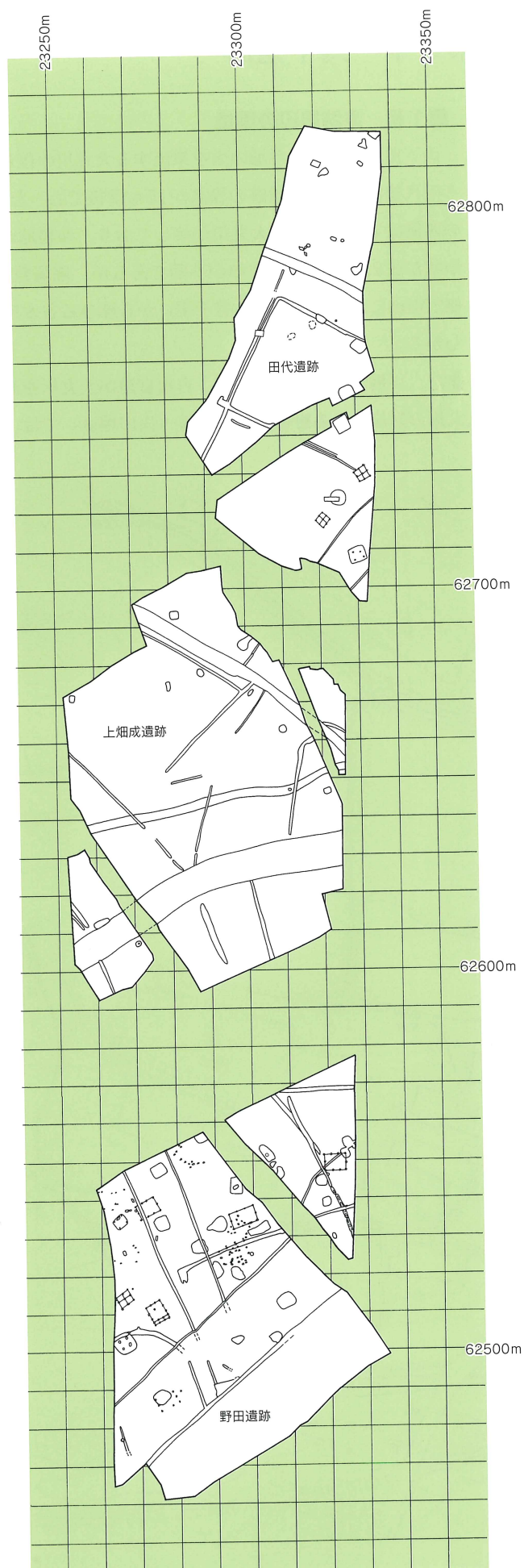
古代になると中世以後の遺構の中に須恵器がかなり含まれており、この付近に古代の集落が存在したことをうかがわせる。そして、8世紀末から9世紀前半にはSD-06の水路が掘削される。注目されるのは中世のSD-01とほぼ方向が共通していることである。このことは、水源の共通性も示唆している。

丘陵の南奥には今は埋め立てられているが「から池」と呼ばれる溜池がかつて存在していた(第60図旧字図参照)。ここからは水路が伸び、犬丸あたりに給水していた。この水路は、今回の調査で確認されたSD-01そのものであり、その掘削が16世紀まで遡ることが確認された点は、この地の開発を考える上で重要なことである。さらに、SD-06は古代まで遡り、水源が同じであれば、溜池灌漑の開始が古代に遡ることになる。

右図は上畑成遺跡と田代遺跡、野田遺跡の関係を示したものである。台地平垣部のピークは上畑成遺跡と野田遺跡の間あたりにあり、田代遺跡・上畑成遺跡と野田遺跡はそれぞれ別の谷を望むことになる。

野田遺跡の主体をなす時期は8世紀後半から9世紀前半の集落であり、上畑成遺跡のSD-06の開削、すなわち台地上における溜池灌漑の開始とつながりを持つ事が想定できる。

参考文献『北小批把・野田遺跡』大分県教育庁埋蔵文化財センター2007



第90図 上畑成遺跡とその周辺 (座標は世界測地系、上方が北)